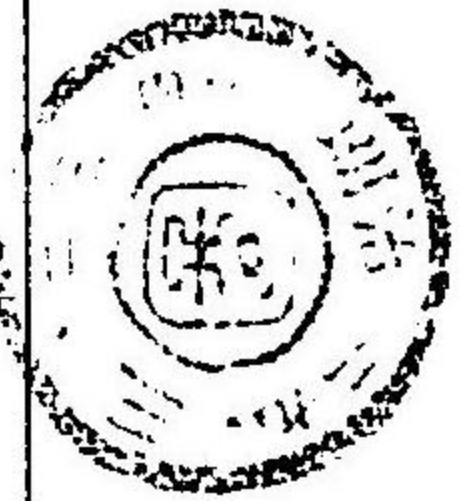


CHRISTIAN ETHICS

BY  
NEWMAN SMYTH

基督教道德學

米國 スマイズ博士原著  
日本 高橋五郎先生翻譯



東京 一二三館發行

目次

基督教の理想

第一章

基督教の理想の啓示……………自一至六十頁

(一)歴史上の基督教に於て垂賜せられたる理想……………八頁

(二)基督教の理想の歴史の間接媒介……………十九頁

一、舊約に於る道德的理想……………二十二頁

二、新約に於る道德的理想……………二十三頁

聖書と信仰との關係……………四十二頁

(三)道德理想の漸進的顯現が基督教道德に

對する意味……………五十二頁

第二章

基督教の理想の本質……………自六十四至百七十八頁

(一)聖書中の至善觀(舊約)……………七十六頁

新約聖書中の至善觀……………八十五頁

(二)基督教の意識に於る理想……………百四十二頁

(三)基督教の理想と他種の理想との比較……………百五十三頁

第三章

道徳的理想の現實……………自百七十九  
至三百十五頁

(一)歴史前に於る道徳開發の程度……………百八十四頁

(二)道徳開發上の律法期……………二百一頁

(三)道徳開發の基督教期……………二百五十一頁

第四章

基督教理想の現實したる形狀……………自三百十五  
至三百五十七頁

(一)信仰元素の確據……………二百八十八頁

(二)心理學上信仰の有効なる事……………二百九十二頁

(三)信仰元素が基督教に於るの特用……………二百九十三頁

愛は自ら己れの貴きを信ず……………三百三十二頁

愛は己を人に願與す……………三百三十四頁

基督教の徳行の起原……………三百四十三頁

基督教的品行形成の歩履……………三百四十七頁

新生活の成長發育……………三百四十九頁

第五章

基督教の道徳的理想の現實し來る方法……………自三百五十八  
至三百八十二頁

第六章

基督教の理想が現實すべき領分等……………自三百八十二  
至四百二十八頁

第七章

基督教の道徳的主動力……………自四百二十八  
至四百三十九頁

# 基督教道徳學

米國博士 スマ イ ス 著

高橋五郎 譯

## 基督教的理想

### 第一章

#### 基督教的理想の啓示

道徳學者は理想を有する人なり。道徳家は其人生に銘刻せんと欲する善を成る概念を持來るに非ざれば道徳の師として人中に現はるゝを得ず。道徳上の立法家は必ず是れ聖山に於て或る典型を示されたる者ならずんば有るべからず。道徳は理想の或る形像を以て吾人の意識に入來り、其處に滯遯す。吾人は一層善美なる事の思想せらる可く、若くは作爲せらるべきを覺得す。而して、ペテロの如く、我等異象の何物たるを考察しつゝある間に、該異象が就て以て應驗すべく、由て以て解釋せらるべき事業は、既に來りて、我等を戶外に待んとす。使徒行傳十章十

七。

描寫的道德學は既に地上に道德として存在するを得たるが如き風俗及び習癖を單に叙述するに或は止まらん、然れども格率的道德學は將に有んとする者の或る觀念を每點に喚生し來らん、道德上の善てふ者の性質に關しては吾人の理論如何なるにもせよ、道德が斯の如く理想的なる者なることは認めざる可らず、如何に領會するにもせよ、此の善たるや是れ現實にせらるべき善なり、是れ人生及び人間社會に現實にせらるべき理想なり、是故に、道德學の大本領は其れの理想を論ずるに在りとす、理想は人間の道德的資本とも稱すべき者なり、是れ人生に放下して利子を得ずんば有るべからず、理想は道德學の發程點にして、亦是れ道德學の目的たるなり、凡そ道德學と稱するに愧ざる者にありてや、必らず其目的として達すべき善てふ或る思想を冒頭に放ち、其摘獲せらるゝまでは之を追て止ざらんとす、道德の學たるや、固より歸納的研究として運ぶべき者なりと雖ども、——而して又道德的理想の節目

たるや、固より學理を按して審決すべき者なりと雖ども、而も尙道德には必ず先づ善てふ或る觀念を立てずんば有る可らず、道德的歸納法の全步履は是れ善てふ者——即ち人々の欲すべく、且社會にて達せらるべき善てふ者の審決及び定解を期して其方向に進めらるべし、道德學者若し無上の善、即ち至善とは何ぞやてふ、人間の最大問題を形而上哲學者に譲りて一任するならば、最初には道德學の破産を惹起し、最後には心靈の飢餓を招致せんこと何の疑か有らん、抑も人類は何の爲に生れたる、何の爲に生くべきやと云ふ其最上の生存目的は何ぞや、人が此世に於て生涯致々と努め求むべき至廣至富の善は何物ぞや、一言を以て之を蔽はんに、人生の理想は何ぞや、人生を其夥多の絲もて織り成すべき何等の雛形を吾人は異象の山より獲きたりしぞや、按ずるに理想なき生活は無道德なり、斯る生活は毫も道德上の價值を有せざること、禽獸が其れ自身に於て全く道德上の價值なきが如き耳、理想なき日子は虛無なる日子なり、現在の外に毫も道德的なる目的を

求めざる人は、是唯蠢爾たる愚物のみ。要するに、無上なる善——人生を包容するの濶大なるや、天涯の如き至善——てふ或る觀念を懐くことは、人生に缺く可らざる道徳上の必要具と謂はざるを得ず。道徳上の理想を毫も有せざる人は、或は世に存らざるを得んも、生くとは謂ふ可らず。

吾人は、許多の關係に於て、下等動物と親密に相聯なれる者なりと雖も、理想を形づくるの此道徳力あるに由て、亦下等動物と異なるなり。試みに吾人が人間の理想を奪ひ去れ、然らば是れ吾人が存在の尊貴にして、且不死なるの徴跡及び保證を奪ひ去る者と謂ふべし。一切の下等受造物は、單に全能者の僕として存在する而已。如何となれば、下等受造物は、尙未だ萬物創造に於ける神の目的を與かり知ることを得ざれば也。然れども神の子輩は、最早僕にあらざ、彼等は神の友と稱せらる、是れ御子は御父の爲し給ふ所を知り給ふが故なり。夫れ人の子は、亦是れ神の子たる者にして、善く御父を知り、亦御父に知られ給へり、彼は即ちキリス

トにして、神の觀念——人類の永遠なる理想——を視且之に従がひ給へり。

是故に、道徳の此の如く理想的なる者なる事は、——之を審決する方法は如何に歴史の若くは歸納的なるにもせよ、——我等之を最第一位に置き、以て基督教道徳學の全科程を照さしめずんば有るべからず。故に我は茲に先づ基督教の理想を論ぜん、と欲す。敢て問ふ、基督教に依れば其の爲に人の生き得る最上の目的は何ぞや。至善てふ者に關する基督教の觀念は如何なる者ぞや。

基督教道徳學の此の第一の問に正しく答ふるを得ん爲には、我等まづ第一には基督教の理想の吾人に與へられたる模様、即ち其が經て以て啓示せられたる歴史的なる步履を綿密に考察するを要すべく、第二には、其節目たる、其が知られたる限りは、或は審決するを得べけん。故に、基督教の理想の啓示は、其性質何如と先づ考究し、然る後進んで一層仔細に之が節目を描寫せんとす。是より以往には、更に又基督教の理想が地

上に益々全たうせらるゝの方法につきて觀察する所あるを要す。是故に、基督教的理想は歴史上より得來れる者なりとの確定事實を以て吾等は論端を發せんと欲す。是れ單に抽象的なる推論法を以て究め得たる者に非ず、若くは又哲學的に實際生活を道德的情操に蒸昇して得たる者にも非ず、理想は理想的に非ず、歴史的に傳へ且教へたる者に係る。基督教に於ける人生觀は、哲學者の新工夫にも非ず、聖賢の夢想にも非ず、否、至高者の榮光を預言的に想像せる者にてすらも非ず。基督教的理想は其榮光が歴史上に形を成したる者に存す。基督教的理想は、其始めて世人に啓示せられたるや、人々の預て思想したる、若くは想像したる、若くは推理したるが如き者には非ざりき、是れ其既に見且聞たる所の件に係れり。基督の見證者は明言して曰く、我等は見し所、聞し所を汝等に傳ふと(約翰第一書一章三節)。されば基督教的理想は靈眼を以て照し來れば、推擴窮り無きを得れども、其根柢に於ては是れ歴史的なる者と謂はざる可らず。人類てふ神觀念がナザレのイエスの身に在て歴

史上に現實したる處に吾人は堅固なる立脚地を有す。

諸基督教的理想が此の如く歴史上に現實となりて啓示され來れるには、左の若干要點を經涉したれば、今より之を逐次に講明せんと欲す。

第一、此理想は基督の身に於て人類に垂賜せられたり、實にキリストは之が眞正の儀表にして、キリストの靈より發生する感化力は即ち是れ人々の生活上に於ける之が能造力たる也。

第二、一身に現實して顯はれたる此理想は、亦是れ基督教徒の生活及び證言に由て世に表現せられ或は媒介せられたり、而して此生活此證言は即ち是れ聖師の來格と神靈とが喚起し且注入したる者に係り、同時にまた是れ聖師の來格を證し且之を宣明する也。

第三、此理想は之が感化力より發生したる基督教的歴史の今まで進行し來れる間、亦幾分か既に現實にせられ、且許多の方向に於て人生に應用せられたり、今より以後も尙基督教的の生活と思想との進行上に益々現實にせられ、且益々解釋せられんとす。

使徒中の巨擘たる人の如きは、固より肉體に依てキリストを識し者なりしかども、猶是れ然<sup>さ</sup>ど今は早や斯<sup>か</sup>の如くに之を識るに非ずと明言するを得たり(哥林多後五章十六節)。斯く基督教も、其道德上の理想を歴史上のキリストに依て識たる者なれども、亦今よりや靈に由て之を識り之が恩恵と真理とを日に月に益々明らかにせんとす。是れ靈眼を以て看取し、且靈性を以て率由すべき者とす。基督教的理想を領會するの現在法及び將來法は、之が精神と道德的に合一するに由るに在りとす。故に曰く、凡そキリストの靈(精神)なき者はキリストに屬せざる者なりと(羅馬書八章九節)。

### (一) 歴史上の基督に於て垂賜せられたる理想

新約書其物に關しては、縱し考證學上より如何なる疑問の提起せらるゝ者あるにせよ、我等は基督教的道德を講ずるに當りて、毫も之が爲に惑ふを要せず、教會に傳はれる使徒の證言(基督に對する者)に後人の挿

入したる文字あるや否や、若くは實録ならざる傳説の加はりたる者あるや否やと辨知する事は、我等の如く、基督の身上に耀やける道德的理想を直接に覺得せんとする者に缺く可らざる必要條件には非ず。道德上我等に關する者は、福音書中より直接に照映し來る大人物にこそ有るなれ。我等は福音書中に絶勝絶妙なる大徳行家の玲瓏として照耀し出る者あるを發見す。

敬虔なる信徒は或は論じて曰ん、新約聖書中に基督が照映するを見るには、歴史上のイエスを之が原因として信ずるを要す。曰く、斯く世間に太く超絶したる人物てふ觀念は唯是れ其神妙なる原形を實際に目撃したるより出ることを得たる而已、是猶太陽の影が澄める湖水に映ずるは天に太陽の現前する明證なるが如し。且又、我等はイエスを道德上より領會する所より更に進んで、イエスの身位、即ち形而上的存在に關して若干の結論を抽出するを得べし、何となれば、是の如く道德上無比絶倫に且完全圓滿なる人物には、斯る神妙の存在、即ちありて之が自



然の根基たらざる可らずと思はるれば也。されば此の所謂人の子は是即ち神の子たること必せりと我等は論結せざるを得ずと。——但し茲に道徳を講究するの領分たるや、固より基督の生活に對する是等一層神學的なる解釋と甚だ親密に相併行すとは雖も、此二者を混同するを要せず、我等は毫も許多の考證的疑問に抑留せらるゝを要せず、又は其賜はれる理想に對する我等の道徳的領會を每歩每點神學的に定解するを要せずして、其道徳的講究の徑路を前進するを得べし。此理想たるや即ち是れ肉躰を衣、恩恵と眞理にて充ちつゝ、イエス、キリストに於て吾人に垂賜せられたる者なりとす。

我等は基督教的理想は其根源及び其模範を福音書中のイエスに有すとの事實より論程を發せんとす。

但し此の言説たるや二種の眞理を含蓄する者にして、一層綿密に考究するを要す、即ち吾人は獨創なる (original) 道徳力、及び創作する (originative) 道徳力を兩つながらイエスに認め得たり、吾人がイエスに發見す

る道徳的理想は、先人の糟粕を嘗る者に非ず、是即ちイエスに在て獨創なる者なりき、而して又從來イエスの名を以て新道徳を創作しつゝありき。神より直ちに出たる光、人より取りたるに非る光、彼に宿れり、萬人を照す眞の光は世に來れり、(約翰福音書一章九) 此の本元獨創なる光は從來新生命及び新道徳界を創作しつゝありし也。

此等二種の言説中に於る其第二なる者に至りてや、凡そ眼ある者は之を疑ひ争ふ能はず、基督教は德行に關して全然一變したる觀念を呈し、德行の一新模標を示せり、是れアリストートルやプラトの懐ける德行てふ觀念と其種類を同じうする者に非ず、基督教の德行は、其が人中に始めて現はれたるや、全く新らしき物として、全く別異なる道徳的模標として、顯はれたり、最初の基督教徒は、道に從がへる者として世間に知られたり、使徒行傳九章二、該の道は世間の人々が嘗て踐たる何等の道にも其の趣を異にしたり、基督教の模標たる德行が過去に對するの關係は如何なりしにもせよ、又如何に人は該德行が世に現はれたる當

時の形勢を解釋せんと求むるにもせよ、基督教的模標の特殊、明確、獨絶無比なる事は、是非とも之を許さざる可らず。

(註) 新約聖書中にも既に然か認められてありき、即ち是は新たに生るゝ事と説かれたり、基督教徒は新らしき人なりき、十字架に釘られたる人なりき、世には死して、キリストと偕に甦へりたる者なりき、約翰三章三、以弗所書四章二十四、哥羅西書三章十、加拉太二章二十四、四章十四、哥羅西三章一より四。

然し乍ら、此特に稱する新模標的徳行——基督教の此新世界——は、其十分なる原因として、如何程までに新道徳的人物の出現するを要せしや、若くは如何程までに新道徳的生命及び道徳上の更新力が人間に降生するを要せしや、是は抑も別問題たるなり。

此の疑問に對する十分の答辯は、教理神學の領分に屬すと雖も、我等茲に基督教の道徳的理想に達せんと務むるに當りて、全くは之を不問に附し去るを得ず。是故に我等は次に基督教的理想の本元獨創なる事に

關して、——其が道徳上の觀察點より必要と思はるゝ限りを以て、且は又基督教に於ける至善てふ觀念を後に論定するに當りて堅固及び明瞭を道徳の領分に來さんが爲めに、——此の幾層濶大なる問題を講求せんと欲す。

イエスの垂示せる道徳は如何なる意味にて本元獨創なりしや。固より是れイスラエルの歴史が之の爲に已に開拓したりし道徳兼宗教的地壤と全く何の命脈的關係も無くして突如と躍り出したる者には非ず。且又各人種<sup>エスエ</sup>の宗教てふ者の有する道徳的典籍中にも、我が福音書中の道徳的訓誨に彷彿たるが如き文字の幾分か散在するを發見するに難からず。イエスは道徳の師としてや、彼が訓誨の眞理を天下古來の道徳と全く縁を絶たしむる如き意味にては決して其道に全然獨創なる者と稱す可らず。吾人が人類の道徳的理想の圓成として仰瞻するは即ち歴史上のキリストたる也。我等先づ人間中の高尙深遠なる金言等を聞き、次にイエスが金口の訓誨を聞くや、全く新奇不明なる言語を耳に

するの思をなさず、否な却つて我等は感ずらく、基督に先だてる諸聖賢に就て我等は從來神の教訓の反響を聞きつゝあり、而して終に基督の永生の言に於てや唯一の神語を聞きたるが如しと、此唯一の神語は即ち本元獨創なる者にして、幾百千年來處々に反響しつゝ來れる者の圓滿せる者なりとす。

イエスの訓誨が道德上本元獨創なるの事は、天下の歴史上に於ける道德の血脈を斷割して、別に全然新奇なる道德系を之が代りに立てたる者とは見做すべきに非ずと雖ども、イエスの全道德的感化力が然か特絶無比なるの事實、イエスの福音の道德的生命の然か勝妙珍貴なるの實跡は、決して是れイエスの前に行なはれたる何等の道德系を以てしても解き去ることを得べきに非ず。イエスの道德は或る新光明の透徹したるあるを證す、我が主の道德的訓誨は直接の啓牖に係る真理の活力を其中に具有す。此種の道德的獨創の證據は、——イエスの精神内に於ける新道德的啓牖の證據は、我が福音書の表面に横たはりて見ゆ。イ

エスが道德に於て特絶無比なるの證據は、二種の歴史的研究線に沿ふて發見せらるべき者たる也。——第一に曰く、是より出たる道德的創作力は、是を其が十分の原因として復是に還歸す、第二に曰く、福音書中に鏡映せるイエスの身位は、即ち是れイエスの道德的に特絶無比なる、若くは人間以上のなる性質の自啓なり。

福音書中のイエスは是れ神なる者(the divine)が自己に向ひて啓示したる所の者に係る。イエスは己れの直接なる自覺中に天上よりの光を得たり。基督は反映したる光明中に其道を照し得たる者とは見え、神の現前よりする直接の光明中に確然玲瓏たる自覺を以て歩める者と謂ふべし。基督の見るや、知るや、言ふや、行なふや、毫も猶豫する所ある無く、多く思慮を運らす所ある無く、大いに疑惑するが如き形跡あるなく、——盡に屬する者とし、天父を識れる者として、——全然たる、八面玲瓏たる天眼を以て、極めて正確に、且極めて即時に、之を爲し給ふ。イエスの全訓誨には道德的なる直接ありて存す、幾分か之に接近したる者は預言

者及び先見者が賜はれる一時の天眼的靈悟に於て之を見ん、然れども其啓示する力の常に存して、着々明晰を極めたるは、則ち人間に未だ嘗て其比を見ざる所にして、其斬新なるや神より躬から特に啓示せられたる者に似たり。我等は福音書中のイエスが其明達を極むる靈光を以て人中に歩み、神の真理を看取せる極めて確實なる直覺を以て人間に住ひしを仔細に窺がふを得ん、此時に當りてやパリサイ人とサドカイ人の疑難、敵身方の質問、イエスの進路を百方に遮斷せんとし、或は蔭蔽せんとする有り、人生の罪累たる萬般の迷惑を驅り來りてイエスの智慧を擾さんと試みたるあり、亦是れ一大奇觀と謂ふべし。イエスの此の日常生活は是れ其中に天光を藏したるの明證と成らんとす。吾人はヨハナが昔し己に認めたる如く、「此光は人の光なりし」と認めざらんとすとも殆んど能はざるを覺ゆ。我等は考證上及び歴史上の探研を積んで歴史上のイエスに益々接近するや、益々精細に夫の何點に於てなりともイエスに似たる所ありし道德的教師輩を歴史内のキリストと十分

なる比較に驅り入るゝを得るに至り、又益々我等は夫の昔しイエスを捕へに遣はされ乍らも却つて之を放ち遣し官人輩の語——「未だ斯人の如く言し人あらず」(約翰福音書七章四十六)——に同意を表せざるを得ざるに至るなり。

先づ基督教的世々代々に日に月に廣がり來れる世界の新光輝を觀察し、更に轉じて之が淵源たる基督に溯り窺がふに於ては、基督の超然たる獨創の大業は、歴史の全背地より更に幾層の光彩を以て遠景に聳え立てるを見る可し。我等もし更に進んで世界の感化力——仁恤、改革、諸民の徳化、諸邦の感化、近世の歴史上に於ける老朽せる文明の嫩化、衰退せる開化の振作等——を其本源に追溯するならば、必らずや夫の道德界に王として生れたるナザレのイエス、キリストに達せん耳。

我等が眼前の用には惟左の要點を主張すれば足れり、曰く、基督教の道德は其權威を特絶無比なる歴史上の原因より得、其理想の化現を主キリストの聖身に獲たり。基督教の道德は善徳の何物たるかを單に描

摩するが如き者に非ず、至善てふ夢想を單に珍重するが如き者に非ず、是即ち己れの身を以て人間の理想を啓示したる一大靈覺者の言行生活に則れる者にして、此の言行生活たるや亦是れ天父の完きが如くに完からん事を求むる善徳を綿々として恒に吾人に嘘入する者たる也。是故に基督教的道德は基督の身に於て歴史上に與へられたる神出の人間理想が人生の諸領分及び諸關係を決うして世に開發し應用し來れる者と謂ふ可し。

イエスキリストに在て直接に與へられたる道德的理想は、之に由て喚起せられ且管理せらるゝ、聯綿たる日に月に膨脹する生活を経由して間接に世々代々の人々へ媒介せらる。基督教の此道德的經驗及び之が聯綿たる繼續は、二重の步履を経て實境に現實し來る者とす、即ち是れ教會が歴史上に聯綿として繼續する裏に、從來基督教的證言及び傳説に由て保存せられ、貽傳せられ、亦是れ各基督教徒の生活上に活現す。故に我等は次に基督教的理想の取て以て繼續し、且開發し來る此等二

種の形狀を進んで考究せんと欲す。

## (二) 基督教的理想の歴史的間接媒介

基督教に於ける善てふ觀念は、一は基督教的意識内に於て、一は成文の聖經中に於て吾人之を發見す、基督教的意識なる者は即ち是れ基督の靈の聯綿たる活事業とも稱すべく、聖經は即ち是れ——基督の靈の特別なる約束の下に在て基督の直接なる經驗より出で來れる者なるが故に——基督に在りし精神の尊信すべき發表なる者として採納せらるれば也。

但し基督教的德行及び本分を進んで特記し論定せんとする前に、先づ基督教的全人生觀の爲に正當に且終審的に我等が訴たへ得べき大權威なる者に關して、幾分か明瞭に理會する所無くんば有るべからず。基督教的理想が歴史上吾人へ媒介せられたる事に關して、只今茲に吐露したる概説は、聖經と基督教的意識との關係を更に幾層仔細に講求せ

んことを我等に向ひて要求するや言を俟たず然し乍ら我等の論法に於ては聖書を以て靈性の意識内及び人間の生活中に於るキリストの歴史の教化事業と全然相併行せしめたるを見るべし是れ斯の如くにして始めて始めて聖經の權威は維持せらる可く又領會せらる可きを以て也。聖書其物は即ち靈性に於ける經驗より生じたる者なり新約書は基督の特殊の經驗より生じたる者或は斯る經驗を附托したる寶藏なり聖書は預期的メツシア啓牘の經驗より生じたる者なり新約書は基督の特殊の經驗より生じたる者或は斯る經驗を附托したる寶藏なり聖書は斯の如く人間の經驗中に於て神靈の産出したる者として始めて能く人生の爲に理會さるべきの法軌たることを得べし聖書の天啓教化するや若し人間界に於る神靈の全教化事業と之を分離するならば若し人々が神とキリストとにつきて得たる全經驗中に於ける一要素として認識せられざるならば其威徳を失墜せんこと蓋し識者を待ずして明らかなるべし聖書の中に於ける神靈の教理は是れ世界の生活中に於ける聖靈の更に幾層濶大なる教理の特別なる一部分な

りとす抑も聖書の天啓に關する問題は要するに是れ人間の歴史内に於ける——特別にも教會の基督教的意識内に於ける——神靈の教化事業に關する全問題中の固より緊要なる部分には有ども亦是れ之に從屬する小部分たるに過ぎず教會といふ語を廣義にして若し基督教的人間社會の普通及び歴史の意識を包含する者とせば之を狹義にして某一宗派若くは一團體と同一なる者とせざるならば左の見解の如きは毫も躊躇する無しに反復して可なるべし曰く我等は敢て言はんこと愈々困難にならんとす(Lux Mundi, p. 338) 聖書の權威に關する此疑問は基督教的道徳のために我等が決定するを要する限りに於てするや實に左の如くならんとす曰く——使徒等がキリストの聖徳を直接に經驗したるより發し來れる若干の聖經にしてキリストの靈の初に結べる實たる者は後來の基督教徒に向ひて如何程までに氣節及び操行の爲に金科玉條たるべき者なるや。

故に我等は進んで、第一には、歴史上、基督教の理想は如何に若干の聖經に由て吾人に傳へられしかを覈べ、第二には、基督教の理想が斯く聖書に由て吾人に傳はりたるの事は、又同一の靈に由て人々の基督教的意識内に行なはるゝ、聖經の現在及び將來の媒介事業に如何なる關係を有する者なるやを究めんと欲す。

## 第一、聖經に由てする基督教的理想の媒介

## 一、舊約に於る道德的理想

舊約の時代は道德的理想の不完全には有れども尙眞實なる、而して漸々に開發しつゝある活氣及び勢力を表示す。舊約の道德は未だ完全ならず、許多の點に於て缺典あるを免かれず、其外部の制裁に於ても、其内部の心術に於ても、俱に是れ人類の爲に究竟なる道德には非ず、然りと雖も、亦是れ眞實の道德にして、一層善美佳良なる者を追ひ求め、其有せる眞正の道德的根柢より漸々に成長發育して、神恩の赫灼たる光明と成り、神恩の穠々たる結實となりぬ。舊約の道德たるや、其方法全く教

育的且進歩的なる者、其の全躰の性質一ら預備的なる者、又預言的なる者なりき。併し乍ら其預備的なるより生ぜる種々の不完全(缺點)中にも亦おのづから善美なる成果結實ありて預言書中に歴然存留するを認めずんば有べからず。我は後に至りて政治的道德をも論ずる所あらんとするが、該領分に於てや、或は昔日の群預言者は今日の教誨師たらんとす。舊約の道德縱や新約の圓成に達せざりしとすども、希百來國の預言者衆及び詩人輩は、道德上に於ける高尚なる希望及び理想を以てや、寔に天下の最も高遠なる、最も人心を鼓勵する、先生と謂はざるを得ず、而して又イスラエルの道德的法典は實に是れ正義、恭敬及び律法の練習校たるべけん者なれば、萬世の人々は最も高尚なる教訓を之に就て學ぶを要す。

## 二、新約に於ける基督教的道德理想

新約聖書は其基督の精神を直接に反映する者なるが爲め、又其特別に基督の靈を容受したる者なるが爲に、道德上に於て吾人の遵奉すべき

格率とはなるなり。

是等の文書中にはキリストより直接に出で來れる光ありて充ち満つれば、是れキリストの教會のために本元の金則たる者とす。世間に汎く行なはるゝ夥多の基督教書籍中若くは傳説中より此等の文書(即ち新約聖書と稱する者)を特に斯く選出したる理由は甚だ自然なる者なるが故に、亦最も正當なる者なりき。——即ち是等の文書は教會が保有するキリストの最も親近なる反映たりと認められたれば也。此等の文書は初代の基督教書籍中孰れの書よりも最もキリストに密邇し、最も直接にキリストの權威を帯びたり。

新約聖書が然か宗教界に王たる所以は、其筆作者たる人々若くは其傳誦者たる群信徒が主イエス、キリストに對せる地位の特絶無比なるに起因せり。親炙せる目睹者自からキリストの爲に證を成せしなり、第一の弟子衆や選抜の使徒衆に隨伴せる人士彼等の證詞を承けて書きしなり。此等の聖書は是れ復活したまへる基督の靈の初めに結べる果なり。

りとす。此等の文書は見證者たる使徒衆の中に行なはれりたるイエスの言行及び教誨を解釋したる者を載す。彼等の筆録せる文書(其中には彼等の隨伴者たる人々の手を経て彼等の心より出たらんが如き文書をも含みて)が吾人の格率若くは金則たるべきは、是等選拔されたる見證者輩がキリストに對する直接なる關係より起れる者たり、隨つて又彼等の文書に獨り寓在すと教會にて從來認めたる基督教的精神より起る者たる也。他の文書は其何たるに論なく此等イエスに對する直接の證詞と同一なる意味にては然く神聖なる能はず。但し此等の文書が斯の如く權威あるは直接にキリストの權威を其中に藏するが故なり。其權威は一に此等が基督教の真理の源たる者に特別に無比なる關係を有するより生ず。聖書が其飽までも眞實無妄にして萬々錯まる無きを得る所以の源は則ち基督其物たり、又基督の靈其物たりと謂ふべし。凡そ聖書の權威の淺深強弱は其文書がイエスの教誨とイエスの靈とに關係するの親粗及び確否何如に依て決定す。されば聖書は、其直接に



基督より出たりと稱する根源及び品質が考證學上の理由に因り或は内部の困難に因りて疑がはしき者とせられ、若くは曖昧なる者とせらるゝに准じて、其が聖經たるの價を薄んずる者とす。

是すなはち宗教上若くは道徳上には二種の格率(金則)的權威——信仰及び實行に於ける二様の規則——一はキリスト自身の教訓、一は使徒たちの教訓として、二種に分岐せる者——ある能はずと云ふ者に外ならずとす。他語を以て之を言へば則ち唯一つの究竟權威あるのみ、信仰上及び實行上には唯一つの裁制力ある而已——即ちキリストとキリストの靈是なり。

されば、舊約聖書の中に於て、既に發見せられし如く、基督を知るの知識に漸々發達したるの痕跡あるを發見し、又已に基督の靈の感應に由りて思想と生活の駸々基督教化したるの進歩あるを發見したるありとす。其は新約聖書がキリストの直接なる反映なる者、また基督に對する特に設備したる明證たる者たるの眞權威を毫も毀損する者に非ず。

新約聖書中に於てや自然に斯る痕跡は、舊約聖書中に於ける如く然か著き者に非ず、又斯る進歩の徵も同く然か顯然なる者に非ず。人生の全觀念は基督に於て大いに高尚にせられたれば、基督の弟子たる者の思想は直ちに星斗を塵せんとす。

然し乍ら、教理上に於ける若干の進歩、及び特別にも人生の實際問題に基督教の理想を應用するが上に於ける若干進歩の形跡は、新約聖書其物の中に於てすらも或は發見することを得ん。例へば使徒行傳の中及び使徒書翰の中に於てや、キリストを知るの知識に發達ありし形跡なきにしも非じ、又キリストの靈の新律法を以て人生萬殊の實際關係を規するに漸々明瞭と堅確を増し來りし痕跡なきにしも非じ。

諸此の如く宗教上に於ても亦道徳上に於てもキリストを知るの知識の進歩したることは、新約的歴史の天成順序に於て順次に相續で初代教會の教師また領袖となりたる偉人物を彼此比較して見るならば、自から明らかに成るべし。斯の如くキリストの眞理を賞翫し且之を生活

に應用するに於て一般に進歩ありたることは、亦是れ同一人たる使徒が前に書きたる書翰と後に書きたる書翰とを比較し見なば察知せらるべし。例へば、第四の福音及び聖約翰書は之を黙示録に比較するに、其言語と思想に於て猶太的なること彼よりも少なきや明瞭にして、其口氣と教誨とに於ては亦彼よりも純ら人間的にして、且普く基督教的なるを見るが如し、然るに彼れ黙示録も亦是れ同一の使徒が、其猶太的基督的を持せる年間に於て夙に書きたりし者ならんと思はるゝに非ずや。同様に、聖パウロが晩年に書たる書翰も亦彼が當初異邦人に道を宣べ始めたる時よりも段々に幾層穩かなる高響に達し、幾層明らかなる空氣を呼吸し、救贖の幾層大いなる光景を前途に望見したるを示すなり。彼は、其經驗の潤くなるに隨ひ、其傳道事業に由て萬殊の人と相接觸するに隨ひ、其使徒たる行徑が確然たる且凱然たる終に近く隨がひて、益々深く基督の靈を知り、益々十分に福音の世界大なる、否な宇宙大すらなる、意味を曉りたり。

是等の聖典は、之をして信仰と實行の金則と成らしめんとするには、全躰として之を觀せざる可らず、即ち是より果して竟に出で來るが如き道德上の教訓を按して之を全躰に通觀せずんば有るべからず。イエスキリストに寓して現はれたる基督教的理想は、保羅一人にて、又は約翰一人にて、之を世に示したるに非ず、又は此等の使徒の孰もが其基督教の眞理を漸々に曉得し行くに當りて、某一時期に限りて之を世に示したるに非ず、實は是れ一切の預言者及び使徒の相協同せる十分なる、終極なる證言に由て吾人に示されたる者とす。聖書の中には新約書の末卷に至るまでも其教誨に斯の如き道德上の發達ありし事を認むるや、茲に必ず一疑問ありて我等の注意を喚び起し來る、曰く、基督教の眞理の此發達は彼の點に止まりしや、若くは又此等の聖籍が、嚴然として反映する道德上の理想は、是よりも更に進んで發達したるや、基督教道德の發達成長は使徒の教誨を以て始まりたりと許す以上は、何が故に其發達成長は使徒たちの道德的教誨を以て終

を告たりと思ふべきや。基督教の理想の地上に漸々現實と成り來る中に於て吾人の認むべき或る他の原則——即ち此等の聖書の權威を補足すべき者——はあらざるや。

是に於てか我等は更に歩を進むる前に先づ聖書と信仰との關係を明らかにすること必要となれり。此點に於て活眼と明瞭とを缺かば、我等が全體の道德的議論は徒に紛亂に陥らん耳。一方にては文字の奴隸となるの危険ありて、或は基督教を自由に濶く人生に應用するを得ざらしめんとす、又一方にては外部の權威及び聖書の指導を濫りに輕んじて獨立に奔るの危殆あり、箇人は忽ちに信仰の公共なる嗣産を失ひ、孤苦紛雜の境界に流離せんす。

第二、基督教の理想が人々の連綿たる靈生活に由り又漸々に進歩する基督教の意識に由て世に媒介せらるゝ事

一、基督教には靈化の連綿として繼續する者ありて存す。

キリストの力は一箇の勢力として入り來りつ、常に人間の生活中に止

まりて去らず、連綿として人間の歴史中に其自然の結果を生じつゝあり、イエスの言行及び感化力が基督教世界に連綿として靈化を及ぼしつゝある事は、基督教に著明なる、且始終存現する所の事實なりとす。此の世界には能く組織し能く活氣づくる一基督教的精神なる者ありて存在し且常に働らきをる事は——之が性質又は法則をば何と觀するにもせよ——兎に角吾等之を認めざるを得ず。

基督教界に於て此靈化力が常に人々の眼前に連綿たるの實證は即ち是れ古來基督教會の生活及び意識たりし者にして、今も尙依然として然るなり。基督教會は、其代々に相次で取れる形の多少異なる所あるにも拘はらず、諸の議論及び變化に遭遇したるにも拘はらず、依然として古來是れキリストの靈的身體なりき、教會の信經と禮拜の内に形現して須臾も消滅せざる基督教的意識は、即是れイエス、キリストに在て創開せられたる新人間世活の唯一連綿たる意識にして、此意識たるや、許多の變化を經常に其境界に新たに適應し來れるにも拘はらず、其特

色たる基督教的品性を始終保有し、萬世を通じて一に該意識が由て以て鼓勵せられ、由て以て其生命を保維する、夫の同じき基督の靈の爲に證を作す也。基督教主義の人間生活がキリストの靈に在て歸一連續する此の事蹟ほど神妙なる者は開闢以來未だ嘗て有らざる也。

然のみならず、恒久連續として日に新たなる基督教の此事實は、亦是キリストが其弟子に垂たまへる約束と符合し、且之を成就する者と知らる。キリストの福音は聖靈を降すとの保證を以て局を結べり、キリストの最後の辭は其自ら靈と力とを以て長へに地上に現前すべしと云ふに在りき。キリストの生活が靈恩と活力を以て其の弟子の生活に連續相續せんこと、及びキリストの現前が其教會の社交中に常に潛勢力たらんことは、是れキリスト自身の聖意なりしや疑を容れず。基督は其再び來るまで日に月に増大する勢を以て此世に感化力を振はんことを期し給へり。基督は爾來常に靈を以て現前し、人間の生活及び制度を感動し組織し改革しつゝあり、萬事を新たにしつゝありき。今日までは基

督の約束と歴史の眞理と相符合する者の如くにして、只一の益々増大する神妙の典型を形づくり、只一の目的を基督教の連續として開發し來る中に啓示す。

二、基督教的意識と稱する者は基督教の理想を惟に連續として取用するのみならず、亦是れ基督教の理想を漸進的に取て以て己れが用となしつゝある也。

茲に基督教的の生活及び基督教的の社會の眞觀念を一時代に於て賞翫し且取用することあるや、其次の時代に於ては夫の既に取用せられて現實したる者を更に復た理想視することとを始む。斯く理想が人中に實境となるは、一に是れ更に歩を進めて一層高尚なる域に登らんとするに在る爾。基督教の歴史は宛がら是れ、人の子が再三再四相次で世に顯はれ且天に昇りたる者の如し。——歴史上に或る善果となりて現實したる理想は更にまた基督教徒の思想及び信念中に於て幾層高尚にせらるゝを常とす。信仰の進歩は即ち弟子中に基督教の理想が再三再四反

復相次で「降世し、昇天し、再來したる者なり」とす。要するに基督教的進歩の大法は即ち現存する基督教的理想を實境に化し、更に又之を我が主の靈に由て基督教化するを謂ふ也。

基督教の道德學には進歩を容ると主張するは即ち亦基督教の神學は既完的なる學系に非ずとの意味を言外に含蓄す。神學上に於ける進歩の事たるや、甚だ濶き問題にして、固より一朝一夕の談に非ざれば、此には只道德學上に關係ある部分のみを考へんに、我等は先づ何れの方面に於て聖書以往の進歩は——基督教の眞理を生活に應用するが上にも、亦基督の思想上にも——之を採納すべきやを論決するを要す。如何となれば、基督教の眞理を生活に應用するの事は、先づ生活に關する眞理を知るの知識に幾分の進歩あり得べきを許すに非ざれば、——若くは亦神學上にも幾分の進歩あり得べきを許すに非ざれば、到底許すことを得ざる者なれば也。是に於てか我等は進んで斯る進歩の性質及び方向を指示せんとす、勿論此業たるや夫の進歩する基督教道德的知識

に對する聖書の關係何如につきて本道德的議論上我等が更に要めんとする如き前提を得るに必要なるだけを期して止まん而已。

基督教の根本事實又は緊切眞理を離ては、決して基督教的意識の進歩なる者あるを得ず。教理上及び道德上に於ける進歩は、キリストの言行及び教誨の起頭事實及び眞理より生ず、然れども此等と其聯絡を斷つには至らじ。他語を以て之を言へば、是即ち該進歩は徹頭徹尾基督教的なるべき爾。

凡そ知識上の進歩は二種の方面に向ひて起るを得べし、即ち或は廣く事實を包籠するに在べく、或は其事實の性質を深く達觀するに在るべし。聖經の範圍内に在ては此等二種の進歩を容べし。併し乍ら世には聖書は既完の典籍なるを以て神學上の進歩は單に第二の種類に於て教會へ許さるゝ而已と信ずる人少なからず。謂へらく、既完の天啓教と相悖らずして許し得べき唯一の進歩は、只是其解釋上に於る進歩のみと。意ふに、神は若干眞理の特別天啓を自ら垂れ給ひつゝも、他の眞理をば

神の聖旨の直接啓牖の終りたらん後に於て基督教的生活の進歩上に漸々發明さるゝに任せ給ひつらんとする事は、少なくとも想像するに足れり。されば唯一なる適切の疑問は、――聖經の既完なると相悖らずして斯る漸々たる進歩は追求せられべきやと謂ふにあらず、――斯る進歩は從來果して追求せられたりやと謂ふに在るなり。新約の時代より以後、基督教に於る知識の材料の増加したるあるに因り、又基督教的知見の明瞭を加へ來れるあるに因て、吾人果して此等兩方面に進歩したりしや。

本疑問にして此の要處に歸着したる以上は、只一返答の之に與ふべき者あるのみなるに似たり。按ずるに、神學上の進歩は從來二様に成されたるを見る、――

(一) 使徒の時代より以後、基督教の神學には新材料の漸々加へられたる者あり、例へば、世界に於ける「神の國」と稱する者につきてや、歴史は吾人に給するに使徒等の絶て識らざりしが如き、許多の新且大なる材料を以てせり。第十九世紀にては、神の國てふ教理上及び其が弘張するの法則上、實に夥多の切要なる事實の領會すべき者ありて現出せり、然るに此等は固より當初の宣教使徒衆の決して識り得ざりし者なりと謂はざるを得ず。聖パウロの如きは基督の再降につきて時に或は暗中に摸索したる趣あるにも拘はらず、基督教の歴史の範圍に付ては、更に幾層高遠且深遠なる曉通を賜はりみたらんも知る可らずと雖ども、如何なる先見の明にもせよ、明確なる、且實地なる經驗上の知識には争でか匹敵するを得んや。朦朧たる預言の霧霞中に基督が在りし一千の歲月は、基督教の神學にとりては、夫の明確なる歴史中に含まれたる若干の歲月ほどに貴重ならざる也。基督教の歴史に關する是等の新事實は、神の國に關する天意の啓牖に大いに加ふる所ありたる者と謂ふべし。救贖の妙理を學ぶに於てや、我等は古代に於ける諸の預言者よりも諸の使徒よりも、利便を有すること、譬へば今日に於て太陽と地球との距離を新たに測定する者が夫の不完全なる推量基線を僅かに持せる昔日

の天文學者に較べて遙かに利便を有するが如し。基督教の歴史が漸々に示し來れる此真正なる基線に由て、今や我等は基督の事業を一層擴大に測量するを得べく、又其普遍なる關係を一層明瞭に領會するを得べし。要するに、基督教の歴史其物は則ち神の啓示の漸々増大し行く者なりとす。是れ舊教誨と相連続してはをれども、亦新教誨なりと謂ふべし。世間の諸學術が神の理法を漸々に發明するに因りて、我が基督教の光明裏に新材料の來り加はる有りつ、一方にては基督教より解釋を受け、他方にては基督教を解釋するに助を與ふ、神の聖旨を知るの新知識斯の如くにして、神の御言（御言）に加へらるゝあり、聖書は幾層濶大なる真理の圏内に安置せらるゝに至る。

然し乍ら新事實は如何にして發明せられたるにもせよ、皆これ神の宇宙に於ける啓示なりとす、皆これ従前の諸啓示と一和せずんば有るべからず。此等の新啓示は、夫のキリストに於て完成したる特別神啓を溯ぼりて照すなり。基督自身すなはち是れ光にして、吾人は萬法及び萬學

の至高なる、且臻極なる諸關係を此光の中に發見すべし。但し吾人が天地間に於て益（益）す發明し行く所の事——受造物が其無生なるより進みて生命となり、意識となり、物質の益々靈化して人類の精神にまでも達せる事——人類の現在に於ける不完全なる造詣を越えて天地萬物の中に預言的なる深妙の意味ある事——吾人が宇宙に看出しつゝある、諸る此の如き新事實は、皆是れ基督教の全天地、イエス、キリストに於ける神の無始永遠なる聖旨を溯ぼりて照す者たる也（以弗所書三章十一節を見よ）。是故に我等は敢て論ず、基督教の神學は、一種の特別なる啓示（其範圍内に於ては終極にして權威ある者）より出たる者なれども、尙是れ進歩あるの學と見做ずんば有る可らず、如何となれば、使徒の悉く死したる時に神は人類に對して事畢りしに非ず、却つて歴史中に於る神は新事實を漸々に増加しつゝあり、人類を基督の道に教育する爲に其靈の働を日に月に現示して止む無ければ也。されば神學は既完の真理學にして、此上に擴張するを得ずと斷定するは、左に掲ぐる二種の考を無

視したる者とす、——第一、神は其大慈悲なる思想中の或者をば故らに之を啓示するを控えて、人々が之を理會するに足るほどに十分裕達に、且十分基督教的なる者と成るを待ち給へり。若干の大真理が人間以上の手段を以て啓示せられたるを信ずることは、決して是れ我等が亦基督教的生活上若くは天下の歴史上に於ける自然の歩趨に由て益々深く神の事を學び得べしと望むを妨たぐる者に非ず。第二、神は其國に關する若干の緊要にして註解的なる真理を自ら示さずして故らに人々が時々學問上より廣く考覈して發明するに任せ、聖書の中に載たる知識に其が漸々附け加へらるゝに任せ給へり。斯の如く基督教の神學に加ふるに知識の新材料を以てし、歴史上の新事實を以てしつゝ、世界の終まで進歩は依然として續かなん。否な、世界の末日はやがて是れ亦一新啓示——歴史上より聖書と神學に施す最終の増加なるべし。

(二) 神學上に於ける第二の開路は聖書の中に載たる啓示(或は默示)の本質(或節目)を一層善く取用し、一層善く解釋するに存す。但し我が道の

神學を進歩せしむる此主觀的なる方法たるや、恒に吾人の前に横たはりて何人も之に由ることを得べきは、別に論ずるに及ばず、其然るを得べきは一般に認むる所なれば也。

基督教の神學は亦是れ進歩する學術中に位みすべき權ありとの事を辯明する爲に我等は以上の長議論を用ふるの止むを得ざるに至れり。如何となれば、基督教の道德學は其神學と親密に關係せる者なるや、神學の進歩に由て自ら利する所あるべきを以てなり、且基督教の道德學は亦是れ進歩する道德學と稱せずんば有るべからざる故なり。寔に、歴史を按ずるに、基督教の神學及び基督教の道德學は古來相並んで進行したり、其一にして一步を進めたる時は、他の一も亦長く後へに落てをるを得ず。神てふ觀念の基督教的に一步を深うするや、基督教に於る道義の念も必ず之に應じて進行す、是の如く亦凡て宗教にして一層道德的に觀念せらるゝに至るや、其神學上にも必ず之に准じて大影響の及ぶを免かれず。腓利門書ヒレモニの如きは則ち宗教的兼道德的進歩の著明に



して且大に我等の参考と成るべき一例なるべき歟。

此點に於て我等は左の二結果を獲たり。——(一)歴史中には基督教的理想の連綿と活動する者ありて存す。基督に在て始めて世に與へられたる道德的理想と其が基督教上に於る現在の光照及び勢力との間には確然たる連続あるを踪跡するを得べけん。此理想たるやイエス、キリストに在て一たび人間の生活界に入りたる以來、必ず常に人々と偕に在り、今も尙世界に於るキリストの靈の現前活動する力として儼然存立す。——(二)基督教的な生活及び意識の中には基督教の理想の漸々に進歩開發し來れる者ありたり。是決して停滯して進まざる如き、若くは活氣なくして死したる如き者にあらず、是れ寔に基督教の活きてをり且成長しつゝある理想たる也。是を以てキリストは昔日に於るよりも今日の世界に善く其徳を知らるゝに至りぬ。

### 第三 聖書と信仰との關係

敢て問ふ、連続し且進歩する基督教的意識と聖書との關係は何如ん、我

等は何を信仰と實行との十分なる軌範と見做すべきや。

既にも論ぜし如く、我等は二箇の獨立なる軌範あるを許す能はず、二種の最上のなる權威あるを認むる能はず。我等は聖經と基督教的意識とは別々に兩ながら終審の大審院なりとは信ずるを得ず、然れども尙其各々には眞理あり又權威あるを許したり。但し終極なる道德的權威を一つ擇べど逼らるゝに於ては、右の二者中孰に就かんとするや。

固より聖書獨り格率たり、只聖經獨り信仰と實行との金科玉條たりと答ふるは、容易にして且教會の信認を擔はん。然し乍ら、此返答は凡そ深遠靈妙なる問題の最も容易なる解答の常として、餘りに遠く及ぼす能はず、忽ちにして種々の困難に飛こみ、紛糾錯雜の大渦中に茫然として自失せんとす。如何となれば、(許多の教義又は本分につきて聖書の中には明瞭なる教示なき者ありとの議論は姑く之を提出せざらんも、此の返答の中にてや實に左の諸疑問の如きは毫も解答せられずして遺れり、曰く、——聖書の權威は何に向ひて訴たふる者なるや、聖書は何處よ

り其信任狀を獲たるや、聖書は吾人の良心に無限の權力を及ぼすべき者なるや、聖書の明文は能く非をしても、是ならしむるに足る者なるや、一使徒の明言は、其翻譯にして文法にだに叶はざり、吾人をして神を惡き者と思はしむるを得べきや、良心は、若し果して主權を有すべき處ありとせば何れの點々に於て終審的なる無上權を有すべき者なるや、然のみならず、聖書外に於ける聖靈が聖書内に於ける聖靈に對する關係は何如んぞや、前者は後者に依て立つの關係に在る者なるや、若くは獨立にして事を成すの關係に在る者なるや、若くは全く從屬するの關係に在る者なるや、若くは全く相協同して働くの關係に在る者なるや、教會内にありて聖書の選擇を決定したる聖靈の作用が夫の聖書の筆作上に感動を與へたる聖靈の作用に對する關係は何如ん。

一、我等もし聖靈は、多方に萬殊に其働を成すとの天啓原則を先づ認めて端を發するならば、信仰上に於ける許多の迷惑を脱することを得べし。

聖書の筆作を感動したる靈も、教會の精神を導びいて真理に達せしむる靈も、俱に同一の靈ならん。故に、此等の二物、すなはち基督教の聖書と人類の基督教的意識とは、相分離すべからず、——宛がら此等二物が信仰界に於て獨立無關係なる勢力及び要素なる者の如く、其一を高めんために他の一を卑めざるを得ざるが如き者とは見做す可らず。我等若し歴史中に於ける聖靈の全事業と全く相離して、獨り聖書の權威をのみ重んずるならば、是れ聖書を危険なる高地位に揚げたる者と謂はざる可らず。我等もし神の特別なる言を其が人間に對する一般なる關係より分離し去るならば、必ずや之が力を滅絶し了らん。聖書は何等の特別なる若くは獨絶なる權威を有するにもせよ、是れ教會とは決して分離すべからず、教會は即ち聖靈を附與せられたる者なれば也。聖書は基督の全事業と併行する者にして、之を離れては獨立すること克はず。聖書は其時代の基督教的精神と血脈を相通じをるに非ざれば、——而して又人類が恩恵と知識とに發育する一切の状態と血脈を相通じをる

に非ざれば、其權威を活律法として保維することを得ず。凡そ聖書の教理は——聖書内に於ける聖靈の事業と、基督教會の生活上、及び日に發育する意識上に於ける聖靈の事業と、斯の如く相關相通することを認むるに非れば——考證的研究の試験下に於て、及び基督教的道德の光明下に於てや、到底自ら維持存保せんことを望むべからず。

(二) 是故に何等の神感説インスピレーションにもあれ、凡そ聖書をして絶對的に良心の上に位あせしむる者、若くは人類の基督教的意識の下に聖書を全く從屬せしむる者をば、我等之を一方に偏する者とし——聖書を信ずるの事に對しても、基督的行狀法に對しても、均しく危険なる者として排斥せざるを得ず。

されば、信仰と聖書との眞關係は、此等の一を無制限に他の一に從屬せしむるが如き大早計なる返答中に發見さるべき者に非ず。寧ろ我輩は主張す此等二者は琴瑟の如くに相和諧して關係すと、而して須らく其各箇の正當なる領分及び權威を領會することを務むべく、又同一の靈

が是等雙方を通じて働く所の歸一點を曉得することを務むべし。若し教會の聲裏に於ける聖靈を重んずること、聖書内に於ける同一の靈を重んずるよりも遙かに超えたるを以て羅馬教の進取的缺典なりとせば、宗教改革以來、聖書と基督教的意識意識(即ち全教會の精神中に於ける聖靈の活證)との交も相依る者なることを餘りに輕視したるは、亦是れ革新教の退守的缺典と謂はざる可らず。然るに、其實、聖靈の此等二種の證言は相互に補なひ助くる者にして、彼の權威は此の供證を要す。若し靈生活界に於ける此等二種の要素を分離し去らば、十全なる軌範としては一も有ること無く、隨つて眞實無妄なるが如き、萬々錯る無きが如き勝徳は竟に見る可らざらん。且又此等二種は、其れ自身にては就れも權威の源たる者にあらず、只是れ無上の眞理を授受するの具たる而已。權威の本源は只一あり、即ち眞理其物にして、此眞理や基督にありて世に來れり。基督教には——其神學にとりても、又其道德にとりても——只一つの終審的無上權威ある而已、是すなはち基督其物なり、基督の精神な

り、基督の聖靈なり。聖靈を以て終極の權威となす、聖靈の教ふる所は即ち是れ信仰と實行との唯一なる精確の軌範たるなり。

三、されば、宗教上における權威てふ者の疑問たるや、之を其基督教の淡素に約し去る時は、左の質問に歸せん而已、曰く、聖靈の此の教誨は如何にして人間に傳へらるや、キリストの靈の教誨する所は、其教理上及び道德上の金則なる點に於て如何にして之を辨知すべきや。

此の質問に對するの答は、聖書と信仰とを分離する處に在るに非ず、却つて此等二者を親密に相交通反應する者と認むる處に於て、得らるべし。

聖書は基督教的意識に律法たり、即ち之に<sup>⑥</sup>律法たり、之を離れて獨立なるに非ず、基督教的意識——即ち基督教が其根本たる基督につきて學び得たる一切の知識及び經驗——は亦同じく聖書に律法と成るなり、即ち聖書解釋の法となり、聖書考證の法となり、聖書證驗の法となり、聖書選定及び完成の法となる也、信仰に對してや聖書は之が外部なる、一

定したる、形式的なる、格率若くは權威たり、信仰は則ち聖書の證驗たり、聖書の基督教的考證及び解釋たり、人々が基督と基督の靈とにつきて學び得たる知識と經驗を考察して、聖書は己れの權威ある所以の理と、其權威の制限あるべき所以の理とを兩<sup>⑦</sup>ながら其中に發見す、凡そ聖經中の書にして、キリストを其最も善く、最も詳かに領會するの點に於て判然缺けたる處ある者は、必ず之が爲に聖經内に列するに堪へざる者と審斷せられん耳、<sup>⑧</sup>經や聖使徒の筆として公然歎識を戴くとも、教會が他の諸の聖書に由り、且初より信徒の生活上に働らける聖靈の連綿たる作證に由りて、學び得たるキリストの全人物、全觀念に判然撞着する件々を載るが如き者をば、初代の教會にては決して之を聖經の中に編入するを肯んぜざりき、換言すれば、經典と稱する者は、聖書として尊信せられんには自ら基督教的なる者ならずんば有べからず、聖言と聖靈、キリストと教會の信仰、此の二者は互に相待ち相補なふ者とす、即ち信仰は聖書を研究するに當りて缺くべからざる要具たり、此の如く聖書

は亦信仰を指導し扶掖するに必要な者たる也。

四、信仰と聖書との關係を斯の如く見解するは、決して人間の權威を以て神來の權威に拮抗せしめたるに非ず、寧ろ是れ靈なる件々をして其相互の關係を明らかならしめたる者なるのみ。

此の見解は是れルーテルが稱義的眞理に關して、其炬大なる靈眼を以て神語の性質を達觀したる當時に於ける本元の革新教的聖書觀に尤も密邇せる者と謂ふべし、改革後に及びて聖書を一字一句まで悉く神の感動に成れる者と稱し、聖書の權威を絶對的に獨り尊重したる如きは、唯に教會をして夥多の考證的困難に陥らしめたる而已ならず、亦是れ其當初の健全なる聖書觀とも背馳せる者なり。信仰にして日に新たにし且恒に生きてキリストと合一する者は、即ち宗教改革の物質的原則なり、而して聖書は即ち之が形式的原則たり。此等は孰れをも分離すべからず、此は彼を須ち、彼は此を要す。信仰は其外部の軌範を聖經に獲、聖經は其内部の證驗を信仰に獲るなり。各其領分に於て、及び其範圍内

に在ては、獨立なり、然れども此と云ひ、彼と云ひ、兩ながら俱に單獨にて、完全なるを得ず。基督教界の唯一なる且究竟なる權威は、則ちキリストが遣はしたまへる聖靈なりとす。イエスに在たる精神を吾人に傳達する特定なる外部の要具は、則ち使徒の筆に係る聖書の證言是なり。又聖靈の教の何物たるを審明する内部の要具は、則ち一般普通の基督教

的意識、連綿として日に新たなる教會の證言是なり。

五、革新教にて最初聖書と信仰とを斯の如く互に須つ者となしたるは、古代の師父(教會祖師)たちが聖書と傳説との關係につきて懷きたる所の觀念と率ね符合する者なるを見る。古師父等は使徒衆の賜はれる啓示中に神感の聖靈の働を認め、亦基督の連綿たる生活の中に聖靈の指導的現前を認めたり。後年の革新教にて著く爲したる如く、同一聖靈の二領分たる聖書と教會とを濫りに且機械的に分離するの事は、古代の基督教徒が著はしたる書籍中に見ざる所の者なり。キリストの靈が基督教界に唯一の權威にして、多方に世間に顯現し、萬殊に人衆を感動

すとの説を遂に斯く挽回し得たるものは實に近今の神學の著明なる一功績なりとす。聖靈が聖書の筆述に特に感動を與へたりと信ずると同時に、又聖書の文字を無分別に或は迷信的に尊重するを免かれ、且聖靈が教會の中に於て及び人心を基督教化するの中に於て常に働らく者なるを一層廣く信ずる事は、聖書の格率的なる權威を維持するにも必要なれば亦基督教的生活を保全するにも必要な也。基督教の道德は聖靈の自由に任して眞理を人生に應用せざる可らず、而して又同時にキリストの教誨に對する使徒たちの證言に誠實に且忠信に依立するを要す。

#### (四) 道德理想の漸進的顯現が基督教道德に對する意

味

基督教の道德的理想が人間の意識内に連綿として進歩すといふの觀念は、道德學をして歴史との關係を正しうせしむ。

一、此觀念に由て我等は虚妄なる保守と眞正の保守とを區別することを得せしめらる。

該理想は今尙啓示の進行中にあり、世界の終末まで益々大きく且高く現實となりて世に普ぬからんとすれば、今日にして往昔の道德的標準若くは状態を喚還よみがへさんと欲するは、豈愚かなる事に非ずや。歴史は聖靈の連綿たる作用としてこそ其價值を増つゝある者なれ。水流は或は源泉よりも高くは上らざらん、然れども百里も下に流れつゝある滔々たる河水をして其濫觴たる溪流に還り注がしむるを得べしと想像するは、寧ろ癡に非ずとせんや。今日の如き日に月に益々複雑繁雜なる社會の状態を或る古代の醇朴に還さんとするも、亦其愚なること是と同日の論のみ。基督教の古代の形を今日に挽回するは、基督教の理想の現實上に進歩あるを認めざる者なる耳。復舊は、保守に非ず。今日の社會の千態萬狀なる形勢に應ずべき基督教道德は固よりアレキサンデリアのクレメントが著はせる基督教道德 *Pneumatagogus*、若くは中古の大神學博

士(トマス、アクィナス)の神學綱要<sup>Summa</sup>に約し得べき者に非ず。抑も使徒時代の基督教は猶太教に縮まること能はざりし如く、若くは聖殿内に於ける最初の猶太基督教的禮拜の一形式に止まること能はざりし如く、——異邦人に使徒たる聖パウロは聖ヤコブがエルサレムに於ける弟子等を教ふるに必要を見たるよりは、一般の世界に對して更に幾層福音の應用を廣くしたる如く、斯く今の世に於ける基督教の道德及び風俗は、之を昔日の模範に歸約すべからず、又既往何時の社會の狀態を以ても之を量るべからず。信仰上に於てなり道德上に於てなり、古代の基督教を今日に挽回せんと思想の實行すべからざるは、唯に人生に關する吾人が理論の一變したるが爲のみに非ず、又是れクリン氏が論じたる如く(Prolegomena, p. 278)、生活の事件の一變したるが爲なりとす。今日の基督教には社會の新狀態ありて對立す。我が道德學は勞動上の新問題を講求せざる可らず。

斯の如く古代の道德學を其儘に今日に挽回せんとする方法の不十分

なる事は二種の例解を以て茲に之を明らかにするを得ん。數年前シヨシユア、デヒツドソンと云ふ英人一書を著はして論じて曰く、福音書中の教訓を讀んで字の如くに細大となく現時百般の人事に應用せんとする者あらば、其人は必ず現今の思想界及び現今の社會に於る各黨派各權力の順次に排斥する所となりて、遂には其教會の人々にまでも乗せられんとす。我は直ちに之に答へて曰んとす、斯の如き人物は宜く失敗すべき者なるに因て失敗せざるを得ざるなりと。是の如き基督教觀念は基督教の道德的理想が漸々に進歩すべき者なるを忘れたるなり、故に其徳化を規畫するに當りて、其精神の初より誤まれるが爲に、臆くも倒るゝ而已。聖靈は連綿として常に働き常に教ふと云ふ眞理を以て推せば、人の子自身も、其昔シユダヤ若くはガリラヤに住ひしと全く同様には今日英國や合衆國や日本には住みたまはざらん。我等は却つて信ぜざる可らず、人類の所要を洞悉したまへる彼は必らず其時代時代若くは其人民の境遇及び事業に常に靈應して己れの言行を形づ

くりたまはん、基督は、愛に於て及び眞實に於ては、昨日も今日も永久に同じと雖ども、必ずや在昔猶太にて人民の間に立ちし時に顯はせし如き、若くは當時のパリサイ宗徒の諸難問に答へし際に顯はせし如き、機應變の智慧を以て、各時代に於る社交上、道徳上及び宗教上の所要に其言行を適應せしめ、其教誨を應用したまふならん、キリストの來るは何時も事を成就せんとするに在り、破壊せんとするに在るに非ず、基督の信仰及び道徳は則ち生活の靈化を成就しつゝある者なり、我等は單に古代の基督教(否、初代の基督教すら)の信念若くは習風を反復せんと務むるのみに非ず、更に是よりも困難なる事業の成すべき者を有す。幾層困難なる、幾層多端なる、而して唯一なる、基督教的事業は、其萬般の職業界及び思想界に於て、基督の精神を以て現在の生活を組織するに在りとす。該事業は嘗て有りたる舊エルサレムを挽回して之を成し就ぐべきに非ず、天上なる新エルサレムを來して成し就ぐべき爾、虛妄なる保守主義を例解すべき第二の思想は、最初の二三世紀に於け

る教會組織の形に立歸りて基督教會の合一を保全せんとするに在り。勿論極初に於ける二三の監督會議を外にすれば、爾後の教會歴史は大抵、基督教の眞正の發達と言ふよりは、寧ろ基督の素朴を離れたる者なりしと雖ども、將來の善福を既往に見出し得べしと須臾なりとも想像するは、基督教の理想が連綿として漸次に進歩すとの法則を無視する者と謂はざる可らず。教會の一致は古代の教會の風に立歸りたればとて達し得らるべき者に非ず。教會の一致は、若し果して能さるべくんば、是れ更に靈生活上に成長發育を積む事に由て達せらる可し、是れ聖靈の更に顯け得たる勝利として獲べき者なる而已。斯る合一或は一致は尙出來べく且期望すべき者ならんとの事は、敢て此に之を疑かほじ、されど神の國に到るの道は我等の前途に在り、其約束は信仰を以て歡迎せざる可らず、是決して既に消え去りし過去に戀々として達し得べき者に非ず。斯る將來の一致は必ず是れキリストの眞葡萄樹に於ける萬殊の枝に從來葉々と爛熟しつゝありたる一切の果實を眞箇に保藏す



る者なるべし。眞箇に保守なる人は——夫の將來にまで透進綿亘する歴史的進歩の線路を認めん爲に——既往に立歸りつ、過去の諸大紀元に沿ふて之が主要の諸事跡を觀望せん。此點に於て往昔の貴とき事、殊に天下の基督教的世代の貴き事は、其預言的なるに在りて存す。歴史に稽がへて我等は聖靈即ち何時も教會の前途に立てる者が今まで進みつゝありたる方向を知り、且何れの線路に我等は導びかれんとしつゝあるやを察す。請ふ進歩せる道德的理想の一——例へば容忍若くは自由、若くは社會の義務てふ者、若くは四海兄弟てふ者——を取りて、過去を通じて該理想の歴史上に進歩し來れる行路を踪跡せよ、然らば我等は該理想が他の諸真理諸要素に對するの價値を一層明かに領會することを得、また一層強く自信して之を現在の諸運動に應用することを得、之が人中に於ける將來の勢力を預言することを得ん。要するに、眞正の保守は則ち其進路を過去に取りて、過去の善を遂に成就せしむる所の進歩是なり。

虛妄の保守は之に反し、狹隘なる見識を以て徒らに過去に歸り、以て將來の望を空しうす。

二、至善、即ち基督的理想が斯く連綿として進歩すと云ふ見解は即ち吾等の望をして益々貴とからしむる者なり。

マッケンゾイ(Mackenzie)氏が佳く言ひ得たる如く(Introduction to Social Philosophy, p. 124)「開發進化てふ觀念は——人生を單に間斷なきの變化とは見做さず、或る確然たる目標に向ひて成長發育する者として現示するが故に——望を前途に屬することの空に非ずして眞に學理に適ふ者なるを明らかにす。道德上に動機たるの望なる者は基督教の歴史が徹底斯の如く或る神定の目標に向ひて進歩するの法則中に其根柢を有す。基督教は特別にも期望の宗教なり。基督教は期望の教會たるに非ざれば決して戰鬥の教會たる能はず。基督教の道德學は善望の學術なり。其樂天的なるは、現世の惡を視るに目無きに因るに非ず、罪の罪たるを認むるの明なきが爲に非ず、一に其が理想的なるに因由す、罪惡の

此世界史すらも、——亦是れ救贖の歴史たるが故に、——基督教が天下を理想化するの進路に随従する者たらずんばならず、寔に此の理想化事業たるや綿々進歩して、遂に天國の來る時にまで及ばんとす。

三、此點に於て我等はスベンサル氏が進化説の結論上より觀望したる前途の光景と、基督教の預言が吾人の眼前に展開し來る前途の光景とを對照し見んとす。彼が道德學は、其進化的なるが爲に、畢竟樂天主義たるの口氣を成すを免かるゝ能はず、實に萬物の進化を信ずる者は、世界の善の月に歲に増大するを信ぜざるを得ず、世界の終極の最善なるべきを望まざるを得ず。然りと雖ども、宇宙一統の平稱なる者、即ち畢竟宇宙一統の死と云ふに異らざる者、該進化論者の面前に屹然として起立するを奈何ともする無し。進化の世と、瓦解の世とは夜の晝に次ぐが如く、寒の暑に承くるが如き而已。然し乍らスベンサル氏は其進化的前提を按して此宇宙一統の死てふ黯澹たる前途の光景に答へんと試るみてや、思へらく、該論を更に一步を進めて考究するや、亦宇宙一統の生

なる者次で起るべしと言ふも不可なきに似たりと第一原理論。

併し乍ら基督教道德の根基に横はれる、而して天下の歴史の基督教的解釋を貫通する、靈性なる連續及び開發の原則は、斯る無目的なる生死の替代あることを許さず、靈性的に顯け得たる物は恒久不易の顯得物なり、聖靈の獲たる物は凡て永遠に獲たるなり、是れ物質上の變化に服する者にあらず、勿論罪は此高尙なる靈界にも侵し入りて之を必死及び腐敗の境に引き下すを得ん、然れども道德的に罪に死するに由るに非ざれば、靈が自然に混沌に還ることは到底ある能はず、靈級に屬する者は自家の行歩に由りては決して物級に還ること無し。靈より生れたる生命は永遠なるべき者に生れたる生命なり、靈なる生命は、其れ自身の性質上、恒久常住なる生命なり、自ら不朽にして、全く外部よりの腐敗を脱す。按ずるに、斯の如きは、少なくとも是れ眞正なる、又永遠なる種類の生命が、吾人の現在に於て之が多少の經驗を有する限りに就て言へば、其中に藏すと見ゆる不朽の望なりとす、此生命や是れ所謂死や死の

主權てふ者に敵して吾人が自信と愛とを以て斷然主張する所の者に係る。靈なる生命及び愛は、其れ自身に取りて永遠不滅なる者なり。人の生命は其靈化する事と大いなれば大いなるほど益々衷に不死長生の感を深うす。靈魂は衷に自ら其靈なる存在を確信するに非ざれば、如何なる外部の證據も、如何様なる眼前の奇蹟も、之をして自ら其不死なる價值を確信せしむる所ある能はず。若し道徳上及び靈性上不死不滅ならんとの此望、真正の生命が終に死に克て王たるの此望につきて、其證據何如んと問ひ逼るに遇はば、我等は自然界中に於て我等を賛くる如き許多の類例を得ん、而して又信仰の爲にする歴史上の根據は、イエスの靈妙なる生命及び赫灼たる復活の中に之れ有るを見ん。然れども該議論の本據、我等が不死永生を信ずるの根本は、人類の靈生中に之を得べし。此大信仰は我等が其自覺の生命、及び其超時的且超物的なる存在の靈價を感ずることの深きに隨がひて、益々我等の爲に力ある者とす。實に基督教の啓牖に關する外部の歴史的證據、基督の超自然なる生命

に關する證據、基督が復活を以て死に克ちたる力、凡そ此等は唯に歴史的考證の光に照して讀むを要するのみならず、又——之が眞價を評定せん爲には——其道徳上の功徳及び啓牖の光に照して讀むを要す。斯の如くせば、此等の件々の幾層高尚なる自然性——即ち之が宇宙の萬有及び其靈法と和諧好合する所の妙理——も庶幾は領會せらるゝを得ん。

## 第二章

## 基督教的理想の本質

諸基督教的理想が由て以て傳へられ且知らるゝ步履を斯の如く觀測し了りたれば、今や轉じて次に至善<sup>〇</sup>てふの本質<sup>コソク</sup>を——其至善が既に現實したる限りに於て、又は其至善が基督教的信仰の眼前に如何様にまれば、凡て預言的預期の形にて存在する限りに於て——論定せんとす。基督教的理想の本質は、概言すれば、是れ基督教徒たる者が人生の最上の目的として希求すべきが如き善を謂ふ。凡そ道德上の行爲とは、其舉動が或目的を希ひ或は達せんとするに存す。凡そ道德上の状態とは、無道德なるが如き場合は之を除きて、或る者を善徳とし或は目的として選びたるを謂ふ。道德學或は倫理學上に於ける第一の問題として且常に起る所の疑問は是なり、曰く、——此の最上の善(至善)とは何物ぞや、此道德的なる目的は如何にして決定すべきや、如何にして定解すべきや、

凡そ人が懐く善てふ觀念は、何たるにもせよ、是れ道德的に其人の生活を支配する者たるべし。

人生の此目的を許多の道德學者(倫理學者)は快樂と見做たり、而して斯く人生の最上目的と見做すべき快樂は、更に又段々に精鍊せられ、蒸升せられつ、終には甚だ道德的なる一種の快樂、夫の實利的<sup>マテリアル</sup>道德學の蒸溜中より出で來りぬ、即ち是れ健全なる道德的口舌に甚だ甘美なる者と成れる快樂なりとす。謂へらく、人生の目的は快樂なり、然れども是れ箇人一己の快樂には非ずと、斯く人生の目的は増大せられ高尚にせられて、遂に最大多數の最大善事と稱する者、若くは此世に獲らるべき或は思想せらるべき人間の最大快樂に成れり。快樂てふ觀念の斯く社會化せられ且人間化せらるゝや、幸福てふ者は、道德上の善としてや、忽ちに幾層高尚なる規模を取るに至れり。道德的てふ者は、有用的てふ者と同一視せらる、但し有用と稱する者の標準は、狭く一箇の担得または一己の幸福に限るべきに非ず、是れ須く天下一般の福利てふ標準にまで高

むべし、而して又此一般の福利は一箇人の短き壽命を規則として量るべき者にあらず、人類の百千年に渉る經驗を以て量り且決すべしと。進化的道德學の研究を實理派の道德學に施す時には、至善てふ觀念若くは至福(道德的に希求すべき幸福)てふ觀念を實驗的に決定するの論法に供するに一層濶大なる、且一層合理然たる形を以てするを得ん、謂へらく、何種にまれ凡そ生物にとりて善と稱すべき者は、其周圍に順應して之が特有の性質を實境に發達するに在り、全體に取て幸福の増進と稱すべきは則ち内部の諸有機的勢力を開發するに在り、此等の諸勢力が外部の諸状態、即ち生活の外境或は包圍物に諧合して、漸々に箇々特立分業するに在り、換言すれば、生物は、其地上に前進するに當りて、箇々分業するに因て富を増し、其外境に善く順應するに由て騰のぼなる者と成るなり、斯る分業的順應の多寡は即ち生物が達したる幸福の大小高卑を卜すべき尺度なりとす。人類は動物中の最も高等なる者にして、外境即ち周圍に自ら順應適合すべき夥多なる靈妙の力を其身に具有

す、人類の善福は、其特有なる性質に循がひ、斯る高等の有機物に出來べき極みなる十分に和諧調適せる生活を營む事に由て、現實になるべき者とす。或は他にも尙多くの世界ありて、其處には吾人人類の未だ究めざるが如き非常に高等なる有機的動物及び之に准せる大善福利あらんも得て知るべからず、然れども進化論者は尙主張して曰ふ、斯る將來の可能的發達や、更に幾層靈化したらん諸能力の如きは、——縱たゞや信仰の件たり得んも、希望の夢たり得んも、——我等が既知の實利中に未だ嘗つて經驗したる者に非ざれば、固より人類の至善或は至福として掲げ出さるべき者に非ずと。

實驗的道德學(超絶的道德學)に甄別して然か稱する者は進化論者の研究法に由り實利論の潤澤を受けて斯の如く夫の單に快樂一片なる、卑陋狹隘なる道德學の範圍を脱するを得、頗る濶大なる見解を以て至善summum bonumを定解するを得たり、曰く是れ人間の全生活が其周圍に順應適合して發達したる者なり、是れ社會の出來べきだけ最大なる功

果なり、是れ人間てふ者の能力及び才幹が理想境より實境に現實したる者なりと。凡て斯の如く實利論者が善てふ者を論決したるを見るに、其中には、絶對的には非れども、頗る真理の存する者あるを認めざるを得ず。道德界に於て正善なる者と有用なる者とが相投合するを我等の一層遠く推尋ね、幾倍明瞭に曉得するを得たるは、今日の實驗道德學が吾人に贈れる賜物と謂ふべし。但し投合は必ずしも其二物が同一なるを示す者に非ず、例へば正直は善策なりとの事が必しも善策は正直なりと證驗する者に非るが如し。按ずるに、美を支配する理法と有用を支配する理法とは動植物界に許多の面白き契合を有すと見ゆ。天地間に行なはると見ゆる經濟法節用法は飛禽の保護にも花蒔の繁殖にも同一の淘汰法及び順應法を用ひ、以て亦其羽毛を美麗ならしめ、其色彩を千變萬化する、是の如く道德學の歴史上に於ても同一の原則は或は有用と善美とを兼たる結果を生ぜん、同一の靈性作用より道德界の有用物と善美物を産し來らん。眞に、天下を通觀すれば、善なる者は終に必ず

人間に有用なる者となるに至るを見るべし。超絶的道德學、高尚なる理法の道德學も、其抽象的概念たる道德上の善を證定するに道德上の實利(有用なる事)を以てするの必要を免かれたるに非ず。有用てふ者は道德の大小精粗を量るの尺度なりとす。實に吾人もし天の好配劑に係る世道人情中に實利的經綸を容るべき餘地をも必要をも許さざるならば、舊約の宗教的道德を理會する能はざるべし。舊約の神はイスラエルに道德倫理の實利的教師たる者の如くにして、屢々指導を與へ示教を垂れたるありき。古來道德上有り得べきが如き件にして、亦道德上漸々の進歩をなすに適せるが如き者は、律法の中に載られ、且預言者たちに示されてありき。凡そ天光の雲間より若くは雲を透して洩れ得るが如き者は、また地上に落ち來ることを容さるゝなり。天上の全超絶的道德教縱や基督教の煌々たる亭午に未だ沛然として注ぎ入らるゝ能はざりしにもせよ、古への道德界は全然たる暗黒の中には棄おかれざりし。道德が善く其時代に適應する、若くは啓牖が世に順がふて變通するは

即ち是れ天啓の道德中に於ける實利主義ユテリヤリズムに非ずして何ぞや、されば我等は人類の道德的教育上にイスラエルの神が姑く忍んで寛假したる所あるの明白なる若干顯跡を排棄すること無くしては、基督教の道德に此の相關應變的な主義あるを認むるを拒む能はざるに似たり、是れ此を拒む以上は即ち彼をも排棄せざるを得ざれば也。然のみならず善てふ者に關する進化的實利的なる觀念は、一點に於てや、至善てふ最高超絶的觀念に甚だ近く接近して、殆んど墨を擧するの趣あるを見る。按ずるに所謂科學的サイエンティフィック道德學(哲學的即ち形而上的道德學)に對して稱する形而下的道德學に於ても人生を善なる者と觀ず、爾へらく此世に生るゝは望ましき事なりと、凡そ生活は、其生物の能力(可能力)に准じて之を觀れば、幸福ならざる無し、特別にも人類にとりてや、生活は、人の能力器量に准じて之を觀れば、道德的に幸福なる者なり、何時にても人類の生活を其最大なる器量と活動に保維せんとする勢ある者は即ち是れ道德的なる者とす。進化論的道德學の此極説は是れキリ

ストが我が來るは、羊群をして生を得且豊かならしめん爲なり、以約翰福音書第十章第十節)と言ひて顯示したまへる夫の地上に於ける神の國てふ觀念に甚だ接近したる者なりと謂ふべし。勿論我等は彼の實利論者が爲す如くに良心を分析して人生の價値を悉く快樂に約し去るに同意を表する者に非ず、我等は信ず、凡て斯の如き道德説は皆夫の進化の極功たる特殊の道德的原素を或は識ず知ず發端に先づ認識し、或は途中巧みに良心の進化作用中に之を混入し來る者なりと、即ち我等は道德的進化を通じて一箇の超絶的事實あるを認めざるは無し、是即ち人類に宿れる神の力たり又約束たり、而して道德的なる者、靈性的なる者なり、此開發しつゝある生命及び意識は、遂に醇化して正義てふ觀念と成り、正義に與せざる可らずとの本分と成るなり、而して此者たるや其れ自身へ還元するの外は他に何物にも還元する能はず、惟完備せる幸福の生活を來すに於て満足すべき而已。現今の實驗的道德學(自然的道德學)にして吾人が本分の明確なる標準

を發見するに多少の功ある限りは、而して又善てふ者を種々に分別確定して我等の特殊なる根本的なる正義觀を潤飾するある限りは、我等之が盡力を歓迎し嘉納するに決して吝ならず。然し乍ら哲學的道德學（超絶的道德學、第七十頁を見よ）に由て我等は更に天下には人類が道として知り且順がふべき或る者ありて存すてふ眞理を根本的原則として認定せり、即ち我等は思へらく、天下には一種の至善或は最上の善てふ者ありて存し、其實境に現實するや快樂を與ふる者なりと雖ども、其物自身にては世俗の所謂快樂に非ず、亦是れ實利法を採用すと雖ども、自らは實利の品類内に約歸さるべき者に非ず、此道義即ち是れ其完全に行なはるゝに於てや人間存在の目的或は至善至福を構成する者とす。

從來至善てふ觀念は哲學的道德學の試験石なり。されば獨逸の哲學者輩が之に與へたる種々の定義を此に畧説するは學者に少補なくんばあらじ。

カント——道德上にて眞に貴とぶ所の者は善意なり。其の成す所に由て善なるに非ず、其有用なるが爲め、若くは其が眼前に於ける目的を達したるが爲めに善なるに非ず、唯其發意するに由り、即ち其れ自身に於て、善なるなり。此善意は道德法てふ觀念及び之に對する純潔なる恭敬に由て始めて善たることを得る者とす。

シルレル——美なる靈魂——美なる道德、理性と感情、義務と志好は相冥合す。

フ尹ヒテ——箇人の終極の目的は完全に自己と復和するに在り、合理なる自治に導かざる如き一切の嗜好趨勢を完全に脱するに在り、是亦社會の目的にして、道理の全く世を支配する者なり。此目的は幸福てふ者に非ず、理性の全然自足自得せる者、一切の服役を全く脱したる者にして、道德の本質是なり。此目的の達すべき者は、決して快樂には非ず、理性に屬する所の價值を全たうする者なり。

クラウゼ——善は此世にて形成さるべき生活の精粹なり。此善を議



ることは萬有の根本たる神の實在を識らずしては能はず。道德學は一般の實在學——神の學の一部分にして、之に従屬す。善とは人間の生活に極めて切要なる所の物を爲すに在り。神は即ち唯一の善なり、最上の善なり、云々。

ヘーゲル、——自由なる靈覺物として意志の理想境より進んで現實となるの謂なり。神が己れと自然界とに復和するを謂ふ。

シエール、——實在物と思想者との間に、——自然と靈との間に二元的牆壁を除きて之を一にするに在り。

シライエルマケル、——理性を自然化し、自然を理性化するに在り、自然と理性とが互に相形成する者なり。至高の善とは萬善の大海なり云々。

ヘルバート、——善悪とは知識の概念に非ず、價值評定の概念なり。是れ物の存在を稱説するに非ず、實際に存在するを得べき或は實際に現存する物象が其前に立てる觀望者より認知せられんずる有様を

稱説する也。

上に已に説きし如く、此等の定義中に都て含まれる此の超絶的要素を我等は善てふ者の純一なる原素と認めざる可らず、但し此の超絶的要素は實驗道德學に由て、若くは道德的實利主義の智慧に由て、活用されずんば有るべからず、即ち唯一の本善は生活界の萬善に分岐せざんば有るべからず。

諸次に我等が従事せんとする所は最上の善てふ此一般の觀念を基督教の啓牒に照して更に細かに解釋するに在り。我等は更に進んで人生の最大目的は何なるかを定解せんとす、即ち萬善の源たる神の啓牒——イエスキリストに由て吾人に賜はれる默示——に照して之を定解し、道德的理想中の現實し得べき節目を叙述せんとす。一言に之を約すれば、即ち基督教の道德は至善てふ者の觀念を基督教化するの職分を有す。

## (一) 聖書中の至善觀

## 第一節

舊約聖書中に於ける至善てふ觀念は、箇人的なる臭味よりは、寧ろ社會的なる品質を以て著はる。イスラエルの人民全體の福祉を離れては、箇々の希百來人は拯救てふ觀念を有せざりき。聖詩人はエルサレムを以て其最大なる歡樂の地となせり。詩篇百三十七篇の六節。希百來人が斯の如く其福祉を社會的に或は國家的に觀じたるは、由て來ること遠し。舊約聖書中に於て神が其一家に契約を垂れたまひし事に、早くより重きを置き、其家名及び家産の連綿永く續かんと望極めて熾んたりしは、即ち此事の濫觴なり。即ち神の拯救上に於ける順序にては、一家の生活及び福祿を以て第一に置けり。然のみならず、一家の望及び福祿は、神がイスラエル人民と立て給へる契約の中に於て、——隨つて又該國民の一般の隆盛中に於て、全たうせらるべくありぬ。アブラハムが初て賜は

りし約束は彼れの子孫を経て天下の萬國民を福ふかひせんとの約束なりし、是れ箇人に賜はりし者に非ず、地上の諸人民に賜はりし者なり。是に於てか聖民といふの觀念起りて、長く恒に行なはれ來れり。神に選ばれたる民約束の地に入りて之を占有すべかりき。箇人は一己に其約束を執へて之を我が私有とはする事を得ず、神の民全體にて神の契約を守り、眞實を以て神の前に歩みつゝ、神の彼等に與へんとする福祿を嗣領すべかり。要するにイスラエルに於ける至善至福は一國民の爲にするの至善至福にこそ有りけれ。

されば、預言者たちが宗教に對する一層道德學的なる觀念を以て神を父と思惟するを始めし時にも、預言者たちはイスラエル人民を總すべて神の子と見做みしき。神を父と稱せしは、預言者の著書中に見えたるだけに就て言へば、是れ神がイスラエル人民に父たるを謂ふ者なりき。出埃及記四の二十二三、申命記三十二の六及十八、以賽亞書六十三の十六、何西亞書十一の二、二重の意味にてイスラエル人民は神の子と稱せられた

り、神は彼が創造主たり、又神はイスラエル人民をして其特に選び且護りたまふ所の者たらしめき。斯の如くダビデは國民を代表する者として神の子と呼ばれたり(詩篇八十九篇二十六七、撒母耳後書七の十四)、少くとも該人民の遺餘者(のこりのもの)は神の特選に係る者として真正のイスラエル人民の繼續を世に永うすべき天職をもてり。聖殿に禮拜するに於ても、契約の福を望むに於ても、箇々のイスラエル人は決してイスラエル人民の全躰とは離れてをらざりき。義人の福祿は即ち彼がエホバの民の幸榮に與かるの事なりかし。約束の子等(こどもら)が凡て祈るべき善福、其萬事に起えて彼等が希がふべき善福はエルサレムの挽回なり、主の贖なはれたる人々が謳歌してシオンに還るの事なりとす。

至善てふ者の此社會的なる觀念は則ち預言者の唱へたる全選抜説に著るしかり。選ばれたる神の僕といふは箇々の人には非ず、イスラエル其物たるなり。故に曰く、わが僕ヤコブよ、我が選みたるイスラエルよ、今きけ(以賽亞書四十四章一節)。一箇の人民が神に事ふるために選ばれ

たりと云ふ大觀念は是れ古への預言者たちを鼓舞激勵したる者なりき。選抜は箇人に關するよりは寧ろ國民に關す、幸福の爲たるよりは寧ろ役事の爲たるなり。此の如く社會のため、隨つて又天下萬國民のため、に役事するの法則は是れ、舊約の預言者の説く所に依れば、神選の大則たるなり。意ふに、革新教(プロテスタント)の神學に於て説き慣れたる之が非常に箇人的なる選抜觀念よりは、此觀念却つて一層大いなる、又一層貴とき者なるや疑なし。舊約の選抜説に依れば、何人も一己の快樂のために私かに親から選ばるゝ者はあらず、必ずや一聖社會の一員として、イスラエルの國家の一民として選ばるゝ也。斯く役事のために選ばれ、神職のため、に齊そゝがるゝや、其被選者はメツシアの榮光を見、神の國の終に世に克つを見ん。縦(た)や以賽亞の後篇に於て、神の僕(しもべ)てふ觀念一層箇人的なるメツシアの形を呈したるにもせよ、尙是れ其一人の選抜は則ち衆の爲めなる者なりき。其選ばれたる僕は人民を代表す、故に曰く、わが義(た)き僕は其の知識によりて多くの人を義とせんと(以賽亞五十三章十一)。

至善の此社會的なる觀念はメツシアの國に對して預言者たちが懐ける望の中に磅礴したるのみならず、亦是れイスラエルの風俗、道德、律法及び禮拜をも鑄成したり。我等はイスラエル人民の懐抱せる望の斯く社會的なる特質を常に眼中に置きて毎々之に稽がふる所あるに非れば、——而して吾人の強き箇人主義は希百來人の思想界に於ける生活の觀念及び之が福徳に關する觀念とは如何に其趣を異にする者なるかを常に記憶するに非ざれば、舊約の道德中には正しく領會し得ざる者多かるべく、又、モーセの律法及び祭司的法典の中にも釋然たらざる點少なからじ。希百來人の信仰は國民的なりし、希百來人の祈禱は國民的なりし、彼等の祭日は國民の救はれたる日を紀念するに供せる者なりし、其罪祭は人民の罪愆を贖なふ者なりし、其全軀の儀式及び禮拜は國家公共の本分てふ濶大なる規模に運轉し、人民が主と結べる契約を範圍として執行せられたり。勿論舊約聖書の中にも單獨に神と角力して

祝福を求め得たる例なきに非ず、亦懺悔の詩にして一見最も箇身上の罪咎を告白したる者なるが如き例も往々にして之れ無きに非ず。然りと雖ども、此等の者すら是れ實は國民が神に依立するを代表する族長若くは王の陳情たるのみ、然らざれば亦是れ彼等が人民の罪を己れの咎として告白するに外ならず、詩篇中に在て最も箇人的なる義怒の發舒せる者と云ふども、箇人の心魂が神の救贖を呼はり求むる者と云ふども、皆是れ幾分か代表的なる口調を有せざるは無し、皆是れ箇人の忿怒の限界を超越す、是れ該國民が懐抱せる公義の聲が彼等に在て言へるなり。實に此等の祈禱中には、時としてや、是れ一國の人民が危急の秋に際して其衷情を陳べたる者とするとするに非るよりは、到底道德的に領會すべからざる者ありて存するを見るなり。

イスラエルの過失もまた其功德も、共に善てふ此の社會的觀念に照して評定せざんば有るべからず。アブラハムの信仰は社會的なる信託なりき。彼が出でたるは單に己れの安逸または一身の利達を覓めてに非

ず、一層の美國を宛めて出でたる也、彼は即ち神の肇造に係る城邑を望みて出たりき、斯の如く極初の遊行者は神が萬國民のために祝福せんと宣まへる約束に従がひて、天下を跋渉したり、舊約の道德は一家(或は一族)の永續及び一社會の鞏固を保全するに要するが如き德行を第一に尙とべり、此種の道德は是れ人間進歩の爲に社會てふ基址を供給し保全する第一科業に専ら心を用ふる者にして、箇人が運動行用すべき領分及び權理は未だ判然と塲に登らざる者なるに因て、斯る道德學の缺點及び偏重は、舊約の道德にも亦特色として附着したり、是に於てか、外國分子(アマレキ人及び拜偶像教にして若し内部に滋蔓せしめば國民の解體を引き起さんとするが如き者を勇猛に切斷するの事は、イスラエルの歴史上に早くよりして社會の一必要件と成りぬ、是亦神の攝理の然らしめたる所なる爾。

且又舊約の預言書中より抽出さるべき至善てふ觀念は、是れ一人民をして満足ならしめ幸福ならしむべき萬殊の佳物が神の國に盈るの至福なりき、思へらく此至福境には百穀豊稔し、清泉涌出し、家畜蕃息し、葡萄と無花果各戸に曇々たり、平和と繁榮四境に洩ぬし、眞に是れ乳と蜜の流るゝ樂土なりと、希百來人の理想たりしメツシア國の善福は則ち地上の佳物の充ち満てる境界なりき。

然し乍らシオンの繁榮は神の律法に遵がふて獲らるべき者とす、メツシア國の善福に關する預言者の觀念たるや、地上の豊穰及び世上の榮華を借て屢々描き出されたりと雖も、亦是れ選民の永く繁榮するは一に其正義を陥んで進むに在ることを道德上より徹底に主張したるあるに因て、幸ひに唯物的觀念、或は物質的觀念に流るゝを免かれたり、尙未だ人間以上の圓滿境に於ける未來の生命といふが如き精妙なる靈變したる觀念には違せざりしと雖も、已に純潔なる宗教的なる光は其世界的なる想念の中に注射せられありき、預言者たちが先見したる新エルサレムの莊嚴は是れイスラエルの聖者の榮光が其中に恒に現前する者なりき、終末の日に至るに於ては其既に淨まりたる國民將に之

が大王と道徳的宗教的に再び結合せんとし、シオンの義の神將に親から之に君臨せんとす。

舊約の至善説を斯く簡短に観測し來れば、大凡そ左の結果を究め獲たり、曰く、イスラエルの聖者の統治下に於て正義を體して現實と成らんとする者は本來は是れ社會の善福なりとす。是故に、凡そ専ら箇人的にして、社會の善福てふ觀念を其れの要素に含まざる理想は、古代の希百來人に理想と成るに足らざる者なれば、モーセが聖山上に示されたる模楷には及ばざる遠し。一箇人は、——其同胞兄弟たる國民を離れては、——其人間社會に一員たるに由るの外は、其キリストが爲に死したまへる世界を終極の救贖に親から與かるに因ての外は、——獨り自ら究竟に幸福なる者と成る可らず、獨り専ら其靈魂に最大の福徳を享受するを得べからず。一箇人は惟救贖の國の圓成するに由て始めて完全なるの域に達し得べしとの此の道徳的理想は、希百來書中の一節に意味深長なる文字を以て約説せられて見ゆ、曰く、彼等も我等と偕ならざれ

ば完たうすること能はず、云々(希百來書十一章四十節)是すなほち基督教に於て望む所の完全生活に加ふるに社會の拯救てふ舊希百來的觀念を以てしたる者とす。

## 第二 新約聖書中の至善觀

福音書中に於てはイエス、キリストに由て啓示せられたる道徳的理想ありて直接に反映す。降りて使徒たちの書翰中に至りては該理想が主の弟子たちの生活上に活現し、初代に於ける基督教徒の境界に百方應用せられたるを見る。但し人間の至善に關するイエスの教誨を其特殊なる純潔と其獨創なる機軸とに於て領會せんと欲せば、先づ之を其同時代に於ける猶太教に對照して講究せざんば有るべからず、是れ基督教は天啓教としてや猶太教てふ背地の遠景を貫きて照り出でたる者なれば也。我等は惟にイエスの道徳訓と預言者たちの幾層靈なる言語との聯關を繹ねざる可らざる而已ならず、又若し能すべくんば、イエスが其弟子に與へたる訓言と、猶太教の會堂にて普通に教へたる意見と

の間に存する接觸點と翻對點とをも究めざる可らず。基督と同時代なる猶太教に於て懐抱したるメツシア觀念中には、固より幾分か傳説上に濃淡の差別はありたれども、亦若干の明確なる畫線の跡<sup>あと</sup>ぬべき者ありて存するを見ん。該理想の一特色は其非常に超自然的なるに在りし、即ち是れ神が約束したまへる善福を以て、此現世と反對に、或る「外形的に超絶たる」者と爲すの觀念なりし也 (Schurer, History of the Jewish People, Div. ii. vol. ii. p. 134)。天上のエルサレム<sup>エルサレム</sup>てふ之が觀念に於ても、又天國が由て以て地上に降るべき兆證及び方法を待わぶる之が期望に於ても、俱に當時のメツシア的希望は、道德的なるよりは寧ろ超自然的たる者なりき、即ち道德上の進歩及び圓成といはんよりは寧ろ超自然的なる干渉及び審判の望と謂ふべき者のみ。此外尙猶太教の望の中に在て已に固定して動かざりし一事は、猶太國民の特權といふ觀念を以て特色としたる事なりき。固より其尤も古き預言書中に於ても他に比して幾層靈なるの光の耀くありて、メツシア的希望の一局

部的なる(狹隘なる)觀念にすらも幾分か人間一統に渉る者なるが如き、潤大の觀あらしめたりき。イスラエル人民其物もまた後に天下の大國に從屬するに及びてや、思想及び生活の世界的なる(即ち一局部的、一地方的ならざる)趨勢と段々に廣く相接觸するに至り、其結果としてや、又イスラエルが天下の諸大國に對する關係に關する幾分か潤大なる知識を獲ずんば有る能はざりき。然りと雖も其メツシア觀は未だ以て眞箇に道德的に天下一統を包括籠蓋する者となるには至らざりき。固よりイスラエル人民の胸中にメツシアを望む希望の存在したる事、及び又該希望が何種の形に於てなりとも復興し且つ持續したる事は、是れ世界に神の働の普ねき事を歴史上に認め得べき徵證なりとす。然れども猶太教に於ては此高大なる望も自ら纏ふに極めて政治的なる服裝を以てしたれば、其期して待てる所は人中に愛の普く行なはれんどの思想には非ずして、却つて眞正のイスラエルの終<sup>つひ</sup>に恢復せられんどの思想とは成りにき。

即ちメツシアは世界の統治者として現はるべくありき、而して其國に於てヤイスラエルは衆に超えたる大々尊榮の地位を占得すべかりき。メツシアは「メツシア救世主」としては、——即ち衆に代り死して天下を神に復和さする如き救世主としては、——觀ぜられず、メツシア君王として、——即ち彼れの義に因り、又彼れの力に因て、其選民が神の恩寵と榮光の裏に挽回せらるべき君王として、——觀ぜられたり、此のメツシア王の世に來るや、天の四風は地の四方の極よりして忠信のイスラエル人を其約束の賜地に陸續送り來さんと也。

向背去就の如何に由り、又猶太教を信奉するに因りてや、固よりイスラエル以外の人民もメツシア國の民たる恩澤に浴することを得ざりしに非ず、然れどもメツシア國の榮光は、未だ是れ人間社會が全く救贖せられたる福境とならんとするの約束としては超物的に廣く大きく觀ぜられざりし也。要するに、猶太教が善く忍んで長く期望しつゝありたるメツシアの世なる者は、是れ世界の拯救せられたる者と謂んよりは

寧ろイスラエルの尊榮せられたる者なりき。

猶太教に於けるメツシア的期望の此狀相には亦之に加ふるに其教義的なる性質を以てせざる可らず、彼等の律法も、彼等の望すらも、漸々に益々「教義化せられ」たり、預言者の「詩歌然たる描畫」は學士輩の博洽なる教義となりぬ。後世の猶太傳經中にも「シオン」の將來の榮光に關して粗大なる物質的形容の充ち満てるを見る。

固より基督の時代に於ても猶太舊來の望は尙依然として許多の敬虔なるイスラエル人中に其勢力を強うせり、該國民が道德上の改革の必要なるを極めて深く感じたることは洗禮のヨハナが當時唱導したる所の者に徴して最も明かに見つべし、然し乍らイエスが當時世間の學士輩及び教師輩の中に發見したまひしメツシア期望なる者は——深く靈性的また道德的なる、而して又廣く人間的なる、救贖の望と謂はんよりは——寧ろ自然以上の權能と審判に由て、天よりの異徴を以て、政治上に獨立を來たし、國民の自治を全たうするを得



んどの望なりき。

神の國てふ者に關してキリストの時代に猶太人が懷きたる觀念を揣摩せんとするには、亦神てふ觀念の猶太人中に律法化せられたることを察せずんば有るべからず。エズラの改革以來、猶太教の發達したる様子、猶太人が律法を尊重したる始末は、宗教改革後の革新教神學に於て拯救に關する律法的觀念の増大したる様子に彷彿たり、特別にも其が聖書の神來及び權威を極口主張したる趨勢に彷彿たりと謂ふべし。斯の如く猶太教の發達するに方りても、宗教の重みを全く律法と其遵奉に置くの趨勢甚だ熾んなりき、之に反して一層自由なる、一層預言的な(靈信仰の)原素は學士社會に其跡を收むるに至れり。猶太教にては律法は百事百物の上に獨り超然として高く位みせり。義シモン(Simon the Just)曰く、世界は三つの物を基礎として立てり、即ち律法、禮拜(聖殿禮拜)、善行是なりと。此順序にては、律法第一に置かれ、禮拜第二に置かれ、道徳第三に(即ち最後に)置かれたり。謂へらく、律法は眞生活の源たる者及び

福徳の要件たる者として、最上の善なりと。猶太博士の說に依れば、天地萬物創造の大目的は律法を創制するに在りき。其他猶太傳經中に散見する一層過大なる幾多の律法說の如きは、基督の時代の後に出たる者に係ると雖も、亦是れ猶太教が神てふ觀念をさへに律法化したる趨勢の一斑を明らかにするに足れり。——此趨勢たるや、是れ基督在世の日に於て學士とパリサイ宗徒との教誨中に已に顯著なる者にてありき。勇猛なるマカビー時代に於てすらも已に律法は人民の戰爭的警語となりぬ。是れ預言者時代に於ては決して有ること能はざりし者とす。後世の猶太教に於ては律法は殆んど神其物にさへもに代り了れる者に似たり。天は律法を學ぶの高等學校となりぬ。神は日々に律法を學ぶに忙がはしき者の如くに描出せらる。眞宗教の中心は神の身位より神の律法へ移されたり。天國は律法の範則なり。神の律法の在る處には、そこに神在り。

猶太教が預言者たちの教へたる宗教に遂に加へたる革命は大凡是の

如し。エルサレムは嘗て其預言者を殺したり、而して後世には人を殺す所の法文を禮拜す。

諸イエスの教誨に對して遠景を形くれる猶太教を斯く簡短に觀測しをばりたれば、是よりは轉じて我等はイエスの福音書中に呆々とし耀きつゝあるを見る道徳的理想を觀察せんとす。

一、イエスの道徳的理想にして、神の國の何物なるかをイエスが教へたる訓誨中に見はれたる者。

イエスが來りて宣傳したる神の國の福音は、全く新奇なる者には非ず、是れ預言者の教と連接する所の點なきに非ず、外國語もて垂れたる天啓の如く猶太の一般人民に對して歴史的に全く了解すべからざる者には非りし也。イエスは人々の心に普通なる國語を以て語りたまへり、イエスの説きたまへる眞理は學士（Scholar）の口を待つて村夫または群民に講解すべき者にあらず、イエスは村夫に途に遇ふや能く之をして其言を領會せしめ、群民の來り逼るあるや湖畔にて能く之が榮を啓きたまへ

り。イエスの懐ける神の國てふ觀念はイスラエル人民が一般にダビデの位の恢復せられんことを望める其共通の望に根柢して立てり。イエスの神國説は預言者たちがメツシアの世に關して説きたる一層濶大なる畫線を擴め或は紀綱を更に張れる者なりとす。天下至高の山も其立てるは平地に於てす、是の如くイエスの道徳的理想も亦人間的にして、燦爛たる彩雲の如く中天に懸れる者に非ず、然し乍ら我等はイエスが基いて以て其天國の福音を宣たる諸觀念の平夷通俗なるを認むるや否や、忽ち亦イエスの教誨が如何に直接に、又如何なる高尙の目的を以て、ラビ輩の群傳説の混沌中より卓然として超出し、一躍して神の經綸の幾層高尙なる、又幾層純潔なる啓示を提出し來れるかを發見せん、寔にイエスの教誨は其特絶無比の巍々たる高峯を以て他の群巒——預言者たちの望が嘗て達し得たる群巒——を眼下に俯瞰し、今日に至るまで人間社會の高飛し得る限り超然卓出したる理想として止まされり。

(伊) イエスが天國の福音を宣たる中に在て直ちに吾人の注意を惹く所の一特點は、彼が公然と天國は今此に此地上に在りと明言したまひし事なりとす、抑も天國の物たるや已に舊約の天地に始まり、而して將來に於て完成すべき者なりし、然るにイエスは極めて著しくも徹底一貫して教へて曰く、天國とは即ち神が直接に人間の中に現前し君臨したまふ者は是なりと(馬太四の十七、十の七、十二の廿八、馬可一の十五、路加十七の廿、廿二)。人民の普通に思想したる處にては、メツソアの世は將に來らんとする此世の國なりき、勿論洗禮のヨハネはキリストを眼前に預期したるが爲に、天國は既に近づけりと宣べたり、然れどもイエスが天國は此世に現前すと宣言したるは、ヨハネが天國は近しと明言したる者にすらも異なれり、イエスは天國が此地上に現在することを明言して以て人々が已れに弟子たらざる可らざるの理由となせり、イエスはヨハネの如く單に新たなる道徳上の一要求を持來さん爲に到りしに非ず、若くは又天國の將に來らんとするに備ふる爲に悔改を人中

に嚴命せんとて來りしに非ず、イエスの福音にては天國は已に此に在り、天國すでに此に現在するが故に、イエスは人々に悔改を求め、信仰を勧めたまふ、天上の力が地上に實現することは是れ基督教徒の生活及び望のため甚だ喜ばしき理由たる者とす、主の道を備へよとは洗禮のヨハネが野に呼ばりたる所なり、斯く預言者中の最後なる者が揚たる聲もまた是尙天國の將に來らんとするに備へせよと呼はりたる者のみ、之に反して、イエスは汝等悔改めて福音を信ぜよと人々に命ずるに方りてや、直ちに期は満りと宣まへり、基督教にて持する人生觀及び人生の至善觀はイエスの宣言せる左の根本事實を以て基礎とす、曰く、神の國は全く將來に屬する者にあらず、我等が今之に與かること能はざる程に然か遠き者にあらず、是れ神の實際に君臨統治せる現實境にして、地上に既に始まりをれり、——斯の天國たるや即ち是れ我等が今入らんと欲すれば入るを得る者たり、之に民籍を有する者には則ち直ちに至善を繼紹することを得せしめ、永生を分享することを得せしめ

んと稱す。

(呂) 故にイエスの道德的理想説 (idealism) は同時に亦是れ道德的實境説 (realism) なりと謂ふべし、是れイエスは天國は既に來れりと宣傳したまひたれば也。人類の理想的生活は即ち基督に在て既に始まる生活なりとす。理想的なる善とは今此世にて究め且獲らるべき者たる也。ガリラヤにて未だ曾て人の言はざりし如くに言ひたまひし者は、決して夢想家の如く奇妙なる、美麗なる、億萬里外なる事物を語れるに非ず。勿論、人の子は其衷心の天覺中には、預言者たちの諸觀念にすらも遠く超越せる大理想を懐きしと雖ども、(約翰第三章十三節に於ける著明なる語を見よ) 然も自ら税吏や罪人と隔離せず、却つて到る處にて、又遇ふ程の人に、凡て明言して曰く、神の此國(天國)は眼前に在り、世間に人中に之を見るを得ん、是れ現前する光なり、各人の實行し得べき真理なりと。是故に基督教の至善觀は、理想にして又同時に實境なる者なり、此理想たるや、一には經驗を超越し、一には又經驗内に屬す、——既知の衆善に

遠く勝れたる者なれども、又何れの善行中にも實現す(腓立比書四章八を見よ)。

(波) イエスが天國説の此面目に似て、均しく又驚歎の至なる者は、其天國に關する思想および言語の極めて斷乎たるに在りとす。道德上に於てイエスの教訓の斯く斷乎として毫末の疑をといめざるは、亦是れ未曾有なる、勝妙殊絶なる現象なりと謂ふべし。彼が懐ける神國の高遠なる理想には、吾人の常に免れ難き疑惑の雲霧の如きは纖毫だも懸れる無し、彼が理想は炳然たること日光の如く、確乎たること金剛の如くなりし。人間の些々たる疑問の如きは、我、誠、に、誠、に、汝、等、に、告、ぐ、て、ふ、彼、が、日々の確言に對して赧然と無言の境に沈み了れり。イエスが唱へたまへる天國の福音は、始より終に至るまで、徹首徹尾玲瓏たる確實境として吾人の前に横たはれり。夫子の言には一點の雲も無し、天師の前途には一寸の暗も無し。嗚呼至れる哉。

實に此道德上に斷乎たるの口調は、其類に於て特絶無比なりと謂ふべ

し。勿論是れ世間に甚だ多き獨斷宗教家の盲然たる確信には非ず、亦是れ粗俗なる唯物論者の井蛙然たる斷言にも非ず。イエスが其父の真理を確知せる状態は恰も確實なる學術の平靜にして而も理を究め得たる定説の如く然り。是れ宛がら深遠なる知識の淵靜かにして毫も風波の騒ぐ者なきに似たり。此一偉人が不見界の事を其經驗より説くは、餘人が見界の事を其經驗より説くが如し。我等は此の斷乎たる口氣に太く感ぜざらんとすとも能はず。

イエスの思想及び言語が此の如く斷乎として毫も疑がふ所なき者は是れ——弟子衆が之を受け得て自ら證をなせる如く——實にイエスの全教誨を貫ぬける一般の特色なりき。此特色は極めて著しく、且之が感化力は尤も強かりし故に、弟子たち自らも久しからずして師の此の斷乎たる口氣を感受したれば、使徒等はイエスの靈より生じたる斷乎たる確信を懷きつ、其見たる所其知りたる所の高妙永遠なる件々を斷乎として談説し且書記したり。天國の福音の此斷乎たる口氣は何處に

其根源を有せしや、神の何等の啓示に其十分なる原因を發見すべきやは神學の研究すべき所なり。基督教道徳學に於ては則ち指示して曰く、イエスの神國説中に寓する至善てふ觀念は、一種の斷乎たる口氣を有す。世々代々の人々の心裏に自ら銘刻するの力を振へり、而して此觀念たるや古代の諸宗教及び諸哲學の各理想並に之が感化力に超越し、世界中に無比にして何物も克つ可らざる現在の誠命と成り徳行の鼓吹と成りて、常に存す。夫の天國觀念たるや、イエスが始めて之を實行し、爾後の基督教徒が其生活上に之を師としつゝあるを見れば、是れ未完にはあれども確實なる理想學の材料を其中に包藏する者と謂ふ可し。されば今も尙イエスの聲を聞く者、イエスの道に従がふ者は、昔の如く大信仰を以て左の如く言はんとす、——神の國は此に在り、我等は衷心に幾分か之が力と平安を覺知す。キリストの政及び神の愛は直ちに此土にて、我等の最も自得したる時に於てや、又最も基督教的なる行爲の中に在りてや、咫尺の間に現見す。然れども亦是れ此世界を越えて遙かに

無終の永遠界にまで延長すと。此信仰たるや、時に或は認識されざるあ  
らんと雖も、其恒久にして存することは、譬へば雲の蔽ふて隠せる間に  
も山は依然として聳ゆるが如く然り。

(七) 天國に關してイエスの啓示せる所の者につきて我等は是等大體  
の眞理及び色相を認むるの外、また彼が唱へたる天國の福音中に於て  
彼れの至善説につきて左の特別なる點々を觀するを要す。

(甲) イエスの謂ゆる至善は、是れ一己的なる善なりとす。上に説きし如  
く、猶太人の胸中にては、天國の期望は餘りに甚だしく政治的なる者と  
なりぬ。之に反してイエスは教へて曰く、天國の始は一己の人物に存す、  
天國の至善は各箇人の更新せる生活及び克惡の勝利に由て現實せら  
るべき者なりと。イエスは其弟子を、一人一人、名ざして其神國に招き入  
れ給へり。イエスは一國民の回復よりは寧ろ一己的なる感化を直接に  
希圖せり。イエスはパリサイ宗徒に諭して曰く、神の國は外部の壯觀及  
び威嚴を以て顯はれ來る者に非ず、神の國は既に汝等の中に在りと。路

加十七章二十一。イエスはまた人々の心腸を洞察するや即ち嘗て言た  
まひけらく、心の貧しき者は福なり、天國は即ち其人の有なれば也と。馬  
太五章三。イエスの唱へたる神國の福音は極めて一己的なる使命とは  
成れり。人中に於ける天國とは則ち一種の精神なり。此國に入るには遠  
く旅するに及ばず、天門を経て聖城に入るに及ばず、唯一種の自ら甘ん  
ずる精神となるを要するのみ、一種の新しき心を生ずるを要する而已。  
此國の市民權を有し、之が約束を嗣ぐ者となりて、長く此國の人民たら  
んとするには、別に何も外部の禮式を守るを須ひず、只其國風たる某種  
の精神に止まれば足れり。抑も神の國は一己一己の人にて成れる者な  
れば、一己一己の人の美德と忠信を以て其榮光となす。天國は即ち基督  
に似たる品行を有する箇人を以て建造すべき者なり。イエスは一時其  
絶妙の長技として、最微なる出來事をして最大なる眞理を發揮せしむ  
るの力を以て、其弟子たちに示すに彼等の希求すべき惟一の善を以て  
したまへるあり、即ち小兒を取りて之を彼等の中に立て、曰く、我まこ

とに汝等に告ぐ、若し改たまりて嬰兒あやななの如くならずば天國に入るとを得ず」と馬太十八章三。彼の單純なる神妙の方法を以てイエスは天國の究竟に永遠に何物なるかを顯示したり、——要するに天國は希百來國ヒヤクライの恢復して今は是れ世界を支配する王者の玉座を並列するが如き者に非ず、是れ亦サドカイ宗徒が渴望したる如き政治、治上シヤウジヤウの至福に非ず、亦パリサイ宗徒が人間の所要ソウヤウよりも、神が人類に父たる事よりも超えて崇めたる律法の天下にも非ず。イエスが一小兒を至大なる者として弟子たちの中に立て、至善の性質を教へたる者は、是れ清淨なる心及び深く愛し且信じ頼む精神を理想化したる者なりき。天國を見んには我等靈に由て新たに生れずんば有るべからず、天國は之を見るべき心ある者獨り之を見ることを得べし、如何となれば、天國の實現及び永福は全くキリストの靈を有するに存する者なれば也。

(乙) 神の國(天國)は箇人の造詣に係ると同時に亦是れ人間の善福なりとす。上にも説きし如く、天國は一己の生活上に神の政の行なはるゝ者

たり、箇人の力行に由て獲得すべき善福なり、然れども亦是れ國なり、人々の集合せる社會なり、其善福は人間社會てふ濶大なる生活上に於て保全すべき者とす。預言者たちも己にメツシアの國の福祥が人間に徧く及ばんとする者なることを幾分か觀じたり、然れどもイエスの唱へたる天國の福音は天下萬國の民に普く光被すべき者にして、其純潔なると絶待的に人間一統的なるに於ては、預言者たちの思想したる所に超越すること實に幾百千倍なるを知らずと謂ふ可し。イエスは悠然又猛然、安息日は人の爲に設けたる者なりと唱へて、己の道徳的理想が斯の如く當時流行の猶太教と天地の懸隔あることを明らかにしたり、抑も安息日たるや猶太教にて神聖に恪守し、律法の牆壁を以て小心翼翼と防衛したる者なりしが、イエスは特に該の最も森嚴なる制度を拈出して之が意味を大いに推擴し、其嚴守すべき所以の理をして其が人類を裨益するに利なるの點に存せしめ、以て天國の該の實を人類一般の用に展供し給へり。彼が其福音を世に宣傳する爲に臨みし天國は、要

するに徹頭徹尾亦是れ人類の爲に國たるべき者なることを斯の如く極めて明瞭に宣言せられたり、即ち神の國たる者は亦是れ地上に於る人類の眞の國たるべき者とす。

イエスの福音の斯く人間的なることは、イエスが自ら己れを人間と同一視したるに善く相符合ふなり。天國を常に現前する、連綿たる實靈境として地上に建立せんとて來れるメツシアは、自ら亦人間に屬し、我等の人間たる所を悉く具足し、神の前に人間を代表し給ふ。

されば、イエスの天國說中に在て我等の思想と願望とにむかひて表示せらるゝ所の至善は、以前の預言者の孰が懐きたる最廣の觀念よりも超えて濶大なる者にして、全く是れ亦社會的、人間的なる善たる也。是れ人間全體の圓成及び救贖に干與する無しに人々が箇々に獨り達し得らるべき生活の理想なる者に非ず。基督教の至善觀は此人間全體の長遠なる歴史の圓成する處に成就すべき者と謂ふ可し、——是れ人類の爲にする善なり、神が世界にむかひて願はし給ふ愛なり。

(註) 箇人は若罪惡に凝るならば失墜して此の眞人間界及び之が圓成に與かるを得ざるに至るべきやと尋ぬるは、是おのづから別問題に屬す。此に説き來れる所は、何人も人類(全體)の救贖に參與すること無くしては至善の域に達する能はず、永生を獲るに至る能はずと云ふに在るなり。

吾人は他人の生活と親密に義務に於て相結ばれる生活を盡すに由り、吾人の共通なる人倫の道、本分及び天命を全たうするに於て、茲に此の人間の完成に自ら與かり、此の人間の福利を箇々に分享すべき者とす。天下の樂國の將に來らんとすと云ふ基督教の理想は、決して僅々たる大哲學者に非ざれば造詣すべからざるが如き傲然たる望には非ず。萬人の行路は天國の開門に沿て走りつゝあり、吾人は皆一の拯救に入り一の大救贖に共に與かるに因て完全なる者となるべき也。

弟子たちは最初イエスの大理想——人間全體の救贖てふ事——を領會せざりしは眞なり、然れども彼等の之を領會せざりしは却つて幾層



著しくイエスの此天下を救ふて福音の理想を明瞭ならしむる耳。イエスの言行は弟子たちの傳福音書中に直接に反映して見ゆとは雖ども、之を書きたる弟子等が猶イエスの單純を必ずしも常に悟了せず、イエスの精神の那邊に在るかを必ずしも何時も曉得せざるは、是豈イエスの教誨が全く斬新にして新機軸を出したる者なりし明瞭に非ずや。イエスの日々の教誨上に最初より常に現前しめたる眞理の一般元素を弟子等に段々と悟らしむるには、先づイエスの彼等を辭し去るを要し、五旬節の大出來事あるを要し、彼等がイエスの福音を宣ぶるに方りて百方實地に經驗する所あるを要したるは、事實なり、然れども此事は却つてイエスの教が當時ユダヤに行なはれめたる諸般の教誨及び思想に凌駕することの千萬倍なりしを示す者と謂ふべし。否、爾來幾百千年を経たる今日に於てすらも、基督教會は尙イエスの福音の廣さを學ぶを要する多く、又之が純潔なる輝々煌々として白日の如き人間主義につきて究むるを要する者頗る多きに非ずや。イエスが天國の福音

を以て世に宣傳したる此人間及び人間の拯救に關する理想の如く勝妙殊絶なる社會的理想果して他に安んかあらんや。

(丙) 諸此の國は斯く人間に屬し、其の觀念と趣旨に於てや人類の爲なる者なりと雖ども、同時に亦是れ人間以上なる者とす。即ち是れ人類の爲にする神の國なり、天國が地上に建立され、且進歩しつゝある者なり。此國の來ることは即ち是れ神の啓示たるなり。此善は上より來る、而して人間の基督教的的生活及び基督教的制度の中に漸々に自然化し來る。是れ肉と血より來るに非ず、靈より來る者とす。人間に關する基督教の理想と學術上の最上なる望とは極めて親密に相似たる所あれども、其餘點は斯く酷だ相似たる處に於て我等は此非常の逕庭或は懸隔が此等二者の間に存するを茲に掩ふ能はず。今日に於ては學術界にも基督教の人間主義に甚だ類する人間主義ありて存するを見る。最上の善は今や最大多數の最勝幸福として稱説せらる。今日の諸學術が相助成すべき理想は是れ人間の生活の最大可能的發達なりとす。是亦基督教の

觀念にして、進化的道徳も基督教的道徳も此に在りてや其進路の方向を同じうす。然し乍ら其似たる所は更に、大いなる懸隔(不似)の框内に安置せられて存す。基督教の人間主義は神の聖靈に由て人類が榮化するの望なり。イエスの天國の福音は地上より躍出すべき何等の最美なる國の福音にも同じからず。是れ人間に在て此に今現實せらるべき善を造り出すべき靈力を公宣する者なり、而して此善たるや斯く此に今現實すべき事なりとは雖ども、亦是れ現在の環象の爲に制限せらるべき者にあらず、幾層高尚なる靈生活及び圓成を致すべき能力及び約束を其中に藏す。目を舉げて天涯を望めば、處として雲そらならざるは無し、地球は之を圍繞する青雲の中に懸りて存立す、是の如く凡そ人間が努力希求する所の者の終極を冥觀し、凡そ下界に於ける至全境の「天涯」を思想もて窮むれば、基督教の道徳は人間の此善が幾層濶大なる前途の光景中に含まれ、全天國の一部として其處に位を保ちつゝあるを發見す。我等は不死の人として此の天國に屬す。

イエスの教誨中に於ては、此至善の境を表するに二様の稱呼を用ふ、——即ち神の國及び天國是なり。贖なはれ完たうせられたる人間社會は神の國なり、如何となれば是其起原に於ても保存に於ても成長に於ても終極の圓滿に於ても凡て神よりする者なれば也。是亦天國なり、如何となれば是れ其精神に於て天の如く、又其永生の望に於て天の如き者なれば也。

(丁) 此外なほイエスの理想にして其天國説内に認め得べき特色は、彼が天國の如何様にして來るかを説ける中に籠りて見ゆ、即ち彼が理想なる善の人中に現實するの法則につきて教へたる處に顯はれたり。此特色は——此點に於て福音書中の教と、基督教の初代に猶太人間に行なはれたるメツシア時代的觀念とを比較するならば——炳然著しく成る者あらんとす。

猶太人民の普通に信じたる所に依れば、彼等のベヒロンに移されたる時、聖城の己に壞られ聖殿の己に毀たれりしに當りて、幕屋や神櫃や

二枚の律牌や祭壇や一切の聖器や祭司長の聖服は之を運び去りて、安全に土中に藏したりと云ふ、其之を埋めたる處は或はテボ山なりと云ひ、或はサマリア人の主張せる所に依れば、ゲリシム山なりと云ふ。此等の聖物を其埋匿せる土中より挽回するは則ち該國の恢復するを表する合圖なりと謂へらく、ピラトが其官職を奪はれてガウルへ追放されたるは、惟に彼が羅馬の法律を正しうせずしてイエスを磔刑に處したるに因るのみならず、又サマリア人民が夫のメツシア國の(埋藏せる)榮光を土中より發掘せんとて凱然たる行列をなして出でたる者をゲリシム山にて彼が虐殺したるに因るなりと。是すなはち猶太人が該國の來らんとを嚮りたる一方法なりき、曰く、請ふ過去を恢復せよ、昔の勢力を挽回せよ、聖器を回復せよ、既往を掘りて將來を發見せよと。斯の如く猶太人は預言者たちの墳墓を守りつ、國民の榮光の回復すべき徴は地の洞窟中より掘出せられんかと望みたり、亦之と反對する方面にむかひてメツシアの天下の現はれんとするを望みたるも多かり、國家艱難

の日子に於てや、彼等は想像して思へらく、該國の榮光は其儘天へ移されたりと、而して期望すらく、期到るや、該榮光は突然神異の力を以て天より降り來らんと。又一傳説に依れば、云ふ、聖器は天に擲へられて彼處に保存せられ、メツシアの來格を待て地上へ回復せられんと。サマリア人がゲリシム山にて聖寶物を掘らんとしつゝある間に、パリサイ宗徒は天よりの休徵を仰ぎ求めつゝありき、博士たちの此期望に在て該國民の望は天化せられたり、然れども未だ靈化はせられざりき。神の國の恢復を斯の如くに思想したるは、孰れも是れ道德的に之を觀じたる者は非ず、斯る祈願中には素より道德的進歩の法則に順がふといふが如き觀念の入りたるある者にあらず。

イエスが其國の來らん事につきて説きたまへる全軀の教誨を今は只通覽して如何に著大なる逕庭がイエスの觀念と彼等の觀念との間に存するかを指點するを要する而已。

キリストが己れの苦難と死につきて、己れの弟子の派遣につきて、己れの

聖靈の供證につきて、思想したまへる所は、深遠に道德的なる者なり。キリストが世の將に榮らんとする審判および世の終末に關して宣べたる預言的なる言語と云ひ、又其己れの國が一芥子たる莢爾の地より漸々に膨脹して天下に徧ぬきに至らんとすとの譬喩と云ひ、皆是れ彼が道德力を待みたるの厚きを示さざる無く、又神の聖旨が由て以て天に於ける如く地にも成るべき、道德的步履を彼が了知せるの極めて深きを明らかにせざる無し、願くは、御國の來らんとすとの主勝は、是れ聖師の精神にて之を唱る弟子、神の聖旨を地上に成さんと欲する弟子の口に在ては、凡て是れ道德的に聖成せんことを希がふの祈禱なりと謂ふべし。福音書中にて前言せる災禍は元は道德なる者なり。曰く、メツシアの世の來らんにには必ず道德上の賞罰ありて之に先だんとす、福音は道德界の麵酵として人間社會に磅礴せんとす、麥と稗とは收割の時まで相雜りて併生せんとす。イエスは説きて教ふらく、彼が國は彼が神の靈の力を以て人中に立てる日に既に現前してありきと、人々は彼れ

の靈を受くべき者なるが故に、此國は其々の裏に入々の中に臨まんとす。此國の前進し來るは靈性的なる進歩たるべし、天國は凡ての靈現に於て地上に現在す、一社會若くは一國民の基督教的精神に於て現實となる。約束の救贖は決して埋藏されたる過去の聖寶物を掘出して獲らるべきに非ず、又は俄かに天より休徵を賜はるありて獲らるべきに非ず。(馬太二十四章二十七と三十三章三十——三十三節を比較對照し見よ。)人類が達し得べき所、預言者たちが夢みたる所の至善は、人間の生活の漸々に益々靈化する事に由て地上に現實すべき者とす。人々の心の新らしく成るに於て、法律の精神の益々良くなるに於て、天下の社會制度の愈々基督教化するに於て、吾人は夫の「人子」が願はくは「御國の來らんことを」と在天の父に祈れど、吾人に教へたまへる祈禱の漸々に成就し來る徵候を認めずんばならず。斯の如く人生が漸々に靈化し來る事は、是れ純粹に宗教的、道德的なる步履なりとす。斯る者として之を觀れば、イエスが由て以て人類を其存

在の理想境に達せしめんとしたる方法の觀念は、後年の猶太教にて普通に成りたる夫の世間的なる若くは超自然的なる觀念と相異なることと唯に天淵のみに非るなり。

されば、新約聖書に見えたる至善てふ理想は、其がイエスの天國説上にて究駁し得らるゝ限りに於て之を言へば、是れ一己的なる、又人間的なる者にして、同時にまた超越的、靈化的なる者なり、即ち是れ人間の好理想にして、道徳的なる步履を経て達せらるべく、地上に愛の君臨する（道徳的に）神の現前するに由て現實となるべき者とす。

(二) イエスが山上の垂訓中において人々は、天父の完きが如くに完た

く成るべしと説けるを見れば、イエスの道徳的理想は亦是れ或る他の新奇なる形を呈する者と謂ふべし。

古の新警にして全く前人未發なる者なる事は、之を古代の哲學者輩が吐露したる思想中に嵌込んと試み、或は之を猶太の學士やパリサイ宗徒の喋々せる傳説中に挿入せんと試むるに當りて、忽ち一目に瞭然たる者あらんとす。我等若し之が十分なる意味を領會し、之が道徳界に獨りなる所以を飜味せんと欲せば、此大理想が始て世に興られたる場を回想し、如何なる人民に向ひて其が宣べられたるかを記憶するを要す。此語にして若し師が其道徳の念の熱したる際に二三の入室者に宣たまひし者ならば、或は然か奇絶なる者とも見えざらん、然ども是其實は大群衆にむかひて説きたる者なれば、大群衆は聽きて、其訓に愕然として駭けり。馬太五の一を七の廿八九と比較し見よ。學士輩の語に慣たる人民にはイエスの訓誨すら奇蹟と見えたらんも、怪しむを須ひず。實に完全なる善を訓ふる純粹の誠命或は約束を萬人の眼前に掲げ、稅吏輩の前にも罪人輩の前にも毫も此天高の理想を卑めざりしは即ちイエスの理想の巍然として群中に傑出したる所以なりとこそ謂べけれ。

基督の言語にして人間の一大極理想を思念するに單に止まりたりとも、基督教の道德的理想は尙其人間に應用するに於て十二分に彰著なる者と見えなん、然れども該理想は亦是れ汝等の天の父の完きが如くに云々てふ誠命と直接に相聯なれる道德の大則、或は至徳圓滿の標準の在る有るが爲に更に幾倍意味深長なる者とは成る也、亦路加第六章三十六節にて父神の慈悲が人間の慈悲の備表とせられたるを參觀せよ、此奇拔極まる語の中に基督教の道德的理想の特殊なる徴證及び善美は顯然と啓示せられて見ゆ、是れ一種の絶對なる理想なり、何等の律法といふとも此の至徳的誠命より越えて緊切なる者は復あらず、流石のカントもキリストが斯く人民に垂たまひし此語ほど然か單純なる、然か普遍なる、然か森嚴なる、無上大法の格言をば案出し得ざりし也、道德的哲學も人道に關しては是よりも高尚なる、是よりも濶大なる根源には溯り達するを得ず、基督教の道德的理想は、其高きこと天の如く、其清きこと光の如し、科學的道德學は、人倫の萬殊なる特別點よりして善

てふ者の法則を歸納し來ると雖ども、全人間社會の至徳として人道を其根源に概括するに於ては、此福音の誠命——汝等萬有の創造主の完きが如く完たくなれといふ此誠命——ほど濶大なる概括には達するを得ず。

偕此の誠命たるや人道の抽象的なる原則としては斯く何等の道德的觀念にも讓る無きと同時に、亦是れ斯る科學上の道德的概括に凡て缺くる所の他の一品質を有す、然るに此品質たるや、我は之を有するが爲に世を風化するに力強く、彼は之を缺くが爲に割合に力弱き者とす、即ちイエスの此加へたる辭は至徳てふ觀念をして死物然たる抽象的なる大體觀念と冷淡なる律法主義とを脱せしめ、却て彼が至徳的誠命に注入するに愛に於て其生を圓成すべき活物的の温熱を以てす、之を要するにイエスが引て以て其道德上の誠命に萬鈞の重を加へたまへる神なる者は決して模糊たる無人間のなる、若くは漠然たる哲學的なる觀念に非れば也、不完全の域に在る人類の前にイエスが直接に掲げた

まへる完善（完）てふ者の壽幅は是れ冷淡無頓着なる死律法に非ず、亦是れ神其物をすらも其毫も世を顧みる無きの絶對境や其自淑自滿の凜然たる榮光に高み去りたる者にも非ず。イエスは父と其父たるの間徳とを吾人人類に親近せしめ、人類をして其圓滿なる父徳に由て直ちに己れの自分の量を學知せしめ、己れが道德的に子と成り得べき者なることを學知せしむ。父に則り、父の完全なるに倣ひて、汝等もまた完全なるべし。此の完全なる至徳の性質は我等イエスが懐ける神といふの觀念を道德的に領會せんと求むる時に之を曉るとを得ん。但し此事は後に至りて明らかに成るべければ、此點にては只左の如く言はざりなん、曰く、此の理想をイエスが人民に説きたまへる關係を察すれば、吾人は茲に一新道德的宗教的眞理を曉り、神を愛としての大啓示を認めざるを得ず。イエスが其名を以て己れの弟子を祝せし在天の父は、律法として完全なるに非ず、愛として完全なる也。——即ち彼等が需むる所を知れる父として、愛の道と量とに於て完全なる也。是と同意道に於て、是と

同意方法に由て、人々はまた其存在の目的（道德的なる目的）を追求せずんば有るべからず。猶太人中の最も義なる人々も未だ學ばざりし所、猶太人中の「學士」輩も尙敬ふる能はざりし所の一大事は、即ち是れ愛に由て自ら完たうするの法（完）また量（完）なりき。イエスの誠命は、至徳を吾人に要求するの中に亦之を成就するを得べきの方法を含蓄せり。——即ち神が父たる事は是れ標準たり、愛に於て御父の如くに生活するは是れ其が現實圓成するの方法たるべし。故にイエスの理想たる善は、其が山上の垂訓中にて呈示せられたる所に依れば、是唯に吾人に其本分を號令すべき或る絶勝の徳輝を謂ふ者のみに非ず、唯に其本來の眞面目に適ひ且其諸の功用を善く盡すが如き完全なる存在物てふ觀念を高めたる者のみに非ず、人間社會の終極の善（即ち箇人は續々失敗せんも終には達せらるべく、而して最後に生殘れる僅少の人々之を享樂するを得べけん終極の善）と云ふ如き或渺漠たる觀念のみに非ず。——是即ち完全なる有心者の理想なり、完全なる生活の理想なり、是れ此理想境たる

や萬人の爲に開けたる道德界の門戸にして、凡そ入んと欲する者は入るを得なければ也。基督教の此理想は、是れイエスの此教誨に依れば、有心者の愛を以てする如くに熱しつゝあり、活きつゝある者とす。是すなはち人間のために道德的なる理想にして、神が萬姓に「父たりたまふ」(Fatherhood of God)中に啓示せられたり。

(三) 最上の善てふ理想はまた是れイエスの教訓に特色なる言語——即ち「生命」及び「永生」といふの文字——の中に於て其解釋を領す。

此等の文字は記述の最も古しといふ馬太と路加の福音中にも屢々出づれば、イエスが必ず或る特別なる意味にて之を屢々用ひたらんとを示すに足れり。第四の福音書中に於る其が一種特別なる用法は亦是れイエスの金口の教を發揮する者なりとの事は、單に其がヨハネの特色なりと云ふを以て打消すべきに非ず。却て此事は第四の福音が使徒の直傳に成れりとの一般の證據に本づいて信受すべき者たる

るのみならず、亦ヨハネの永生觀が前三福音書中に記載せられたるイエスの全教誨と一致するを觀、またキリストと偕に靈にて「生」といふ觀念につきて後日に使徒たちが敷衍舖張したる所の者を説明するに其が尤も適するを觀れば、最早疑ふ可らざる者と謂ふべし。此はヴェント氏が其著述に係る「イエスの教誨論」中に佳く詳論したる所なり。Wendt, Die Lehre Jesu, ii. ss. 196 ff.

福音書中に「生」の形容詞として出たる「永」の字は其れ自身に於て果して永遠存在といふ觀念を含むや否やとは、是れ寧ろ教理神學に屬する者なれば、此には取て之を論ぜざるべきも、此等の二語「永」と「生」と相合したる者は是れ道德上の其實體を其中に含む者にして、人生の至高なる目的、至大なる善福を謂へるや著し。此等の二文字は、其福音書中に相結合して出たる時には、是れ生命を其最高の力をもてる者とし、其至大の現實を致せる者として表示せる語とす。提摩太前書第六章十九節には普通に「永生を得ん爲め」云々とあるに、正確なる古寫本には一に「生命」即ち



眞に生命なる者を得ん爲め云々に作れるを見れば、亦是れ福音書中の永生觀上における此實体を明らかにするに裨補なくんばあらず。抑生命を愛するは唯に自然の天性なるのみならず、又是道德上の意味を有す。我等に生命を與へよ——一層豊かなる生命を與へよ——大海の如き、無邊無際無碍の生命を與へよ——とは是れ必死の人間中誰か其靈魂の道心道情として時々に感ぜざる者あらんや、是即ち眞に生命たる生命を飢え渴きて慕ふ者とす。基督教の理想は靈魂の此の單に血氣的のみならず、情願を無視せず、又排斥せず、却つて之を取りあげて、鋪張擴充し、其が永生の約束を以て之を高尚にす、吾人が地上に於ける科業は——基督教道德に依れば——生を得るに在り、生は善なり、死は然らず。(提摩太前書六章十二節を見よ。)

イエスが説ける「永生」永生を得る、死を出で、生に入る等の語中に含まれる若干の道德的要素を特に我等は茲に講究せんとす。(馬太二十五の四十六、約翰十七の三、六の五十四、五の廿四を見よ。)

(伊) 既に指示したる如く、生は善なりとの思想は此等の言語中に明らかに含まれて見ゆ。有心の生命は道德的に希ふべき或る物なり、吾人が生命を愛するは之を道德的に愛する者なり。生命とは、其我等の爲にするや、又我等の之を知覺するが中に於てや、單に生存を謂ふ者に非ず、亦これ連續する有心の生命をいふ者にして、其れ自身即ち是れ道德上希望すべき物なり、是れ神の聖旨が其子女の保全に現實すべき者なり。受造物の限域内に於て、幾分か、道德的有心物(人)には生命を己れに有するの賜物を附與せられたり、此力たるや、其本元且能造なる圓滿の量に於ては、是れ神の性質に屬する者たるなり。(約翰五の二十六)斯る道德的存在物たる人類を代表し、併せて又之が終極たり圓滿たる神子には神此の生命を己れに有するの力を賜へり。

自我の生命は、一たび得るや、宜く失ふべからざる善なりとす。生命は、其自覺の我中に現實したる限りは、是れ保全せらるゝを要す、而して、若し道德的に保つならば、其地位を、失墜するの憂なかるべし。如何なる程度

にもあれ、凡そ今までに自覺の我中に現實したる生命は、其程度にまで之を維持せずんば有るべからず、之を放ちて其貴き地位より失墜せしむべからず、是れ折角自覺の域に上りたる者なれば、之をして元の無靈無覺的境界に墮落せしむべからず。生命、自我自覺の生命は靈の功果と見做さざる可らず、されば此後者其れ自身即ち人類の能造的なる目的を達したる者とす。而して靈の此功果は即ち宜く終極の善福に於て保全せらるべき者なり。

生命には尙吾人が下界の經驗に由るのみにては知る可らざる高尙の能力ありて或は存せん、但し吾人が萬物の靈長たる地位に高められたるに由て獲たる、靈生活の此の堅實なる無上の善福は、是れ其性質に於て永遠の善福なり。——基督教の理想は亦是れ此永生てふ二字の中に籠れりと謂ふべし。生命が其始めて物質中に動きてより段々に高等の地位に昇りたる迄で若々と相續きて其預言を成就し來れるを見れば、基督の辭または是れ味ひありと謂ふべし、曰く、我が來れるは生を得せ

しめ、且之を豊かに獲せしめん爲なり（約翰十の十）。

（呂） 諸生命の約束は亦——基督教の至善觀中に於ける一元素として——惡より救はるべき善福たる生命の望を其中に藏す。基督教の道德的理想は死と死の權とに反對す。生命は其れ自身にて善なる者なれば、救はれて惡の侵界を免かるべし。苦と死を脱する事、生命の現敵を退治する事、生命が終に一切の邪魔を解脱する事、——是みな生命を其れ自身にて善なる者とするの觀念中に含まれて見ゆ。該觀念は夫の天地間にて人間まで徧く行なはるゝ死の法則を脱離せんとの望を要す。是れ此死の法なる者は、其が人類にまで既に其力を及ぼしたる所に就て見れば、是れ人類が知覺するに至れる善を否む者に似たり、其意志の自由を破る者に似たり、永生、眞に生命等といふ此等簡短なる福音書中の句に依れば、善てふ基督教的理想は生命が終に必ず死の權を蹂躪して高く昇るに至ると云ふに在りとす。是れ生の法は死の法に負かに勝ると謂ふなり、道德的自覺界に主たる者は死に非ず生なりと謂ふなり、道

徳は風前の燈たるが如き今日の危き境界を遂に脱し、靈に於て苦難を超越し、死の權を全く解脱するの妙域に達せんと謂ふ也。(約翰六の五十、羅馬六の八九、哥前十五の二十八——五十八)

(波) 福音書中に見えたる永生の觀念は、亦靈性上の更新てふ觀と親密に相關係す。是單に贖なはれて惡を脱したる生命たるのみに非ず、亦是れ聖靈の出生より發し來る所の新生命たるなり(約翰三の三と十五とを對照せよ)。是に於てか(後に精しく論ぜんとする如く)惡を救はれて新しき生命に入るとの眞理は、基督教の至善觀中に普く入りて之を染なせり。

(仁) 基督教の理想は、永生としてや、是れ更に又生命を以て、自覺境の完全具足したる者と爲すの觀念を含蓄す。

單に存在するど生くるとの間には香壤の差ありて存す。樹は冬にても存在す、然れども六月には扶疏として葉茂れる各々の枝を以て生く。新約聖書中の永生觀は花實爛熳々たる存在を謂ふなり。イエスが其弟

子の信仰の前途に掲げたまひし生命の望は、決して無色無味なる約束に非ず、億萬年後に於ける空漠たる望に非ず。イエスは枝葉繁茂し花葩重疊し果實豐饒なる生命を啓示したり。我が自覺境の諸善福が圓成せんとの觀念は、基督教徒の永生の望に能ふるに自得の熱心と室家然たる満足を以てす。至善てふ者は哲學者輩の時に或は主張するが如き空々寂々なる觀想境または無意無識の寂滅界を謂ふに非ず、是れ最も高く最も熱し最も豊かに生くるの謂にして、凡そ生命をして生き存らふるに價あらしむるが如き人生の美德を悉く極むるの至福境をこそ稱する者なれ。されば至善てふ者は、基督教にて持する之が觀念中に在りてや、是れ斯の如く一言にて非常に熾盛なる生命とは成るなり。

イエスの永生觀は斯の如き者なりしとの事は、又イエスが其の弟子たちにかひて約束を垂るに當りて用ひたる言辭に徴して察知するを得べし。イエスが衆をして豊かに得せしめん爲に來れりと稱する生命を描き出せる語を見るに、是れ有形なる物象の莊嚴より借り來りたる

語に非ず。イエスは王者の寶座、巨萬の金銀、宏壯の宮觀、金光の府城等につきては、殆んど語る所なしと謂ふも過言に非ず。此等の普通なる有形の影像を以て將來の福祉を形容することは、イエスの言語中に極めて稀なり、其稀にある者も是れ主の出で來れる天國、主の常に念頭に置く天國の榮光を語るにつきて只僅かに説き及べる而已。但しイエスは暫く其弟子衆を離れんとするに當りて彼等に之が覺悟をなさしめんと欲するや、之を諭すに淡泊なる言辭を以てし、夫の昔し預言者たちがシオンの將來の榮光を描くに用ひたるが如き壯大なる形容辭をば全く措きて用ひ給はざりき。イエスは最も單純なる、最も人稱的なる語を用ひ、即ち己れが現前することを形容するには其記號として靈活物を借り來り、己れが昇りて入るべく、弟子たちも亦與かり受くべき生命を描寫するには其譬喩として交遊上の辭を轉用す。斯る活友愛、活親交は即ち是れ天國の最上善を構成する所の關係なりとす。故に曰く、我生れば汝等も生きん、暫くせば汝等復我を見るべし、我は父へ往く、父の我

を愛し給へる如く我なんぢらを愛せり、我かれらに在り、爾我に在り、彼等をして一に完たくならんしめんとす、(約翰十四章—十七章)斯の如くイエスは各種の寶玉を以て其天の記號とはせず、人稱的代名詞、我爾等を以て之が記號となし給へり、イエスが人生の葡萄酒を爲に祝したる聖徒の交親は即ち是れイエスが其再び來らん時における天國につきて自ら世に描き出せる預言的なる一大畫幅なりと謂ふべし、(馬太二十六章二十九節を見よ)。

人々が神と交親し、又神の光の中に彼此相互に交親して、圓滿の域に上達すと云ふイエスの此の至善觀たるや、極めて高妙にして全く想像力に超ゆる遠しと雖ども、猶是また人心に甚だ親近なる者とす、——是れ超焉たる圓滿境なりと雖ども、同時にまた是れ愛の至純なる關係としてや實際なる者且親近なる者と謂ふべく、此の愛の關係中に在て人は今其至誠至良なる生命を認むるを得ん。

基督教の此理想が道德上に功益ある所以は、其能く我等の經驗中に於

る——今最も眞實なる、又我等の自ら珍重する——夫諸元素の働に由て、我等をして完全圓滿の至境といふ、勝妙特絶なる思想を占得せしむるに在りとす。是れ即ち善と稱する積極なる(人間の)觀念にして、固より天上の物なれども永生の約束を以て吾人に垂示せられたる也。其の影像にして親近且眞實なる者は、人間の家庭に於て發見せらるべし。基督教の道德に於ては、家庭は自ら至善の影像と成り、雛形となり、地上に於ける天國の徴と成るなり。

古今に論なく他の諸道德學に於ては基督教に所謂至善の如き然か活氣ある、然か人間のなる、然か家庭然たる至善觀を求むるとも到底獲がたからん。生命は斯く其れ自身に於て、及び其れの圓成に於て、觀ぜられたるほど然か周到に、然か濶大に、然か超絶的に觀ぜられたるは他に絶て有らず。是即ち善の本質また本體なれば也。

(保) 永生を觀じて活善の充盈完全せる者となすの此理想は、——之が隨伴者として、又は之が呼吸して現實すべき空氣として、——聖義、仁、

愛等の觀念を必然に合蓄す。但し該理想は此等の文字の孰が獨にて言あらはし得るよりは深き意味を有す。是れ譬へば名詞にして此等の文字は其斷定言なりとす。之が定義として最も其眞に近き者はイエスが生命を描寫して以て神を識るの事となせる深妙なる言語の中に含まりて見ゆ。其語に曰く、永生とは唯獨の眞神と其遣はせしイエス、キリストを知る是なり。約翰十七章三節。夫れ生命とは識るの事なり。——唯に事物の知識を謂ふに非ず、萬有の學識を謂ふに非ず、——學識を有するは生くるに非ず、生命、即ち永生とは是れ唯一の眞神を活識するに在り、又人と神とが合して一となれる彼を活識するに在るなり。常にイエスの心に在りし此の思想、即ち眞生命は神と合一するに存すといふ此の思想は、イエスの愛したる某弟子の語にも反映して見ゆ。云く、是すなはち眞神、また永生なり。小子よ、爾等みづから慎みて偶像に遠ざかれ。約翰第一書五章二十一——二十一。惟みるに眞神を識り且永生を識るの知識に較ぶれば、他の諸の知識は偶像崇拜としも謂つべき者たる而已。此最

上の善の部分として所有せられざる諸善は偶像のみ。

(邊) 至善を斯く永生として観ずるの思想中には亦其至善を一部分は現有の實境として観ずるの思想ありて籠れり。

斯の如く永生を以て信仰の現生活と爲すの觀念は第四の福音に特有なるに似たり。他の弟子たちは、イエスが義人は永生に入るべしと教へたまひしと心得しに(馬太廿五の四十六)、ヨハネはイエスが亦信者は永生を獲たる者、死を出て生に入りたる者と宣まへりと記憶せり。(約翰三章三十六、五章二十四)但し前三福音書中にも亦イエスが神の國は已に幾分か來れりと説きたる由を記せるを見る(路加十七の廿一)。ヨハネもまた永生を是と同様に説けり、是れヨハネの拯救觀にては、永生といふ文字は殆んど全く天國てふ觀念に代りたる者なれば也。

永生の善福は幾分か現世にて享有するを得べし。固より吾人は未だ之を全くは有せず、又其既に有せる部分も重ねて惡に染まざるを保せず、再び失なふの恐を免かれず。然し乍ら十分には非ざれども我等は今之を眞實に有することを得ん、我等は愛を有する如くに今之を有するを得ん、其全体的純潔と力量にては無しと雖も、生きて成長しつゝある其れの眞理の幾分を有するを得ん、基督教の道德學にては、其理想の善たるや——時として或る人々の思ふが如き——永遠の福徳にあらざ、——來世に受くべき幸福の榮冠に限らず、是れ生命にして、既に眞に生命たる者なり。

是故に吾人は永生を今獲べしと云ふとも、決して自語相違に陥るに非ず、無意義の句を用ふるに非ず。凡そ人は永生の要素たる愛を有するや其だけは永生を獲たる者とす、之に反して人は愛を失墜して憎に入や是れ永生を失なへる者とす、如何となれば憎は萬善を打消す者なれば也。憎に由て人は死の權下に入り、愛に於て永生に入る者とす、是れ神は愛なるに由て愛の性質もまた斯く永遠なるが故なり、トマス、エルスキ  
ン妙に善く此眞理を説出して曰く、永生とは神の愛に在りて活くるな

り、永死とは自己に在りて活くる也、故に此より彼へ移る時に數分間或は永生に在り、或は永死に在るを得べし。他語を以て之を言へば、永生とは時間の元素に非ず、生命の活素なり、永生は、其究竟の要質にては、是れ愛なる神を識るに在るなり、而して此は亦幾分か現在の知識たるを得べし。吾人は眞の生命の何たるを知らんとするには死を待つを要せず。吾人は夫の愛の關係を以て同儕人類と生活することを始め、又神に活くることを始め得るには、何ぞ先づ預め身軀の或る不可思議なる變化を経ることを要せんや。人斯く愛に在て神に活くるは是れ既に眞生命にして、斯る生命としてや亦是れ其善なるに於て永遠無窮なる者とす。

永生の此觀念中に於ける時間元素は永生の本質に屬する者に非ず、されど恐らくは是れ其が所謂形而上的條件に屬する者ならん、有限の道德生活は多分形而上的條件たる時間相續の觀念を全くは脱し得ざる者なるべし。時間は有限の人間には永生を會得するに常に必

要なる者ならんも知るべからず、然れども眞箇の生命に於ては、今すらも我等は幾分か時間の外に獨立するを漸々に感じ來る。即ち我等は時間的要素を生命其物の下に從屬せしめ、時としては殆んど之を忘却す。生命は其至高の靈潮に在る時には幾分か時間を覺知すること無き者と成るなり。我等は記憶にて歲月に超越し、光陰を克服す、我等は望を以て出來事の相續を跳越し、先後の次第を脱離す。愛は月日を既往に要せず、何時も現在の實境として存す。時間は同一なるも思想する精神に應じて長短をなす。——我等は常に時計に依て光陰を度るに非ず、屢々思想に依て光陰を度るなり、例へば思想の甚だ強き時には數時間も數分と見ゆ、愛慕の極て熾んなる時には一日も千秋と成る、是に由て推すときは、造詣の深まるに准がひて益々時間の表に獨立するに至らんこと自然の勢なるが如し。

(登) イエスが至善を永生と觀じたる者の中には亦福祉を以て之が元素及び空氣となすの觀念ありて籠れり、眞正の生命は固より幸福に

在るに非ずと雖も、亦幸福なしに現實すとは思想するを得べからず。福祉は即ち其自然の結果たり、又其必然の存在形なりとす。幸福は眞生命、即ち永生の所謂形式的性質なり、實質的性質にあらず。凡そ眞の生命は、人之を生活するの度に比例して、其度にまで人に幸福を來すべし——凡そ眞の生命が道德界に行なはるゝの廣さに准じて、其廣さにまで不幸〔を生ずる〕の原因は消え失せん。永生と福祉との兩觀念は車の兩輪の如く、一は實質とし一は形式として彼此相須つなり。

眞生命と其の幸福との間に於ける此關係と歸一とに關する虚妄の觀念ほど宗教上に大害を及ぼしたる者は復あらず。若し善を幸福と相分離して觀じ、毫も其が圓成すべき要件或は要態に着目すること無くれば、其結果として虚妄なる刻薄の禁慾主義或は難行苦行主義茲に生ぜん。而して道德の思想中より福祉を無理に除去するの弊は必ず其罰として眞生命中の或る徳行を喪ふに至るべし。抑も品詣は空に生長發育すべく造られたるに非ず、日光温暖なる空氣中に生長發育すべく造

られたる者なり。道德界に於て幸福といふ思想に高く超越せんと努むる者は必ずや世に立つに及びて道德界に大丈夫たる能はざるに終らぬのみ。夫の僧院に空く閑坐する聖徒、不潔不愉快なる僧徒若くは山僧、善良なる人倫中に矮縮し鼠餒するが如き人物は、是れ道德と幸福との兩觀念を斯く妄りに分離したるより生れ出でたる者のみ。他方に於ては又天國を單に其福報のために求め、或は單に地獄の火を逃れんと欲するより求むるが如き事ほど宗教界に道德を衰弱せしむる者はあらず。地上に在るわひだイエスは夫の己(イエス)を麵包と魚との爲に尋ね求むる人々を叱せり、斯の如く弟子衆にしても若し天の麵包と天の魚のためにキリストを求めたるならば、同く叱責せらるべき者とす。現在の幸福を堅く執へて離さずにをり乍ら、未來の報賞を獲ん爲に敬虔ならんとするが如きは、此世にても彼世にても愛の生命(即ち永生なる者)に大不利なる者たらずんばあらず。

健全なる基督教的意識にては、眞生命(即ち永生)の此等二元素をば孰を



も等閑に附せず、又混亂に委せず。此生命は生活の完全なるに存す、是れ神の現前の日光中に歡喜する所の道德的圓滿なりとす。眞に是れキリストの形像に象<sup>かた</sup>どれる德行なりとす而してキリストとともに天に昇るや恰も故郷に歸るが如く然り。基督教の理想中に在て斯く完全なる生活及び終極の幸福てふ兩觀念を相交結せしめたるに對しては、所謂科學的道德學といふとも毫も贖礙する恐は無からん、毫も非難を加ふべき所以を見ざらん、如何とすれば是れ夫の進化的世界觀中に於て主張する境遇順應及び適種繁衍の眞理を圓滿の域に進張せんとする者に外ならざれば也。之を要するに、基督教の天國説たるや、其が德行と幸福との觀念に於ては、是れ所謂科學的進化的樂天主義を其圓滿なる福樂境に於ける道德的生活の至極至高なる(適種)生存に推擴めたる者なれば也。

皆以上は福音書中の若干語内に炳然たる、希求すべき至善(無上善)を講究したるなり。然し乍ら福音書中より輝き出る所の理想は、單に言語に於けるのみに非ず、又力に於てす、是れイエスの教説上にて吾人に垂れたる者たるのみならず、亦是れイエスの品行上に於て吾人に賜はれり。

(四) 基督教の理想はイエス自身是なり、即ち其榮光を目撃したる群見證者に地上にて知られたる如き、又爾後其聖靈に由て其教會の禮拜上に尊榮せられたる如き、イエスは是れなりとす。

此道德的理想を其が基督の身上にありて啓示せられたる處に就て領會するには、夫の三百年間の思索の結果としてニクア信經中に吐露されたる、綿密極まる基督の身位觀を教會の神學上より借り來るを要せず、我等は彼<sup>か</sup>の人中に住ひたる神人に接近するを得ば足れり、即ち人間の諸罪をば悉く脱し、恩恵と眞實の充ち満てる身に於て、弟子たちが見證者たる人物を大凡<sup>おほま</sup>に彷彿するを得ば足れり。夫の天父より來りて天父へ往き、地上に於て天上に於る者の如く生活したるイエス(約翰三章十三)彼すなはち基督教の歴史の理想たる也。彼は絶大の光にして、爲に

世間の群小光を悉く耀かしむること宛ら神の榮光を以てする者の如く然り。完全なる生活の此理想は固よりキリストに於て歴史上の境遇に服し時間と空間の制限以内に啓示せられたり。要するに、歴史上のキリストは一定の某時處に現はれざるを得ず、彼は或る一國にて、且或る一選民中にて神の事業を行なはざるを得ざりし也。彼は其復活し昇天し且再び天より主として來り得る前に先づ地にて苦難を受けざるを得ず、人として死せざるを得ず、斯の如き地上の制限の中に於て、又斯の如き歴史上の境遇の下に於て、夫の各人を照す光は啓示せられたり、最上の善は吾人が生活の儀表として垂賜せられたり、但し其一たび啓示せらるゝや人間に於ける神來の善福として永く存住す。イエスの感化力は永久止む無きの感化力なり、凡そ我等が力を盡し、心を盡し、身を盡すべき物は悉くイエスの名を以て稱せられざる無し。

但し基督教の道德的理想は斯の如くキリストの身に於て現實すと雖ども、キリストの靈に於て活動すと雖ども、即ち此理由あるが爲に十分

なる定義を下すを得ず、又之を最も淨らかに見る人々も、又最も力強く之に倣ふて生活する人々も、之を十分に明瞭なる言辭にては他人に説くを得ず、是れ人の生活と其德行には必ず常に定義を超脱する或る物ありて存すれば也。富贖なる生活は從來未だ曾て全くは言辭に顯はれざりし。有心の愛と感化力にはいつも其既に量られたるよりは幾層深大なる靈ありて必ずや啓示せられんことを待つ者なり。最上なる生活、及び是より出で來りたる德行につきては、聖ヒラリが昔し言たる如く我等は尙も言ざるを得ず、——吾人は人間の劣等なる言語を深妙不可思議なる事物に推及ぼさざるを得ず、是を以て敬虔なる瞑想裏に保つべき事も口外に出で、人間の發言てふ危殆なる境界に陥いるに至る。斯の如く基督教の理想は——將來の再降の節に尙啓示せらるべき主の絶大なる榮光として——其教會の前に常に先だちて行くなり。教會の靈覺中に於けるキリストは、神の榮光の圓滿なる啓示として其愛せられ、慕はれ、望まるとの至れるに於てや、弟子たちは地上にて謙り且親

矣したる當年のイエスよりも却つて一層大いなるが如く、一層神なるが如く見ゆ。寔に某使徒は已に能く言へらく、我等肉體に依てキリストを識りしかども今ははや此の如くに之を識らずと(哥林多後書五の十六)。基督教の理想は、其尙未だ現實せざる絶大の榮光に於てや、是れ靈に依りて識られたるキリストなり。我等の理想は至高者の右に坐し給ふキリストにこそあるなれ。

基督教の理想は其歴史上に啓示され來れる模様大凡斯の如くなれば、次に我は進んで該理想の包藏物中に就て基督教の意識内に認めらるべき其最も肝要なる者三箇を描出せんとす。基督教の理想は、斯の如く觀來れるや、茲に他の道德的理想等即ち基督教外に於て獨立に起りたる理想または基督教の觀念の感化力と相接する地壤に於て起りたる各理想と相比較して發明する所多かるべし。

## (一) 基督教の意識に於ける理想

一、基督教の理想即ち其歴史上キリストに於て世に與へられ、基督教徒の靈覺中に發見せらるべき者は、是れ絶對的なる理想なり。世には是より高き者はあらず、是ほどに凜然たる者は無し。是れ基督教道德の絶對的無上大法と稱すべし。某使徒は深く自らキリストに自得する所ありて、明言すらく、凡そキリストの靈なき者はキリストに屬する者なり(羅馬書八章九)。都てカントが無上大法を立て、道德のために保有せんと欲したる所の者はキリストの靈の絶對的なる無上大法を以て茲に基督教の意識のために保有せられたり。然し乍ら基督の理想の斯く道德的に絶對なる事は、是れカントの無上大法の如く哲學を以て一切の道德の精粹を一箇の大格言に蒸升して得たる者に非ず。基督教の道德法も固より其絶倫なる金則を有す。然れども基督の道德は何等の一格言(如何に善美なるにもせよ)にも約し得べき者にあらず。基督教の道德法は活的誠命なり、人類の靈に予へたる聖靈の法たるなり。斯る物として、是は絶對的なる權威を有す。

人々の靈魂内に於ける基督教理想の此絶對的無上大法は、一方に於ては其要むる人物の絶對的なる性質に顯はれ、一方にては其來す操行の絶對的なる觀念に顯はる。

基督教的理想の所謂人物(キャラクター)の絶對的なる性質は聖潔なり。舊約の聖潔觀は世の惡念や情慾の上に超然たる一大實在者を觀念するより生ず。イスラエルの聖者は唯一の眞神にして、世間と世間の罪惡に毫しも染ること無し、異邦の群神の動もすれば世間の罪惡を繼まゝにするの比に非ず。イスラエルの聖者エホバは至高の天に住る至尊の神にして、自足、全能、圓滿なるや、其稜威にも權能にも秋毫の缺くる所ある無し。聖潔清淨は神の靈妙なる勝徳なり、神の神たる所以寔に此に在て存す。

神聖罪惡を離れたる生活 (apartness of life from evil) と稱する者は、聖潔(ホーリネス)と稱する者の元來なる要素なりと雖ども、イスラエルの聖者てふ舊約の觀念を全く蔽ひ盡せる者に非ず。聖潔の徳たるや、イスラエルの宗教に

ては夫の希臘哲學に於ける無爲の善と云ふが如き抽象的觀念に非ず、即ち是れ彼の道徳的には毫も働かざる無慾の善たる者の如くに消極的なる、没果的なる(無結果無成實なる)理窟として止まる者にあらず、神は聖潔なる者なりと云ふの觀念はイスラエルの人民の爲めには其宗教上の思想及び道徳上の言行中に一大潔成力となれり、是れイスラエル人民は其主の聖潔なるが如くに聖潔なる人民と成るべく召されたりと自ら感じられたれば也(申命記十四章二及二十一節、利未記十一章四十四五節、十七章——二十六章等を參看せよ)。其神たる主の聖潔とは、其が立法者と預言者にと啓示されたる所に就て之を見れば、是れ神の聖旨の地上にて宜く遵奉せらるべき者に外ならざりき。

二、眞宗教の中心に聖潔てふ此積極的なる觀念の有りたるよりして、亦義を慕ふの情念勃興して預言者の書中に簇々たり、他日其が猶太教中に儀式化したる後に至りても尙該國民の道徳を支持するの具たるを失はざりき。

抑も絶對的なる聖潔觀は、其發表として亦絶對的なる操行を要む、以賽亞五章十六節をみよ、舊約書中に於ける「義」てふ根本觀念を按ずるに、其語原は直線てふ觀念に溯るを見る。されば義に歩むとは直き道を歩むの謂なり、義は道德上の直行なり、直行あれば亦之を直くする所以の規則無くんば有るべからず、舊約書中に於ける義てふ語は或る格率或は法軌に率由依遊するの觀念を含みたる者と見ゆ、是れ裁判用の語なりき、實に此義といふ者は、其當初の觀念に於ては、道德上の一品質と謂んよりは寧ろ法律上の身分（フニク）、ロビンソン、スミス著以色列預言者論第七十二頁なりき、義の此軌則をば希伯來人は之を神の律法中に認め得たり、是に於てか義といふことは神の律法に服従すると云ふと同義なる者と成れり、此義法の觀念は預言者たちの宗教意識内にて漸々に一層道德的なる、又一層靈なる者となり來りしが、上（カ）にも既に説きし如く、亦是れ後世にては遂に學士輩の繁文縟禮的なる律法主義に流れたり、但し行狀法たるの本元觀念は未だ全くは湮滅せず、基督教の正義理想中（フイキヤム）

に在て其虛文を掃清せられ、徹底道德化せられたり。

新約聖書中にありても、義は依然として尙是れ生活法即ち行狀法なりき、然れども最早是は單に外部の具文に其軌則を有するが如き、若くは學士輩（フイキヤム）の格言より其權威を得るが如き者に非ず、今は其法則は内部よりする者にして、靈に屬せり、是れキリストを信するに在るの正義なれば也、基督教の行狀法則は完全なる人物典型なり、基督教に於ては、行狀の由て以て直くせられ、行狀の由て以て終（マ）に審判せらるべき正義の大則は即ち是れ心裏に於ける聖靈の法なりとす、是に於てか、人生の千變萬化する道德的關係中に在りて、基督教の正義に達するの事は、最早或る外國の支配に服するが如き服従の卑屈行に非ず、天父の家に於ける子の精神を以て自由に且歡然として愛を成就する者なり、人倫の諸關係上に於ては、——愛の理想法を成就する者たる、或は日々の生活にキリストの精神を有する者たる——此の基督教の正義觀よりも高尚なる觀念は世に有る無し、否、實に世に有る能はずと謂ふべし、是の如

く正義の觀念たるや、許多の道徳學上に於て屢々然る如く冷々と死灰然として、吾人の血氣に悖る如き事どもを嚴命するに止まる者に非ず、其物自から熱し、能く人を牽き、自ら充すに靈光を以てす。之を要するに、基督教の道徳學にては、本分や義務、其物も樂んで自ら爲す事業の如く自由にして且多望なる者と成る也。

基督教の理想は、其質に於ても其量に於ても——靈に於ても行に於ても絶對純全なる者として、——聖潔及び正義としては、——是れ基督教の良心法なり。基督教的意識内に於ける道徳法は基督教の理想たる善の典據なりとす。神は善なる者にして、其充足せる生命を以て道徳上の善を全たうするが故に、神の法は即ち神の道徳性がその純全なる價値を發揮し來る意旨たるなり。神の善旨の圓滿に歴史上に顯れたるものは是れイエス、キリストの生なり。因てキリストは亦神の法の啓示なり。キリストは神の法を其靈なる圓滿の姿にて表現したる者なれば、キリストの聖言は神の教會に於ける聖靈の法として終審的なる者なり。

(二) 基督教の理想は一切の活動界に普及す、是れ人生と其廣狹を均しうする所の大理想なり。

抑も人類は千差萬別なる關係の中に存在するに、其關係たる、或者は變化し或者は變化せず。人間の理想は是等萬殊の關係に普及せざる可らず、其存在に要する一時の状態や、最も暫假なる條件にすらも普及せざる可らず。我等が選びたる理想にして、若し人生の或る實際の關係に少しにても届かざる者あらば、若し之をして或る新關係に届かしめんとし若は或る特別なる状態に及ばしめんとするには、其が固有の弾力性に過ぎて之を引延さずんばある可らざる者ならば、若は又他の淵源より借來りて補綴せずんばある可らざる者ならば、是れだけは不足なる理想にして、最早絶對純全なる理想とは見做すべからず。真正の理想は人間に普及せずんば有るべからず、人生の全部を籠蓋せずんば有るべからず。斯る理想は亦是れ人間萬殊の出來事及發達に十分に應ずる者

ならずんばある可らず。人生の何れの點に於てなりとも、我が理想の届かざる處あらば是れ其理想の不完全なるを証する者とす。之に反して我が理想が何等の方面に於てなりとも社會の大發達を悉く網羅して、何等の新奇なる複疊なる社會の出來事にも應ずるに足ば、是其神來なるの新證據を呈する者と謂ふべし。實際の生活は基督教の理想に向ひて其萬端の要求を提出し、キリストの理想は果して此等の要求に應ずるに足るやと問ひ試るむるの權理を有す。

基督教の理想の斯の如く十分に人生に應ずるに足る者なる事は是れ我等が實踐道德の領分に於て宜く講究すべき者に係る。今此點に於ては、該理想の普及を其が絶對的なるよりする必然の結果として説明し、其が人生に十分に應ずるに足るの事を其生氣充足し力量富厚なるよりする蓋然の結果として解釋するを以て足れりとす。

(三) 基督教の理想は一切の善なる事件及び目的を網羅す。

其網羅の大なるは其普及なるより生ず。然りと雖ども、網羅の事たるや亦普及と區別せざるべからざる點ありて存す。如何となれば、真正の理想は唯に人生の全領分に普及する而已ならず、亦人間の衆善を悉く網羅すべければ也。要するに絶對純全なる唯一の善はまた箇々の諸善を其中に包籠せずんば有る可らず。其太一なる中に人間の衆善を盡く網羅せずんば有る可らず。

生動の各領分には其れ自身の善若くは目的ありて存す。例へば五官の善あり、各特別覺官の善あり、——目には美色あり、耳には妙音あり、口には甘味あり、身体の愉快には感覺の靄然たる温熱ありて存す。智力には其明理の性質に相應する善あり、又記憶の寶藏あれば、想像の快樂あり、心は其満足の國を有し、靈は其享受すべく造られたる善福を神の現前に求む。人間の眞理想は、其人生と大を均しうするに於てや、此等各種の善を網羅せざる可らず。其無上なる觀念の中に人生の衆善を悉く合一せざる可からず。我が理想の此の大網羅中には、社會の福利と箇人の修

善とありて籠れり。人間の自然の目的は悉く其中に活動し、其中にて調和せられ、其中にて是視せらるべき也。一切の藝術は皆之に向ひて力を致さん。至善の排除し得べき者は只是れ生命を亡ぼす如き者若くは人間の存在に撞着するが如き者のみ。然れども其れ自身において理想に悖らず又不聖潔にもあらぬ願望若くは希求の事件或は物象に對しては、凡そ十全なる理想は綽々として之を容るゝの餘地及び自由を存せざんばある可らず。

斯る普及と網羅との試験をば基督教の理想は蒙むらざるを得ず、凡て世に提出せらるゝ理想は斯の如く實際生活の試験を以て檢定さるゝを要す。若し人生萬殊の事件に悉く應ずるに足らざる者ならば是れ真正の理想と稱すべからず。

基督教の理想の網羅窮り無きと普及到らざるなきとは、其が絶對なる理想たるより直ちに生じ來る所の者とすと雖も、此等の大勝徳を具足すと自ら稱する事の果して是なるや否やは常に之を實際生活に應用

して檢定せざんば有るべからず。されば余輩は實踐道徳を講ずるに當りてや恒に此等の條件を胸底に藏するを要す。

他種の理想または至善觀も同じく此等の試験を蒙むらざる可らず。是を以て我等は次に進んで討究せんとす——其形式に於て無基督教のなる若くは其精神に於て非基督教のなる、世間の重なる道徳理想は、此等普及及び網羅の試験に附せらるゝ時に方りて如何程までに首尾よく應答を爲し得る者なるやと。

### (三) 基督教の理想と他種の理想との比較

(伊) 希臘羅馬等の道徳學中より抽出せらるべき理想は、之を發達したる基督教の理想と比較する時には、此等の二徳、即ち普及と網羅とを缺くを見るべし。彼等が基督教の道徳學に對するは大凡イヌラエルの宗教が基督の教に對する關係に彷彿たり、——即ち是れ預備的、楷梯教育的なる者たる而已。然し乍ら希臘羅馬の道徳學に於ては、其最上なる成



果中にすらも尙補ふべく爲すべきの事多くありて遺れり。歐洲古代の大倫理學者輩が箇々に吐露したる者の中には、人類の生活の目的を甚だ高尚に觀じたる思想も之れ無きに非ず、基督教の聖徒の語としても恥かしからぬ言語はストイク派(Stoic)、斯杜亞(Stoic)哲學派の著書中より多く拈出するを得ん。プラトは最も神妙なる事物を夢想し、アリストートルも時に或は其尋常一般なる道德の水平上に飛揚し、暫くは殆んど道德界の「先見者」若くは預言者たるが如き口吻を弄する無きに非ず。例へば左の一節の如きは吾人を下界の用心的節制的なる道德界より擡げ出して、高尚なる、且清淨なる大氣中に飄然翺翔せしめんとす、——「吾人は尋常の訓戒に説く如く單に一箇の人なるに因て我は人なりとは思ふ可らず、單に必死の人なるに因て我は必死の人なりとは思ふ可らず、吾人は須らく己れを不死(Immortal)なる者と爲すべく、己れに於ける最も善美なる徳を蹈み行なふ爲めに力を盡すべし、如何となれば斯る勝徳たるや量に於ては少なりと雖ども、力と價とに於ては遙かに萬事を超ゆる者

なればなり」(ニコメーキン、エセツクス、第十篇七節)。吾人はまたレツキー(Lucky)氏が古代の訓言中より廣く取りて羅馬道德の美なる方面を巧みに描き出したるを見ては、喜んで之を許さんとし、満足の情を以て之を觀せんと欲す。然し乍らテアンデル(Neander)は世人が通例古代の道德上に認むる暗澹たる方面を吾人に回憶せしむるを奈何せんや、綿密なる道德史家は希臘羅馬の道德的文學の玲瓏たる方面を見ずしては固より有る克はず、然れども古代の道德的觀念を詳細に研究したる人人には亦其暗澹たる方面も極めて明らかに見ゆめり。之を要するに古代の道德(希臘羅馬の修身學)は範圍狹隘にして其道德觀の貴族的なるを免かれず、其之に達するを得るは賢人または僅少の僥倖者のみ。希臘の道德學には識らず知らずの間に選擇主義ありて其修身界に磅礴し、自然に希臘人と夷狄とを分ち、主人と奴隸とを分ち、賢智者と尋常人とを分てり。而して希臘哲學上に於ける此自然の撰擇主義は、之を夫のイスラエルの預言書中に宣説したる選擇主義に比ぶる

に道徳的なる分子遙かに其中に少き也。如何となれば、イスラエルの宗教上に於ける神選てふ觀念は少なくとも普徧主義に趨むきたる者にして、遂に天下の宗教たるべき一大宗教を來すべかりき、——即ち是れ天下萬國民間に眞神を禮拜せしむる爲に一聖民を選びたる者にして、一切の人民は之に由て終に祝福せらるべき者なりし也。然れども希臘の道徳學上に於ける貴族的なる選擇觀はいつまでも其特別主義と自尊主義には打勝つことを得ざりき。ゼノイ(Zeno)が唯一國家を預言したる名訓の如きは或はイザヤの預言神の選民が將來に天下を一にせんとの預言と並ぶに足る者として引かれもせん。云く、萬人は皆一人民の肢員及び同胞市民と見做さるべし、天下には唯一の國家及び生活の有らんと猶唯一の羊群が共通の一律法に由て導かるゝ如く然らん。然し乍ら此唯一世界、唯一律法てふ高尙のストイク觀念も、神の國てふ希百來基督教的觀念に及ばざると如何に遠き者なるかは、プルータルク(Putarck)が之に加へたる註説に徴しても蓋し知らるべし。斯は彼之を

評して、ゼノイが單に夢想したる所をアレキサンデルは實行したりと曰たれば也。チアンデルが説きし如く、ゼノイは其己れが吐露したる如き思想の如何に實行され得べきかを示すと能はざりき、而て又彼が造り出さんと欲せる社會の如きは天地の特別なる秩序及び人中の當然なる區別を圓成するに非ずして却つて破壊する者ならんとするを奈何せんや。即ちゼノイが意見に依れば、人間社會は一大塊に鎔化せられんとせり、千差萬別なる功用を具足する一大機體に發達せんとはせざりき。一の羅馬を以て全世界を統ぶとは是れ古代の最上夢想なり、一切の人種間及び民族間に聖靈の一國家を建造すと云ふことは彼等の未だ嘗て思ひ到らざりし所なり。天下一統の普及何如を試験するや、——又一切萬殊の國民的要素及び箇人的要素を網羅する何如んを試験するに及んでや、希臘羅馬の唯一帝國の觀念は不十分なる者なること明らか成り來らんとす。

勿論エピクテタスは言へらく、人は自らアテニス若くはコリントの

市民と認むべからず、須らく天下の市民と思惟すべしと、然るに後年のストイク派間に在りては、天下の市民とは、國なき人と云ふが如き義となれり。

希臘の道德學も亦人間の生活の全領分を認むるに足らざりき。プラトは其理想を一種の國家に寓せり、アリストートルの道德學に於ても徳を修め善に達するの區域は尙ほ國家てふ者なりき。彼は其國家觀念の中に獲たる者よりは異なる若くは廣き機會を人生の爲に發見し得ざりき。固よりプラトは其理想的なる國家てふ觀念に附するに若干の超越的なる至善觀念を以てしたりしが、其觀念たるや古代に於て至善が由て以て現實すべく思想され得たる政體よりも尙逾えて大なる者なりき。されどアリストートルの道德學は徹頭徹尾政治的且世界的(下界的)なる者なり。天下萬國の民が其榮光と名譽とを擔ひ來りて一大人間の王國を建設せんと云ふが如きは、是れ全く神來の觀念にして、古代の政治的道德學の大家輩が未だ曾て想ひ到らざりし者なり。

偕アリストートルの道德學は斯く理想に普及を缺く者にして、之が爲に又人生の全領分を籠蓋するに足らざる者なるが、此外にも尙一の大缺典ありて存するを見る。他なし、是即ち其が高望に乏しきの事なりとす。該道德學に依れば、善人とは現在の境界に賢く應ずる者なる而已。ニコメキアン道德學は徹底理想に乏し、全く是れ下界の道德のみ。プラトの道德學が智力主義に偏したる者なることはアリストートルが認識したる所なり。然し乍らプラトの智力主義に於ける原動力の缺乏はアリストートルが徳行の理論の能く、補ひ盡せる者に非ず。アリストートルが提起せし古き疑問は希臘人中の最も實際的なる夫哲學者其人すらも實は解答を與へずして之を棄おける者と謂ふべし。即ちニコメキアン道德學第二篇四章にアリストートルは特記して曰く、論者は言ふ、人々は正しく行ふて正しき者と成るべく、賢く行なふて賢き者となるべしとは不審し、如何となれば正しき事及び賢き事を行なふ者は、已に是れ正しく且賢ければ也と、不正及び不賢より正善に

移るは如何にすべきやとは、是れ希臘の哲學が解かざりし問題にして、基督教にて誨ふる聖靈に由るの更生説獨り能く之に決答を與ふるに足れり。

エピクテクスも當時の哲學に於ける此缺典を看破せり、彼はストア派の自然法を宗教的感情もて遵奉するが中に一種の德行方法を發見したり、即ち彼は敢て言はんと欲す、我等は神の親戚にあらざる (Diss. i. 9. 3)。

希臘羅馬の理想は已に斯の如く普及を缺ける者なるが故に亦其人間の實際道徳觀上に於ても人生の萬殊なる領域及び多方なる德行を悉く綿密に網羅するに足らず、例へば各箇人の自由職業上の獨立、四海の兄弟、仁愛の完全なる成果等につきては、之を領會するの機を得ずして空く過ぎ去れり、自捐獻身的大愛の熱路を進みて獨り達せらるべき高遠純潔なる德行の如きは希臘羅馬の道徳學の未だ曾て見ざりし所に於て、全く其眼界の水平線外に横たはれり、寛仁は固より古人の中に

大いに貴とばれたる美德なりき、然れどもアリストートルが稱讚する寛仁は十字架より流れ出る愛に及ばざる遠し、近頃或る學者はアリストートルの所謂寛仁なる人と、アレキサンダリアのクレメントの德行家とを對比して云々したるあり、ルーター、基督教道徳學史第一卷、百三十七頁、但し希臘哲學に於て理想の一般に乏しき事は、彼等の所謂善人を唯に基督教の初代に於る一大徳行家と比較するのみならず、更に歩を進めて直接に基督と比較し見るならば、幾層具象的にして一日に瞭然たる者あらんとす。

意ふに宗教的方面に於て希臘古代の理想が普及を缺き、随つて又其が人類の至高なる目的の追求に開供せられたる諸の領分(善の領分)を網羅し盡すに足らざる事は、恐らくは是れ希臘の世界的道徳の觀念の未熟なるに起因せるよりは、寧ろ宗教の觀念の未熟なるに起因せる者ならんも知るべからず、然るも尙中古の學者がアリストートルの道徳學に宗教的理想を扶植せんと務めたるに徴するに、其擧たる唯に失敗た

る而已に非ず、又其本元の理想の狹隘なることを尙更に明らかならしめき、其道德的なる基址は後年の宗教的建築を其上に載るに足る程に濶からざる也、中古の學者は人類の全靈性と其廣さを同じうせざる一理想をアリストートルの道德學より採り、然る後其所謂宗教的道德を之が上に多少煩らはしげに又殆ふげに建あげたり、換言すれば、即ち是れ希臘の自然主義、處世の利害得失を標準とする道德に加ふるに——一種神來の追補として——超自然主義を以てしたる者なりとす、然し乍ら基督教は決して斯る追補、自然上のに加へたる追補と見做るを肯ぜず、且又恩救事業は決して造物主の後想若しくは追思と認むべき者にあらず、中古に於てアリストートルの道德學を基督教の德行に應ぜしめんと務むるに當りて、徳行と餘功との虚妄なる區別を道德學上に設くるに至りぬ、謂へらく、尋常人衆の踐行すべき善業の外に尙聖人の獨り修むべき殊勝の道德ありて存すと、然し乍ら道德上の理想なる者は、上にも既に主張したる如く、人間一切の活動に普及し、人間一切の

職分を籠蓋せずんば有るべからず、然らざれば他の理想に場を譲らざるを得ず、斯る不完全の理想は若し他に凌駕する道德ありて之を規するや、乍ち其絶對的理想たることを失なふ也、基督教の理想は、其單に吾人に命じて、完全なれ、といふ一言を以て、己れの絶對的なる者なることを確言す、是即ち何等の倫常のためにも、何等の境界の爲にも、何等の目的の爲にも、何等の善事のためにも、都て完全なれと命ずる者なれば也、完全なるとは常に且一般に宜を得て生活するを謂ふ、故に世には僅少なる人のみ能さるゝが如き殊勝なる且獨得なる種類の完全は有るべき者に非ず、安息日は人類の爲に設けられたり、凡そ神聖なる者は萬人の爲に神聖なる也、萬人の義務なり、基督教の絶對的道德は是れ天下一統の善徳たる也。

(呂) 比較道德學に於ては東洋の諸宗教中に行なはれたる至善觀と基督教の理想との間に存する肖似點と差違點とを綿密に究るを要す、本問題を十分に論究する事は比較宗教學の領分に屬す、茲には單に佛教

と基督教との至善觀を比較せんと欲す。

(甲) 佛教の道徳上にて最も尙ぶ所の語は棄世チンゼンシヨウなり、基督教にて最も尙ぶ所の語は聖成コレセウレンコンなり、人は須らく一切を棄て、寂滅ニルヴァナに入るべしとは佛教の誨ふる所なり(スッタ、ニパータ、第八百三十九句)。「真理を以て彼等を聖成ロヨムたまへ、爾の言は真理なり」(約翰十七章十七節)とは基督が其弟子のために禱れる所なり、基督教の此富厚なる語は、人生を棄るに在るに非ず、寧ろ人生を聖潔なる者とするに在る也。

(乙) 此の根本的なる差違の中には亦精神が真理に對して有する多少消極的なる關係と積極的なる關係との別ありて籠れり、基督教は真理を尊重する者なり、故に曰く、我これが爲に生れ之が爲に世に來れり、即ち真理につきて證をなさん爲なり、凡て真理に屬く者は我が聲を聽くと、是即ち神師が其身を犠牲にするの際に於て真理に忠節を表したる所の語なりとす(約翰十七章三十七節)。「淨行者は平等も不平等もなければ、豈此は眞なりと曰んや、若くは又誰と争そひて此は虚なりと曰ん

や」とは、是れ佛陀が涅槃に達せん爲に真理を棄たる者なり(スッタ、ニパータ、八百四十三句)、基督教は真理を飽までも尊重す、之に反して佛教は其空寂を祇敬して以て大則となす。

(丙) 佛教が眞理に對して持する此積極的よりは寧ろ消極的なる觀念は、亦拯救の觀念上にも道徳的なる差違となりて顯はれ來れり、佛教の努むる所は、感化せんとするにあらず、惟救はんとするに在りとは、確論なり、衆生は情慾及び迷妄を解脱するを以て最第一となす、其拯救にして遂に生命(生んど欲するの意)の斷滅に終るとも、そは願みる所にあらず、基督教は感化せんことを求む、而して人々を惡より救ふの事は其の死より生に感化する事業の單に一部分なるのみ、否な其第一着手にして且最も下級なる者なりとす、永生に關するイエスの言語中に我等が認むる至極積極的なる拯救觀の如きは佛教の涅槃說中に全く缺けたる所なり、惜斯く基督教が生命を以て永遠の善の充ち盈みる者とするの觀念と、佛教が少なくとも生命の諸欲望を悉く斷滅して苦惱を脱せん

と普通に冀がふの主義とは、之を彼此對比するに、其相去ること實に雲壤のみに非ざる也。情念を殺して拯救を得との觀念は、縱や永死の安息を以て至善至福となすの思想に始まらずとも、自然に永死の安息を以て至善至福となすの思想に終れり。基督教は其終極の望に於てや、永生を宣言す、佛教は其終極の望に於てや自我の斷滅を指示す、至善を人生の圓成と觀ずると人生の斷滅と觀ずるとの此の差違はまた憂悲者を慰さむる福音の訓と佛教が憂悲者に予へ得る唯一の慰藉とを對比する處にも同じく著るしからんとす。古傳に曰ふ、釋迦は兒を失なへる婦人を諭して云らく、去て他人の家を逐次に訪ひ見よ、然らば戸々に必ず其憂あるを知らん、又世間には生くるより死ぬる者多きを曉らんと、之に反してイエスはベタニアにて兄弟を喪なへる姉妹どもを慰むるや、直ちに活る神の力を以て墓に往きつ、復活と生命とを宣説したり。

(丁) 佛教の寂滅主義と基督教の積極的永生説は更にまた道德の全觀

念上に一大懸隔を來せり。佛教の道德訓には智徳俱に挺んでたる者も多く、且美なる教誨も少なからずと雖ども、其斯く多く著しく相似たるが中にて亦佛教の道德觀と基督教の道德觀との間には大懸隔の存する者あり。佛教に於ては、道德的生活は或る目的を達するの手段にして、其目的たるや、終極圓滿の善と(道德學的に)は觀ぜられず寧ろ一切の情念及び自我が涅槃の境に還元するの事、—生命が輪轉を解脱して寂滅の大海に還没するの事と(哲學的に)觀ぜらるゝ者とす。基督教に於ては、道德的生活は唯に目的を達するの手段たる而已にあらざ、德行其物即ち是れ吾人の達すべき終極の理想境の部分たり實質たるなり。要するに道德は基督教にては、唯に人生の終極目的に達するの道たるのみならず、亦是れ人生の終極目的其物にして吾人の達すべき善福たるなり。アラ、ソウセイ(De La Saussaye)氏曰く、佛教はいつも禁戒を與ふれども命令をば與へざるに因て、羅漢または僧徒の道德は純ばら消極的なる者のみ、凡そ何事をも進んで爲すは是れ繫縛の業にして、佛弟子は

輒ち之を解脱せり、故に彼徒は死人の如くなれば成るほど益々高く寂滅の域に登れる者とす」と(宗教學六百六頁)。是れ即ち佛教の道德觀上に於ける此根本的大缺典を言ひ顯はせる者にして、過激の言とは見做すべからず。

抑も全躰として佛教の道德と基督教の道德との間に存する此根本差違は、また基督教の歴史中に於ける山僧の主義の興起および地位と佛教の難行苦行主義とを比較する時に及びて、愈々明瞭なるに至るべし。關人クエーテン(Kuenen)氏も其「國民的宗教論」中にて此の差違を強く論じたり、即ち兩者の明かに相似たる所を指示して後、説をなして曰く、佛教と基督教の大相違、否や兩者の根本的相違は、正に此點に於て顯はれるなりと。

僧即ち出家沙門は佛教には初より有りて、實に之が要素たりき。基督教にては山僧てふ徒は後年に起りし者にして、是れ基督教の發達中に現れたる許多の傾向中の一なりし而已、比丘有るに非れば佛教ある能は

ざりき、然れども山僧なくしても基督教は有るを得るなり(クエーテン)。萬國民の名譽と榮光とを悉く集めて大成すと云ふが如き天國の觀念は佛教に絶て無き所なり。

(波) 基督教の理想の絶對純全なるが中に存する此の(以上用ひ來れると同一なる)普及と網羅とを標準として、我等は是より輒近世間に現はれたる若干の理想——幾分は基督教的觀念の感化の下に起りたる者、幾分は基督教の領分外に起りたる者——を吟味し矯正せんと欲す。

(甲) 人生の理想觀が輒近に及びて取りたる形の中に在りては、先づ審美的理想なる者を舉說せんか、是即ちシルレン(Schiller)の著作中にて文學上に形を成る者に係り、或はマヒウ、アノルドの復興希臘主義中に(固より多少希百來元素を混じてはあれども)現はれたる者に係る。此觀念に於てや美と善とは畢竟一に歸すと稱す、謂へらく善良なる行為は善良なる趣味なり、善なる生活は美なる生活なり、斯の如く亦美なる生活は善なる生活となるべし。



此審美的理想の真理は我等基督教の道德の爲には之を疑難するに最も後ならんと欲す。惟みるに「人子」の生活は淡泊に自然に率<sup>した</sup>がひたる者にして、其間に靈性の美を完たうしたり。キリストは野の百合花<sup>ひまわり</sup>や空の飛鳥や、門口の葡萄蔓を認めずには置たまはざりき。キリストの目より觀れば、自然界は天國の一表鏡なりき。且又基督教の至福はシルレルが唱へし如く現在の衝突境外に琴瑟相和するの美境あることを同じく認むる者なるに非ずや。基督教の道德にても美と善との間に親密なる自然の縁故あることを認めざるに非ず。されば我等は審美境より道德境に進むは物質界より道德界に進むよりも遙かに易しとの説を納るゝに敢て吝ならじ。我等は天性自然に胸中に感ずらく、吾人は宜く美を具足する愛の生活境より善と一なる圓滿の生活境へ自然に且容易に進み登るべきなりと。我等は高尚なる審美的發達と敗徳の生活との太く相矛盾するを慨歎す。美術は須らく聖潔無罪なるべし。之を要するに、眞正の生活觀は其普及なるに於てヤシルレルが達せんと求めたる理

想の美境にも固より達せざる可らず、亦是れ其萬善の集成中には審美主義の道德界を照らすと稱する美及び歡樂の諸元素をも包括せざんば有るべからず。——上古の世界の今や已に謝し去りたる幸福なる生活の嬉笑及び歌舞を包括せざんば有るべからず。

然し乍ら審美的理想は、其れ自身にては人生に不十分なるを免かれず。——即ちシルレルが其審美教育論中に吐露したるよりは幾層廣く且深く善惡問題を究むるに非ざれば。——若くは又アインホールドが希百來流の正義觀を注入して復興したる希臘主義の中に達したるよりも更に幾層其普及の度を廣くし其網羅の域を深くするに非ざれば、審美的理想は未だ以て人生萬般の需に應ずるに足らず。道德方程式は美を以てして竭くるに非ず。善は美に匹敵して、更に美よりも大なり。道德上の問題は此等二名稱——善と美——を同一視して解答し得べき者にあらず。道德上の理想は罪惡てふ極めて怖ろしき事實の底にまで到達せざる可らず、而して歴史上の大疑問たる苦痛及び罪愆の所以を解くに

足る者ならずんば有るべからず。譬へば、天使の圖の如きは、如何に光彩燦爛たるにもせよ、是れ罪惡の權下に立てる存在物の爲には功能ある模範を呈する者に非ず。斯る存在物の生活觀は、霄漢に達すると均しく亦其實際の艱難の深き底にまで達せざる可らず。其が完全なる德行及び美たる生活の觀念は、其罪惡てふ現在の事實を普く考へ、且其罪惡の由て以て驅除せらるべく、凡て愛すべき事物の由て以て挽回せらるべき方法を廣く察せざる可らず。人間の眞正なる理想は純粹なる天使の理想にあらず、是れ罪人にして天使とせられたる者の理想たるなり、是れ敗壞したる人が肉躰の繫縛を脱したる者の理想たるなり、是れ墮落失墜したる人の拯ひ擧られ、高められて、端直調諧なる安全の域に上りたる者の理想たる也。

審美的なる理想並に若干の學者が主張する文學的なる理想は、人間生活の暗淡たる方面及び全く無審美的なる光景に普及すると無きが故に、人間の德行の必要なる若干の形を脱漏する者にして、随つて又第二

の試験標準たる網羅の點に於ても缺點ある者なることを證明せらる可し。清教主義は無審美的美念に乏しき者なりとせん、カルビン主義は嚴格一偏の道德説なりとせん、クロムウェルは美術を知らざりしとせん、新英蘭州に於ける最初の宗教は色彩をも熱氣をも優美をも缺きたりとせん、然るも尙ほ我等は敢て言はんとす、理想にして戰鬪的德行を容るゝに餘地なきが如き者、清教の力を排するが如き者は、必ず歴史上の出來事を網羅するを得ざるべしと。カルビン主義は審美の方面より之れを論ずれば、未だ盡さざる點多からん。清教主義は傍目をふらず、田野の如何に美はしきか、神の如何に天地に充すに生活の快樂を以てしたまひしかを見んとせず、只管一心不亂に職分の險路を疾走したり。清教主義は無用の遮視を施したりとせんも、尙これ直行して人間の重荷を負へり、大力を出して全世界を高尙なる程度に擡げ、人類のために幾層清淨なる、幾層潤大なる前途を開拓したり。眞正の理想は宜く審美的なる方面をも具足して、至少の草花にも及ぶべく、天地の至微なる

快樂をも認むべしとすとも、之が爲に決してカルビン主義の凜然たる神威觀を排除するを要せず、清教徒の維持し得たる至嚴至肅なる責任主義を撥斥するを要せざる也。

シルレルが審美的理想は、勿論アールノルドの希百來化したる希臘主義の中よりして此必要の強壯劑たる正義を幾分か受領すと謂ふべし。但しアールノルドの德行觀——吾人の身外に於ける或る正義力てふ念を加味し、文雅及び知識 (sweetness and light) を磅礴せる德行觀——の如きは、實は根本たる舊約正義に今一層其根を深うするを要する也。即ち是れ今一層親密に天父の聖徳を學知して以て其德行觀のため確乎たる根據を發見せずんば有べからざる者とす。如何となれば此天父の聖旨を行ふに於て我が大神子は其生活に「文雅と知識」の充ち満ちたるを發見したれば也。而して斯る文雅及び知識たるや希臘の全土にも未だ曾て見えざりし者にして、天の子どもたる者獨り能く之を知る而已。

(呂) 進化説上の理想、

進化説の理想にして他の關係上より非難すべき者は己に大畧之を上  
に述べたれば(六十七頁以下)此點にては單に該理想が果して純對的にし  
て我等の嚴密なる試験尺度たる普及と網羅とに應ずるを得べき者な  
るや否を論及せん而已。

進化的道德學は現世の事件をば箇人的なると社會的なるを問はず  
して一般に籠蓋すと稱す、而して未來世の未知領分には敢て及ばんと  
す、又靈の或は呈し得べき如き出來事をば敢て究めんとせず、只此地球  
上に於て人間の善福の發達進歩する處に着目し、人類の此土に於ける幸  
福を以て主眼とす。是れ道德界の天文研究に觀象臺を建つる者にあら  
ず、天をば未知未詳の境界に放棄せざるを得ず。然し乍ら、天に關する吾  
人の知識若くは蒙昧の如何なるにもせよ、兎に角、天は地の包圍物たる  
に相違なし。スペンサル氏が萬物の本源終極原因を推詰めたる不可識  
力たる者は、是れ人生を其一切の現象を通じて形作する活勢力たるや  
論を俟たず、知るにもせよ、知らぬにもせよ、天は是れ吾人の道德的動力

學上に於て算せざるを得ざる力なりとす。此臻極の勢力は一種の普遍力にして、固より吾人の度外に置くべき者にあらず。是故に吾人の之に對する關係を幾分か決定し、吾人の進退去就に關して幾分か之れを顧みることば、道德史の當に爲すべき所にして、亦是れ此世の生活の安全を保するに必要なる者と謂はざるを得ず。例へば、我は重力の性質には全く暗しと雖ども、一舉一動一進一退悉く重力の法則に率<sup>ま</sup>がはざるべからず。斯の如く、<sup>た</sup>縱<sup>た</sup>や此の臻極勢力、不可識力、萬有の主宰神に關して何事をも知る所なきにもせよ、我は吾が凡て爲す所に於て、吾が凡て呼吸する所に於て、—— 苦し我其道德を失墜せざらんと欲し、幸福なる生活をなさんと欲せば、—— 是非とも之が法則に服從せざんば有るべからず。故に人類の靈性及び現象に屬する道德的要素の範圍及び意味は、決して是れ度外に放棄すべき者に非ず、決して是れ單に彼等は吾人の道德的經驗に超越し、人生の未啓示的不可思議に屬すと説きて、宛<sup>ま</sup>がら無一物なるが如くに算し去るべき者に非ず。既に知られたるにもせよ、未

だ知らざるにもせよ、既に啓示せられたるにもせよ、未だ啓示せられざるにもせよ、天は是れ吾人の舉動に大關係を有す、將に來らんとする世の力は八方よりして吾人の道德的意識に來り觸れ、吾人の思想を形作りし吾人の理想を上下す。道德は少なくとも人間の此高尚なる方面を開きおかざる可らず、されば道德の學にして此廣大なる前途を遮斷する者は、其作善の境域甚だ狭からざらんとすとも焉んぞ得んや。

(波) 現今會社主義の理想等

此等の理想は決して必ずしも非基督教的なる者にあらず、却つて其屢々眞正の基督教的社會觀念に直接に率由する者として呈せらるゝを見る也。但し便利のため、且は重複を避んため、此等の理論を評することば後章に譲るべし。勿論是等もまた前述の二尺度を以て其果して人生萬般の需に應ずるに足るや否を試験されざる可らざる者とす。本章に於て我等は基督教の本來の理想を歴史的に究め、之が本色を基督教的意識に替がへて、論定したり、又他種の理想を之と比較しつ、一目

に之が網羅の絶勝なることを明らかにしたり。

此基督的理想の物たるや、——其が基督教徒の経験上に現實したる限りに於て、若くは我等が更に愈れる物、即ち救に伴ふ物ども、希百來六の九を求むる努力の中にて其が今領會せらるべき限りに於てや、——基督教徒の德行及び職分を細かに講ずる時に一層具象的に顯はれ來るべし。要するに基督教徒の操行は此眞理想に准がひて規定せられ、且審判せらるべき爾。

但し更に進んで此方面に向ふ前に、先づ基督教道徳學に恰當なる歴史的方法を以て、我等は該道徳的理想の人中に現實し來る步履を研究せざる可らず。我等は世界に於ける之が進歩の襟態を學ぶと同時にまた其代々の實況を學ぶを要す。之を究むるに、我等は基督教の理想の國、即ち天國が地上に漸々現實し來る所以の事實及び法則を考へずんば有るべからざる也。

## 第三章

## 道徳的理想の現實

基督教的理想は、キリストの身にありて嘗て啓示せられ、今に至るまでキリストの靈を以て人中に教へらるゝ者なるが、人類の生活上には未だ現實したるに非ず、また何れの時代の最上なる基督教的意識の中にすらも未だ完全には反映せず。聖靈は尙世界をして罪ありと曉らしむ。愛を組織せる國は地上に既に始まりたり、然れども未だ完くは成らざる遠し。基督教の生活理想は人中に實境たる者なり、然れども尙未だ圓成したる實境には非ず。人間全體の生活は未だ聖靈の交親とは成らざる也。

歴史上には道徳的步履なる者ありて道徳的自由境に連絡として貫通し、善徳は之を経て漸々に進歩し、道徳的理想は世代の疊なるにつれて益々應用を廣くして現實し來る。歴史は夥多の出來事の偶然に集合し

たる者に非ず、風に飛揚されて散亂したるが如き事跡の堆積したる者にあらざ、人間の歴史は道德的秩序及び道德的進歩の微證を自然に露呈し來る之を要するに、歴史は其最も深遠なる意味に於てや是れ理想境或は至善に達する道德的なる、靈性的なる行歩なりとす。

今我等は進んで此理想が人間の歴史上に於て段々に現實し來る步履即ち歴次の段階を實踐に徴して考究せんと欲す、我等は道德發達の此等諸大紀元の各箇に應ずる道德的生活の原則若くは理法を發見せんことを求めざる可らず、又歴史の道德的發達の由て以て成されたる道德的方法をも研究せんと欲す、然る後には更に又進んで現今の道德上及び社會の制度上如何なる程度にまで基督教の理想は既に行なはるゝに至りしか、如何なる程度にまで既に地上に於ける顯然たる善徳の國と成りしかを講究するを得るに至るべく、且此理想は如何なる點々に於て基督教の未應驗なる預言書、未來記の類にして段々に應驗しつゝ來るべき者と見做さるべきかを察知するを得るに至るべし。

是故に我等は先づ歴史上に於ける道德進歩の諸紀元及び之に應ずるの各原理を論ぜんとす。

道德學は關係てふ者の世に存することを認む、道德法は則ち若干の關係中に立てる存在物の爲にする法則なり、道德學は、一方に於ては、一種特別の情感哲學者は之を何と名くるにもせよ、あるを認むる者にして、之を我等は道德的感情(道感或は道念)と名く、又他方に於ては、若干事の宜く作すべき者、真理の宜く認識すべき者、善の宜く希がふべき者あるを認む、而して此等の件々たるや自ら吾人の道念上に印映し來り、吾人の一たび之を認識するや輒ち吾人の上に權をとりて號令す、之を良心の君臨と稱す、縦や如何に斯る道義が外界實境に客觀物として存在するを否むとも、猶道德學者はみな之に幾分の内界的客觀存在を許さざるを得ず、如何となれば、道德的心象は意識の一種特殊なる品質に存する者なるが故なり、即ち是れ自己を律法の下に在る者と認むる也、自己を自主なる者と認め、且同時にまた他の權下に在る者と識覺する也、按

ずるに無極無限なる者は自己に對するの外には他に何の關係をも有せざる可く、——自己に對して一は主觀一は客觀たる可く(道德上にては實體上にて)思想せらるゝを得ん。故に神は道德的生活を自己の中に有したまふと言はるべけん。然れども有限の存在物は其生存の全領分に於て必ずや或る外部の環象に關係す、而して其生活の種類は形骸上にもあれ、精神上にもあれ、其環象の性質何如んに依て決す。吾人の自然なる道德的意識は、吾人が身軀の存在てふ知覺の如く、是れ人間の周圍の環象に吾人の生活が和應する者たり、實に此和應たるや吾人人類が其卑き方向に於ても高き方向に於ても俱に爲すに堪ふる者とせられたる所なりとす。——即ち是れ卑近なる方向に於ては外界の百物に和應し、高等たる方向に於ては道德界及び靈界に和應す、此後者の中に於ても亦吾人は生き且動き且存らふれば也。是を以て道德界及び其律法は人類の心に對してや當然に客觀的なる光景を呈せり、而して哲學者輩の喋々する所あるにも拘はらず、人類の普通なる道念に向ては斯

く其客觀的なるを保ちて失なはず。吾人は己れが律法の下に在るを感ずるや益々深からんとす、自ら己れに律法たりとは感ずるに非ず。但し是は今日吾人が現實に修證する如き其客觀態に於る道德的意識たる者なるが、其原態に於ては果して何如なりしぞや、歴史前に於る或る太古人の心裡に在て其始めて起りたる時には、其狀何如なりしぞや。茲に道德進歩を遠く顧みるに、(其が歴史以内に在るだけに於ては)其開發は二箇の縁近き線路を経て前進したる者なるを認む、之を要するに道德の進歩發達は單線には非ず、複線なりき。即ち一方に於て道德的環象進めば、道德的情感も亦強くなれり。人生に對する道德的材料増せば、亦其材料を取用する入力も大きくなれり。道德的環象の發達途上に於る毎程には亦必ず人類の心裏に於ける道德的取用(環象の發達を取て以て己れの用に供する作用)の活力の適應若くは前進ありて之に和應せり。是故に道德發達の歷程、——道德界に於ける人間の進歩の各大紀元(時期)は斯の如く二重に觀察せざんばある可らず、——即ち第一には

道徳界の環象を觀測し、當時に現存せる外部の事情、道徳觀念の程度、道徳的審斷及び道徳的進退の材料等を考察するを要し、第二には當時の道徳界に於る萬般の事情に特に適應する變通力を考察するを要す。

### (二) 歴史前に於る道徳開發の程度

生命の始は、生命の終と均しく、俱に知識の範圍を超越す。歴史の未だ有らざりし以前の人類に對しては確實なる學問或は知識あるを得べからず。アリストートルが二千年の昔に於て既に吾人は事物の中部を知るのみにして其始と終とは俱に知るべからずと説けるは、千古の名言にして、神學者も學術家も同じく屢々之を回憶するを要す。吾人は動もすれば歴史前に於ける人間の狀態に關して學術上若くは神學上の獨斷或は妄計に陥いらんとす。惟にカルビン主義のみならず、ダーウ井ン主義も同じく亦人類の原態に關して臆想を縱まゝにせんとする恐なきに非ず。古傳に所謂初人は智力と道念とを多少暗かに賦與されりた

らんも知るべからず、世間の學術や神學が推量するよりも或は幾層畜生に近かりし者ならんも知るべからず。或は幾層天使に似たりし者ならんも知るべからず。我等が確實に識る所の者は、只左の事實のみ、曰く、人類は、其地上に於ける足跡を及ぶ限り、踪ね溯るに、是れ全く有道徳的なる動作者なりき、而して其己れが爲に歴史を作ることを得るに至れるや、蚤に自ら有道徳的なる記録を作り始めたり。諸歴史上に顯はれたる道徳的意識に徴して之を推すに、人類には其地上に生活せる初よりして今日實地に吾人が歴史上に現實となれるを睹る如き道徳的生活を成すに堪ふる力と望との必ず具はりをりたらんと斷定せざるを得ず。勿論人間生活の極初蒙昧の日に於ては、道徳力も至つて微々たる者なりけん、と臆斷はせらるゝと雖ども、其の微々たる萌芽も猶是れ歴史上に現はれたる後年の開發を來すの推動力たるを得るほどには十分道徳的なる者、また判然と道徳的なる者なりし也。若しも然らざりしとせば、是れ天下の道徳歴史をして合理の發端なからしむる者明瞭なる解



釋を得るとなしに在らしむる者とす。自然(と稱する者)の地境に生じたる第一の道德根は夫の自然中より生長して世界の道德といふ果實を結びたる生命と同種の生命を以て活しめられたる者ならざる可らず。自然の上に道德的意識の超出したる以上は、道德は必らず自然中に十分深く根柢したる者ならざる可らず。自然中には夫の自然が歩を進め行く間に漸々と靈の果實を生じ來りたる道德的及び宗教的超自然主義なる者を吾人に明らかならしむるに足るべき道德的及び宗教的超自然主義を必らずや初より含蓄しむるならざる可らず。然らざれば如何にしてか斯く自然中より超自然主義の出で來ること有らんや。(伊) 是に於てか我等は断定す人間世界には其蒙昧たる太初よりして既に斯く今日に視る如き道德的生活をなすの能力を稟け得て生れたる或る一種の人間然たる存在物ありたりと。或る程度にまで進めるや、進化は(萬事の具備せる時に及びて)已に靈火を稟けたるありて、道德的生活は餘々として自覺の境に上り來れり。斯の如く道德的なる歴史及

び生活を始むるに堪る活物は如何様に形作せられしか。又は何千何萬年前に造出せられたるか。或は科學上の想像に、若くは神學上の關心に多少屬する問題ならんと雖ども、道德學上の觀察點よりすれば、是れ切要なる件に非ず。之を要するに、道德的なる生活及び成長に堪ふる某存在物に於て眞實の道德的なる發程を成したるありと云ふの事、是れ即ち道德學にとりては最大緊要の事件なりとす。アダムは道德生活の太初に於ける人類の總標と長く見做されんも、何ぞ憂ふるに足らんや。創世記を按ずるに、極初の道德程度——人間の道德史中に於ける該第一章——は道德上の幼蒙、即ち無爲無罪、不成熟、不鞏固の態と觀ぜざる可らず。道德的なる生活をなすに足るの域には業已に達して有りしかども、(聖アウガスチンの所謂)眞實の正義は則ち人類の誘惑、墮落、及び回復(救贖)の活劇上に於て現實すべき者として遺れり。

但し創世紀以外に於て聖書中にアダムの事を説けるの甚だ少なきも亦察せざる可らず。自餘の聖經中に在ては僅かに之に論及したる

者數次ある而已。イエスは其教訓中にて絶てアダムを擧説したまはざりしと見ゆ。パウロは舊人と新人の差、屬地者と屬靈者との別を説んとて創世記の最初の二三章に論及せり。之を要するに、歴史前の此道德人は道德的歴史に其必要なる發端を供する者としての外には、道德學上に關係を有する極めて少なき也。

道德的生活の此發端は罪惡の入らんと欲すれば入ることを得たる如き幼稚の程度なりしと吾人は觀ぜざる可らず。律法の入世と罪惡の起始とを理會すべからざるには、唯道德的生活をなすに堪る能力と不成熟なる道德の存在せるを發端に認むるを要する而已。大凡、道德と稱する者の發端には必ず罪惡の入るべき機ありて存す。如何となれば道德の起るは即ち是れ自然界の必然的作用の頭上に一步を轉じたる者なれば也。有限界の邊際内に於てや、道德上の自由は是れ神が己れに在りて活くるの力(神の自滿自足力)を幾分か受造物(人間)に分割し委任したる者と謂ふべし。其本質に於て是の如く神妙なる生活

は、——其範圍に於ては有限なりと雖ども、——亦是れ造物主の一たび授けて復得難きせざる賜物としも稱すべけん。道德的なる活物を創造するは、或る意味に於ては、是れ造物主が自ら己れの力を限れる者とす。一たび其受造物に托するに此神妙なる自覺の意志を以てしたる上は、造物主の信義に厚きや必ず其委托を守りて渝らざるべし。其道德を擔へる活物は或は其觀念を失墜するあらん、其根源を離絶するあらん、其沈淪の甚だしきに至りては靈覺の明を失し、罪に死したらん、然るも尙此生命たるや一遍の號令を以て斷滅せしむべき者に非ず、神の意のままに其元の無道德なる境界に返還さるべき者にあらざ。——道德的なる受造物に於る此永生の賜若し果して賜ふべき價ある者ならば、造物主が其の大愛を受造物に最も厚く願與せんには若し此永生を賜はざる可らざる者ならば、之を失ふの恐あるを免かれざるが如き、一天下に徧く之を枉ぐる事の出來べきが如き、後に之を贖ふの費少なからざるが如きは、因より相權衡して云々するに足らざる也。大愛は其一切

を與ふるに於てや、爲に失なふの恐ある部分の少なからざるを愛へず、是れ其失なふ所をば尙も愛を加へて之を贖なふの力あることを自から信ずればなり。神の愛は靈を以て受造物を活生す、而して活靈魂の中に在りてや飽までも自から與ふるを厭はず。是れ愛なればなり。愛にして愛ならんと欲せば一切を與へざる可らず、是故に惡は禍害を加ふるの力を有すと雖も、愛が己れの如き他の道徳的受造物に其無上の賜物を與ふるを妨ぐる克はず、惟夫の愛をして其の無上の賜物の失なはれたるを挽回するためにも最も貴重なる獻身的痛苦を蒙らしむるを得べき耳。

道徳的受造物の至善は、其性質上明白なるが如く、神力の行業に由て獲らるべき者に非ず、若し獲べくんば、是必ず道徳的生活の結果として、自由境の戰場に於て獲ざる可らず、至善の現實したる福境を眩法然として一舉に造り出すことは、權力の範圍内に在る業にあらず、是に於てか惡の起るべき處は道徳てふ賜物の性質中に固有する者と許さざる可

らず、罪に陥るの恐は徳行に堪るの能力中に合入せる者と認めざる可らず。

諸惡は斯の如く歴史前に於ける人間生活の程度に已に起り得べき機ありし者と認めざるを得ざれば、單に、是れ人類の道徳的歴史に必然なる一變事を以て目すべき者に非ず。或は是間接ながらも亦極めて眞實に至善をして幾層大なる現實を證せしむるの好結果を來すべき者ならんも知るべからず、道徳的なる受造物界に於て善福を圓成せしむるの階梯たる者ならんも知る可からず、完全なる生活の理想境は或は道徳的自由の自ら順従と成りて彰はれ正義と成りて堅く立つに由て、直接に達するを得べく、或は墜落を經、善惡の長戦争を經、遂に十字架の法下に苦を受けて罪惡を脱するの事に由て、長くはあれども、難くはあれども、又同く確にして、間接に其目標たる圓滿境に達するを得べけん。惡の存在は受造物に取りては其圓成に達するの迂回路ならん、然れども受造物界全體のためには却つて其結果の贖なる者あらん歟、聖書中

に於けるアダムの話をして若し道徳的生活の發端に於る道徳的に自然なるの談なりとせば、人類の墮落は一には損と、一には得と考へて可なるが如し。先づ是は無罪の境より罪惡の境に落ちたる者とす、其斯る物としてや是れ損にして且死の痛苦に服せざるべからず、然し乍ら道徳的戰爭の發端にして其が神の愛に局を結ぶは即ち是れ勝利なりとす。惡の力に陥り死の蔭に陥りたる事の如きも亦、神の約束に依れば、是れ救贖の光明裏に影はるべき正義の方へ、一步を轉じたる者なりけらし。一步を降れるは則ち——縦や暗黒を經、死を經るとも——一步を前途へ進めたる者なり。地上の樂園は失なひたれども、天上の樂園は得られんとす。是の如く受造物の道徳的發端よりして、人類の道徳的自由に必然隨伴する惡の機は即ち一轉して、神愛に長久なる善の機とこそは成りにたれ。

聖書の記事に循ひつゝ我等は初人の道徳的環象に關して或る合理的なる推斷を形づくり得べし、即ち道徳的生活は其極初の發端に於ては果して如何なる境界に呼吸したるかを大畧想像するを得べけん歟。此時に方りてや人類は已に動物の境界上へ超出したり。アダムは己れの前に引かれ來し諸動物に名を命じたりと云ふ。初人は即ち群畜を始として萬殊の飛禽走獸に名を命じて、其萬物に靈長たるべき天職を顯はせり。抑も言語は人類が由て以て萬物を統御すべき所以の具なり。人類が斯の如く自由に萬物を觀察するに及びてや、能造的進化の歩履は已業に上進の著しき者にして、道徳的なる關係を思惟するの程度にも亦既に幾分か達したりし。想ふに、此太古の程度に在ては、我が所謂道徳的環象(道徳生活)を形成する材料等は、其至つて單純なる、又其至つて汎漠たる形にて有りしなるべし。茲に何事か先づ初人の今方に醒め來りつゝある意識上に印するに正當の行動たるの感をしてし始めたらん、即ち意志の外に立ち、意志の上に位わし、意志の爲に存する或る者ありて、此に現前して初人の意識に登り始めつゝ、之を逼捉したるならん。

(呂) されば此の極初の道徳的環象に應ずる取用法は如何ぞや。